

裏切りの代紋（前編 2 調教編）

娼婦の適性試験

地下室の一角に並べて置かれたスツールに剛沢を挟んで和久井と黄原が腰を下ろしていた。その三人の前には、それぞれ、晴江と暁美とお竜の三人が全裸のままコンクリートを打ちっ放しにした冷たい床に正座させられていた。

「これで、得心が行ったろう。俺は約束を守る男だ。」

野卑な男達の視線を前にして無防備な裸体を晒し、身体を小さく丸めながら膝を固く閉ざして羞恥の部分を男達からの視線を少しでも防ぎ、両手で必死に乳房を隠して正座する女達を見ながら、眼窩の奥でニヤッと目を光らせて剛沢が発した。

完全に敗北を認めさせられた三人には、最早、歯向かって来る気力は喪失しており縄掛けは不要であろうと、一切の身体を拘束する物無しで目の前に座らせているのであった。

格闘術に優れた男勝りの女達ではあったが、男の目の前に一糸まとわぬ姿を晒し、羞恥に身を染める姿からは、やはり女でしか無かったと、改めて感じ取っていた。

晴江達は、ついさつきまで和久井の診察室で治療を受ける奈和親分の様子を見ていたのだった。

治療室のガラス窓越しではあったが、傷ついた身体に幾つものチューブやケーブルを接続して手術台に横たわる奈和親分の様子を見る事が出来た。

驚いたことに剛沢は、専門の病院並の集中治療室を屋敷の中に持っていたのだった。

手術台の横には心拍や血圧などが表示されたモニターや専門の機械が所狭しと並べられていた。

治療室の内では和久井医師がその外観とは打って代わった様子でテキパキと施術を進めていた。

「世の中には表の病院では治療を受けられない、訳ありの患者は多いからな・・・これでも結構繁盛しているんだぜ。」と、藁にも縋るような気持ちでガラス越しに和久井の動きを注視する女達に向かって剛沢がうそぶいた。

奈和親分の治療の様子を女達に見せて、安心させた後、激しく股間を鞭打たれ満足に歩く

こともままならない女達を再び地下の拷問室に連れ戻したのだった。

女達を地下室から治療室まで往復させる間、女達を取り囲んで警護する男達が、股間を腫らして、激痛に悲鳴を上げながら蟹股の姿勢となって歩く女達の滑稽な姿にゲラゲラ笑い声をあげて、盛んに揶揄し立てた。

そこには、かつて暴力社会の頂点に君臨していた強い女の影は無く、打ち拉がれ、ついさつきまで顎で使っていた子分達にまで笑い立てられる惨めな女の姿しか無かった。

「今度は、お前達が約束を守る番だ・・・」

剛沢が冷酷な目で女達を見回すと、スツールに腰を下ろしたまま、これ見よがしに正面に正座する晴江に向かって股間を大きく開き、ズボンのチャックをゆっくりと降ろすと中から分身を取り出した。

剛沢の左右に腰を下ろす、黄原と和久井もズボンの前を開いて自らの男根を取り出した。ズボンの奥からニョッキリと露出した、毒々しい姿を見せるそれは、既に何かを期待するようにピンと上を向き、大きく膨張していた。

コンクリートを打ちっ放しにした床に正座した女達の目の前に、どす黒くむかつくような男の物が並んでいた。

さあ、と言うように剛沢が顎をしゃくって女達を促した。

娼婦としての素質をテストするためとして、早速剛沢が三人に口唇を使って男に奉仕するように命じたのだった。

そこには、憎んでも余りある敵方の男達の肉塊が屹立していた。

黄原と和久井の禍々しいモノを目の前に見せ付けられたお竜と暁美も助けを求めるように怯えた視線を晴江の方に送った。

晴江は混乱する頭の中でその禍々しい肉塊をジッと見詰めた。

絶対的優勢の中で本来なら簡単に叩き潰していたはずの敵方のボスに捕らえられ、素っ裸にされて、憎い男達の目に晒され、組は潰され、手塩に掛けて育てた子分達も多くは敵方に寝返り、あまつさえ、その信じていた子分から暴行され・・・この一夜の間に起きた余りに多くの出来事が信じられないと言うように激しく首を振るのであった。

その上親分は大怪我を負わされ、その治療費を敵である剛沢から借りる事になってしまい、その借金を返済するため、大亜門戸会所属の娼婦に身を墜とすことになるなんて！ああ！

信じられない、信じられない！—と、この現実を認めることが出来ない気持ちと悔しさで、目を硬く閉じて余りの惨めな現実を振り払おうとするかのように、涙を溢しながら首を激しく振るのであった。

「おい！何時までイヤイヤと首を振っていやがんでえー！さっさと始めないか！」

剛沢が痺れを切らしたように怒鳴り声を上げた。

剛沢の怒気を含んだ声に現実引き戻された晴江は、今は親分を人質に取られているようなものであり、親分の命を守るためには、この男達に逆らう事は出来ない、先ず自分が先頭に立って憎い剛沢の分身を慰める姿を二人に示さなければならない—と、哀しく諦め、憤怒と屈辱の思いを胸に呑み込んで、目を閉じたまま、ゆっくりと上体を前に倒し、雄々しく屹立するモノに怖ず怖ずと顔を寄せて行った。

両隣で暁美とお竜が不安そうに横目で晴江の挙作を見つめていた。

その太いモノに顔を近付けると剛沢の体温に燻されて立ち昇る男の臭いが感じられるようであった。

そっと両手をそれに触れると、煮え立つような熱気と鋼鉄のような硬度を持ったモノに思わず怯えた様に手を離れた。

弾かれた様にビクッと身体を反らせた晴江に何をやっているんだと言うように剛沢が睨み付けた。

剛沢の憤怒の表情に怯えて、全てを諦めた様に両手に持て余る巨大なモノを支え、怖ず怖ずと顔面を近付けていった。

気丈な晴江の細い身体が小さく震えているのを目にして、今にも狂い出しそうになる屈辱感と恐怖を堪えての事と感知して剛沢のサディスティックな心が更に掻き立てられた。

まるで断崖から身を投げる思いで、固く目を閉じると、熱した鉄の様な肉塊に唇をそっと押し当てたのだった。

ツンと来る男の臭いが鼻孔を抉り、晴江の心を掻き乱した。

晴江が剛沢の物に口付けしたのを見てお竜と暁美も諦めたように黄原と和久井の肉塊に唇を触れさせた。

猛々しく硬化した亀頭部の先端に柔らかな晴江の唇が押し当てられるのを感じて、

「そうだ、舌を伸ばして裏筋を丁寧に舐めるのだ・・・」

鯨のはった亀頭に唾液に濡れた舌先を這わせる晴江に剛沢が指示した。

剛沢に命じられるままに晴江がぎこちなく舌先を這わせた。

野獣の臭いにも似た剛沢の性器から立ち昇る臭いに、頭がくらくらとなりそうになるのを必死に堪えて舌先の奉仕を続けるのであった。

「亀頭全体を隈無く嘗め終わったら、次は口の中に含むのだ・・・」と、女達に隆々とした肉塊を啜えるように命じた。

つい何時間か前までは、荒くれ男達を顎で使っていた、凜とした雰囲気醸し出していた暴力団の大姐が素っ裸に剥がれて、今自分の目の前で正座させられ、荒々しい牡の匂いを漂わせる分身を、その柔らかい唇を使って愛撫させられていると思うと、痺れるような勝利の快感に包まれて晴江の口内でその大きさが一段と膨張するのだった。

今や女達は敗北感に打ち拉がれ、嗚咽を堪えながら、嘔吐を催すような不快な臭いのする三人の男のズボンから突き出した肉塊を口内に含み、口腔での奉仕を続けさせられていた。スツールに浅く腰を下ろした和久井が、股を大きく広げ、曉美に怒張をしゃぶらせながら、レントゲン写真を示して詳しく症状の説明を二人の男にしていた。

晴江に自分の持ち物をしゃぶらせながら、剛沢がどのようにして奈和組長をそのような状態まで痛め付けたのかを嬉しそうに和久井に説明した。

当然その話は、自分たちの男根に口を使って愛撫し続ける三人の女達にも聞こえているはずであり、辛い話をわざと聞かせて女達の心を掻き糞りたいという剛沢のサディスティックな態度が現れていた。

時々笑い声を上げて語り合う男達の怒張が口内で膨張するのが感じられた。

耳を塞いでしまいたくなるような辛い話を面白可笑しく話す男達に対しても、何とか奈和親分を助けて貰いたい一心で、心無しにして口で奉仕しようと努める女達であったが、勝利者達の笑い声に、思わず口内で隆々と屹立した男根に対する口技が疎かになることがあった。

その都度男達から叱咤されて、深く喉元まで押し込むように後頭部を掴まれて股間に向かって押し付けられ、この残忍な男達への惨めなサービスを強要させられているのであった。

剛沢の話聞きながら、和久井は、

「それは、普通の人間なら5、6回は連続して死んでも不思議では無いな。」と、自分の下

手な冗談が、さも気に入ったようにヘラヘラ笑いながら剛沢達に返した。

必死の思いで口内に含み舌を駆使して和久井のモノを扱き上げる暁美の舌先を鈴口から滲み出した先走りの体液が刺激した。

それと共に口腔に突き立てられた肉茎の温度と硬度がグングン増していくのが感じられた。

「ただ・・・どうやら、あの男は化け物並の生命力をもっているようだ。ひょっとすると助かるかも知れん・・・まあ、この48時間が勝負だな・・・」と、暁美による口を使つての奉仕の感激するように掠れた声を発すると、続けて、

「ただし、命が助かったとしても全身不随は免れん・・・記憶や知能が、真ともかも怪しいもんだ・・・」

「返って、その方が好都合でもんだぜ。」

剛沢が嬉しそうに呟いた。

和久井にしてみれば日頃接した事の無い若い美しい娘の口技にゾクゾクする快美感が込み上げて来ており先程から腰をビクビクと震わせ始めていた。

「何時までもこうしておれん、これから忙しくなる・・・」

と、一言上擦った声で言うと、突然ウツと呻き声を上げて、腰を痙攣させ、暁美の口の中に精液をドツと放出し、そのまま数度腰を緊張させた。

そして、暁美の口腔内から唾液と分泌液に塗れて濡れ輝る半勃起したままのモノを抜き取ると、スツールから立ち上がった。

突然大量の生臭い精液を口内に排出され、目を白黒させる暁美を見て、剛沢や黄原が「折角、和久井先生が下さった大切なエキスじゃ無いか！吐き出さず全部飲み干すんだ！」と、厳しく命じた。

今まで恋人の青沼のモノを口を使って愛した事はあったが、口内射精させた経験の無い暁美は、どうして良いか分からず、目を白黒させて、嘔吐を堪えながら必死の思いで和久井が残したものを飲み干そうと努力した。

若い女の口内に堪えに堪えていた精を放出して、スッキリとしたのか和久井はズボンを上げて、白衣を戻すとそそくさと立ち去ってしまった。

もういい！とばかりに苛立たしげに、剛沢が晴江の顔を乱暴に押し退けた。

「素人の和久井先生なら兎も角、こんな下手糞な尺八では話にならん！お前達が相手をするのは、素人じゃなくて、金に糸目を付けず女と遊んで来たその道のベテランばかりなん

だぞ！こんな下手糞なおフェラじゃ客が怒り出してしまうぞ！これではとても人前に出せるような代物じゃないな。明日から徹底的に調教だ！」と、不安そうな表情を浮かべる女達の顔を見据えながら宣告した。

地下の拷問室の端には、まるで監獄の様に鉄格子の付いた監禁室が幾つか並んだ一廓が設けられており、女達は全裸のまま別々の牢に押し込められた。

牢の中には錆の浮いた鉄製の簡素なベッドが一つと、その上にカビ臭い薄いマットレスと粗末な毛布が置いて在るだけであった。

「ここは、俺たちに逆らった奴らを閉じ込めておく所だから何も無いが、お前達は今日から大亜門戸会の大切なお抱え女になった訳だから、明日になったら、ベッドももっと柔らかい物に代えてやるし、布団もフカフカの物にしてやる。鏡台や化粧品も入れて上げよう。今日の所は、我慢してこのまま寝て体を休めろ。」

それぞれの牢の中に押し込められた女達を見回しながら剛沢が言った。

「いいか？これは、監禁では無く軟禁だ！何しろ無担保で一人当たり二千万もの大金を貸しているのだからな、夜逃げでもされたら元も子も無いからな。借金を全て返し終えたら、何時でも大手を振ってここから出て行っていいんだぜ・・・」

と、うそぶいた。

剛沢を取り巻く子分達の中に元目高組の三下達も混じって、ギラギラした嫌らしい目で一切の身に付ける物も取り上げられ、糸纏わぬ惨めな自分達を眺め回している様子が目に焼き付いた。

用を足したくなったらこれにしると、蓋付きのポリバケツとティッシュペーパーの箱を檻の中に投げ入れると、ガチャンと乱暴に鉄格子の扉を閉めて、大きな南京錠で施錠した。

楽しげに笑いながら剛沢達が立ち去った後、牢の中には三人の裸の女だけが残された。

中央の通路を挟んで向かい合わせに独房に入れられた女達は、鉄格子を握りしめ互いに目を見交わすが、声を掛けることも出来ないでいた。

和久井から治療と称して、傷口を消毒して消炎鎮痛軟膏を擦り込まれていたが、鞭打たれた柔肌は熱を持って腫れ上がり、ズキズキと痛みを発し続けていた。

全身は綿の様に疲れ果てていたが、とても容易に休みにつける心境にはなれなかった。

圧倒的な優位の中での逆転負けと目高組の崩壊、親分の大怪我、元の子分達から加えられた屈辱の数々・・・昨夜から今日の間起きた目まぐるしい状況の変化に、ただ黙って涙

を流し続けるしか無かった。

重苦しい静寂に包まれた薄暗い牢舎の中で、悲嘆に暮れる娘とお竜の様子を見て、母として、そして組を預かる大姐として、自分も一緒になってメソメソしていたらいけない！—何とか敗北感に打ち拉がれる彼女らを勇気付けなければならない！—と、気を取り直した晴江が、向かいと隣の牢に押し込められた暁美とお竜に声を掛けた。

「みんな！挫けちゃダメよ！剛沢の卑怯な罠に嵌って殴り込みに向かった組員は、全員逮捕され、半分以上の組員を失ってしまったその上に、残った組員も大亜門戸会に寝返ってしまって、なるほど今は大亜門戸会の人数の方が圧倒的に多くなったけど、目高組には親子の杯を交わし会った直接の傘下の親分が全国にいるのよ！

これらの下部組織が一丸となって掛かれば、人数においても今の大亜門戸会なんて目じゃないのよ！それに奈和親分の親筋に当たる村崎親分もこの窮状を知ったら、きっと私たちを救援に駆け付けるわ！」

晴江は、声を張り上げて二人を鼓舞しながら、ともすれば崩れそうになる自分自身にも言い聞かせるように声を上げるのだった。

実際、奈和組長と親子の杯を取り交わした系列の暴力団や表向き企業の顔を被った企業舎弟が近隣の都市も併せて全国に42組織持っていた。

今回の出入りではこれら系列の組の力を借りなくても、簡単に片が付くと思っていたため、これらの組織は無傷で残っていた。

自分が命乞いして助けてやった赤石やその他の幹部連中が、これらの組織を統合して復讐戦を仕掛ければ、弱小の地方の暴力団の連合と云えども、その人数において大亜門戸会を遙かに上回る筈であった。

そして、もう一つの希望は、全国の大きな暴力団が加盟する日本でも有数の暴力団体の超大組織である村崎會の村崎會長と奈和親分は、直接親子の杯を交わしていることだった。子の窮状を親が見放す訳が無いと確信していた。

「日本有数の組織力を誇る村崎會が立ち上がったら、大亜門戸会も一瞬で壊滅するのだから、それまで、もう少しの間だから我慢して堪えるのよ！」

と、鉄格子を掴んで二人に声を掛けるのだった。

そして、口には出さなかったが、晴江にはもう一つ確信している事があった。

それは、晴江の実の父が莊那井（しょうない）組と云う地方のヤクザの組長で在る事であ

った。

目高組の残党も吸収して巨大化した今の大亜門戸会には、弱小の父の組では荷が大き過ぎるかも知れないが、愛する娘や孫のためには死に物狂いで挑み掛かって来るものと信じていた。

今は、どんな辱めを受けても、この恥辱を何としてでも堪え忍んで、時を稼げば、やがて味方の反撃が開始され、この屈辱を何倍にもして返せる一と、声を励まして二人を勇気付けるのであった。

調教開始

翌日、晴江とお竜が監禁部屋から連れ出され、剛沢と黄原の前に引き立てられて来た。

晴江もお竜も全裸のまま、牢から引き出されると、幾人ものチンピラ達に取り囲まれて地下室を歩まされて来た。

卑猥な笑みを浮かべて女達を粘っこい目で上から下まで眺める大亜門戸会のチンピラに交じって、昨夜入会を認められ大亜門戸会に鞍替えしたばかりの良く知ったチンピラ達も混じっていた。

親分から受けた恩義も忘れて、立場を180度変えて、居丈高に取り囲む男達の輪の中で恥ずかしそうに両手で胸と股間を隠しながら、俯き顔を赤く染め、前屈みになり歩幅を縮めて内股で歩く姿を彼らは好奇の視線で眺め回した。

ついこの間までは、自分の権勢を誇示するために、大勢の荒くれ男の取り巻きを引き連れて、縄張り内の繁華街を威風堂々と押し歩いていた女親分の威厳は一夜にして喪失してしまい、これまで自分が引き従えていた荒くれ男達に取り囲まれ、一片の布切れも身に纏わない、女としてこれ以上無い惨めな姿で、薄暗い地下室を歩まされている姿を見ると、まるで信じられないような気分になるのだった。

元目高組の三下達にとって、常々大姐達の艶やかな美しさに心惹かれていたが、組のトップに君臨するこの女達に恐れのような物を感じ、普段の着物姿さえもまともに見詰める事も憚られたのだった。

豪華な着物からのぞく白い襟足等をちらりと盗み見ると、その妖艶さに心奪われ、その着物の下の裸体を想像して一人慰めることも度々であったが、今は想像ではなく現実として

一糸纏うことも許されぬ全裸姿を元の子分達の目に晒しているのかと思うと、これは本当の事かとまるで夢の中に居るように感じるのであった。

その親分しか知らない裸身を見ることが出来れば目が潰れても構わないと思いついていたのだが、今は憚ることなく上から下まで隈なく艶媚な全裸像を目にすることが出来、心臓の鼓動が早くなるように感じた。

一方、空手や武道で鍛えられた強靱な筋肉で覆われたお竜の腰部は、女らしい柔らかな脂肪がプックリとその上を覆い、とても男どもをなぎ倒す強い女とは感じさせない如何にも成熟した女の豊かに左右に張った双臀を形作り、歩く度に官能的に尻が左右に揺れ動く様を見ると、信じられない思いで目をパチパチとさせ、大姐の脂肪の少ないほっそりとした腰付と、背中から臀部まで施された極彩色の彫り物を直視すると、二人ともこの世の者とは思われない何か魔力じみた力を秘めた女の様に感じられ思わずブルブルと顔を振るわせるのであった。

信じられない思いで、再び大姐達の姿をじっと凝視すると、やはり、そこには男達の卑猥な視線から羞恥の部分を少しでも隠そうと、両手で胸と股間を必死に隠しながら、羞恥に苛まれ顔を赤く染め、身体を小さく縮めて歩む哀感を漂わせる姿があり、この女達も今まで自分達がコマして来たそこの女達と何も変わる所は無いと気が付き、これまでビクビクしながら仕えて来た男達は、妙に安心するのであった。

男達の好奇な視線を少しでも避けようとして、腰を落とし股間を締めてヨチヨチ歩く女達に、歩くのが遅い！と嵩に掛かった様に周囲の男達が剥き出しの尻を激しく平手で叩いたり蹴り上げたりした。

その都度身体をよろめかせて、小さく悲鳴を上げるだけで手向かい出来ない女達に心の中で快哉の声を上げるのであった。

まるで搗きたての餅のような白く柔らかな双臀を殴打する時の気持ちの良い掌に残る感触に、これまで身を縮めて傳ってきた女達に対する恨みを晴らしたような感激に浸るのであった。

周囲を取り囲む子分達に肩を小突かれたり尻を蹴られたりしながら、幾つにも仕切られた地下室を通り抜け、自分達が昨日折檻を受けた拷問室の一廊に連れてこられたのだ。

昨日一日の間に、地下の拷問室も模様替え工事をしたようで、だだっ広かった地下室がベニヤ壁で幾つかの区画に仕切られていた。

「今日は先ず、お前達の体の構造を良く見せてもらおう。」

剛沢と黄原が待ち受ける十畳程の広さのベニヤ板で仕切られた区画の中に引き立てられた全裸の二人の前に仁王立ちした剛沢が口を開いた。

剛沢はいつもの様に黒いスーツを着込みサングラス姿で、その隣にはやはり黒スーツ姿の黄原の姿があった。

剛沢は子分達に命じて、踏み台の様な形をした方形の鉄製の枠の上に黒革のマットを敷いた台を運び込ませた。

不気味な雰囲気を醸し出すその台を不安げに見詰める二人の女に気付いた男達は、台を運びながら、

「へへ・・・コイツはな、俺たちの組の中で検診台と呼んでいる・・・まあ、女体の解体ショーに使うまな板みたいなもんだ！」

と、不安そうな目で見詰める女達を更に怯えさせる様に、そして大亜門戸会に鞍替えした元目高組の三下達に自慢する様に、得意気に声を上げた。

検診台と呼ばれている台は、縁台ほどの高さと同幅の四本の脚が付いた重量のある金属製の台で、上面はクッションを詰めた黒い牛革張りとなっていた。

長さは 70 センチ程しかなく、革のクッションの上に女を横たえ、両手と両足を四本の脚に取り付けられた金属環に縛り付けると、女の身動きを完全に封じることが出来るように作られていた。

そして、検診台に拘束され女は、大きく股を開いた姿勢で腰を台からはみ出した状態で固定されてしまうため、台からはみ出して剥き出しとなった股間に対して加虐者は、自由に騎ることができ、絞め具合の練習をさせたり、また台の脚に付けられたジャッキを操作して高さを調整して、女の顔の部分を男の股間まで上げてフェラチオの練習をさせたりと、女性の性技を磨くために使用しているのだった。

良く鞣された艶のある黒革のクッションの上には、これまで多くの女達が流した脂汗と体液によりくすんだ染みが浮かんでいた。

検診台の直ぐ傍には、食堂の配膳で使うようなステンレス製の大型のワゴンが置かれ、その上には幾つもの卑猥な形をした性具や不気味な金属製の器具がこれ見よがしに並べられていた。

女達は、この四隅の脚に拘束用のベルトが取り付けられた革張りの台と冷たい光沢を放つ

ワゴンの上に並べられた気味の悪い器具を見て、その使用目的を本能的に感じ取り、暗い気持ちになるのであった。

剛沢は更に子分達に、検診台の両端にステンレス製の器具を取り付ける様に命じた。

剛沢の命令を受けた子分達は、嬉しそうに、

「エエーッ！コイツを取り付けるんですか？こんなもの使われたら普通の女なら恥ずかしくて気が狂ってしまいますよ！」

と、はしゃぐ様に大声を上げるのだった。

男達は手慣れた様子で検診台を支える太い金属の足にレンチを使ってステンレス製の器具をボルト止めして行った。

検診台に取付の終わった姿を見て、それは産婦人科の分娩台の脚載である事が、女達は理解した。

産婦人科の分娩台の脚載と違うのは、その器具は太い柱が取り付けられ、検診台と呼ばれる台の脚にボルトでしっかり固定されている事であった。

良く磨かれたステンレスの緩やかに湾曲した女の脚を載せる部分には太い革ベルトが取り付けられていた。

革張りの検診台の上に仰向けに載せられ、その両側に取り付けられた脚載に両脚を思い切り開いた姿勢で固定されてしまったら、秘部を男達の目の前に露出した姿勢で身動き出来なくなってしまう事は^{あきら}瞭かであった。

こんな台に乗せて女の恥ずかしい部分を開いて、自分達に恥をかかそうと計画しているのだと想像すると、男達の下劣な下心を見透かした様に、逆に妙に落ち着きの様なものを感じ、全く見下げ果てたスケベでゲスな男達だよ！と、侮蔑するような目で剛沢を睨み付けて、「下劣な男と云う者は、女をどう料理するものか、わたしゃじっくり見せて貰いたくなりましたよ！」と、毒突くのであった。

力では剛沢に敵わないことを思い知らされ、その上、大怪我を負わされた奈和親分を人質に取られている状態では、この卑劣な男達に面と向かって逆らう事も出来ず、ふて腐れた表情を浮かべて剛沢達に対するしか無かった。

目高組の大姐の思わぬ反発を受けても、この後の淫靡な責めを計画している剛沢にとって、無抵抗より責め甲斐があると、無言のままほくそ笑むのであった。

この不気味な台の上に自分達を載せ上げていたぶろうとしているのだろうという晴江達の予想は半ば当たってはいたが、剛沢の事を余りにも見くびり過ぎていたと、後になって嫌

と言う程思い知らされる様になるのであった。

黄原から顎で、ここから立ち去る様に指示された三下達は、これから女達がこれらの淫猥な道具を使ってどの様な辱めを受けるのか見届けたい気持ちは在ったが、大幹部の指示には逆らいようもなく未練そうに立ち去った。

目高組から鞍替えした男達も混じった手下達が去った事で、つい昨日まで顎で使っていた子分達の目にこれ以上恥ずかしい姿を晒す事が無くなり、少しホッとしたものを晴江達は感じていた。

不気味な気配を醸し出す、女体責めの道具の前に怯えた目の色を浮かべて立ち尽くす二人の女の様子を剛沢は冷たい目でじろっと眺め回すと、股間を隠していたお竜の右手を捻るように掴み挙げ、力尽くで検診台の傍まで連れて来た。

台は一つしかないので、先ずお竜を台の上で陵辱してから、その次は自分の番だろうと晴江は覚悟したが、最初が自分で無かった事に、少しホッとした気持ちになるのであった。

剛沢の力の前には抵抗しても無駄で在ることを骨身に滲みて教え込まれたお竜は無抵抗に剛沢に引きずられるように黒革の台の上に押し上げられた。

そのまま、お竜を台の上に押し上げ、仰向けに寝かせると、黄原も手伝って台から垂れ下がった両手を台の脚に取り付けた鉄環に縛り付けた。

「お前達は抵抗の出来ない女の股をこじ開けて楽しいのかい！？そんなに見たいなら、ほら！見せてやるよ！」

力では剛沢に敵わない事を思い知らされたお竜は、台の上で両股をこじ開けられながら、刃向かえない悔しさをぶつける様に激しい言葉で毒突き続けた。

そんな、お竜のヒステリックな罵声に顔色一つ変えることなく、お竜の両側に立った剛沢と黄原は、肉付きの良い太股を左右からガッシリと抱え上げ、ステンレスの脚載の上に載せて装備された革ベルトで固定して行った。

不安げな目で作業を見詰める晴江の目の前に、ヒステリックに泣き叫ぶ様な声を上げながら、小さな台の上に天井を向いて横たわり、尻をこちらに突き出して、まるで赤ん坊がオシメを代えられる時の様に両脚を上に向けて大きく股間を開いたお竜の姿が在った。

飾り毛を奪い取られた股の間には、隠す術もなくお竜の女の部分が露呈していた。

お竜が台の上で大股を広げたまま、身動き出来ないことを確認すると、剛沢は呆然と立ち尽くす晴江の手を掴んだ。

自分の番はまだ後だと思っていた晴江は狼狽した様を見せた。

そんな狼狽^{うろたえ}える晴江の様子も気にしないように、お竜が仰向けに横たわる検診台の傍まで連れて来ると、晴江の腰に手を回し、小柄な晴江の身体を軽々と抱え上げた。

そして、そのまま、お竜の身体の上につ伏せに重ねるように寝かせようとした。

ただしこの時、晴江の股がお竜の顔を跨ぐようお竜の上に乗せた。肉付きの良いお竜の裸身の上に晴江の細身の裸身が被い被るように横たえられた。

突然の剛沢の行動に晴江もお竜も狼狽して悲鳴の様な声を上げて身を振った。

そんな女達の身悶えも気にならない様に、黄原も手伝って晴江の両手両足を台の脚にかちりと縛り付けて固定した。

こうして互いのパツクリと開いた股間に顔を埋め込むような体勢で固定されてしまった。

晴江は小柄で痩せぎみであったため、自分の体の上に乗せられても、お竜はそれほど重くは感じていなかったが、それより自分の直ぐ目の上に晴江の開ききった股間とその中心の生々しい熟れた割れ目が、目に焼き付き狼狽した。

サブのカミソリにより綺麗さっぱり剃毛された局部は、何も遮る物が無く成熟した女の深淵を赤ら様に晒していた。

暴力団の大姐として長年君臨し、畏怖の念を持って仕えていた男勝りの女親分がこんなにも婀娜っぽい女性の象徴を持っていたのかと、神秘の褻に覆われた女である部分を目の前にして、見てはならない物を見てしまったと目をつむり思わず顔を背けた。

晴江にしても、度胸でも腕っ節でも男に決して引けを取ったことの無いお竜の無残にも力尽くで飾り毛を抜き取られ腫れの残る丸出しとなった媚めかしい盛りを迎えた女体の中心を眼の下に見て、思わず目をそむけた。

お竜と晴江が互いの女性器を間近に見る位置で、身動きすることも出来ず、がっちり固定されたことを確認して、剛沢が手を叩きながら、二人に話しかけた。

「どうでい、いい格好にさせてもらったろう？これで互いのマ[■]が丸見えだろう。お互い、一つ竿を収め合った穴同士じゃないか？そこの色や形や匂いなどを互いに評価しあったらどうだ？」

と、哄笑しながら大声でわめき立てた。

互いに相手の股間に顔を埋め込むような姿勢でガッチリと固縛され、剛沢達の方を振り向いて侮蔑の視線を送ることも困難な体勢を強要され、晴江は見るとも無しに正面にマザマザと据えられたお竜の剥き出しの股間に目を向けた。

晴江と奈和親分の間には、この3年程情交が途絶えていた。

夫が親友と信じて疑わなかった岡照組の岡元親分に拉致され陵辱を受けるという忌まわしい事件があった。それ以来奈和は晴江との行為を避けるようになっていたのだった。

そして、奈和の性欲のはけ口はお竜に向かっていた。

奈和と結ばれて以来、夜毎夫の鋼の様に逞しく、尽きることの無い男の精力に慣らされ、女体の喜びと云うものを、この身に染み込まされて来た晴江にとって、夫から相手にされず、一人閨房を託つのは、性の喜びを熟知した成熟した女の身には苦しみ以外に無く、自分に代わって女の喜びを教え込まれるお竜に密かに嫉妬の思いを抱いたが、組みを預かる大姐の立場として、組内に波風を立てないよう、夫以外の男と交わることもせず、お竜に嫉妬の刃を向けることも無く、複雑な思いを押し殺し、平然とお竜に接していたのだった。今、眼前に夫の肉塊を受入れ、歓喜の思いに浸ったであろう、媚めかしい姿を晒す女の中心を見つめて心は激しく乱れるのであった。

じっとお竜のその部分を見詰める晴江に気付き、突然、黄原がお竜の秘裂を飾る柔らかな肉襞に指を掛けて、左右に大きく押し開いた。

自分の情人の妻に秘奥を晒す羞恥にお竜の下腹が戦いた。

剛沢もつられた様に、このままでは中の方が良く見えないかと、指で晴江の未だ赤く腫れが残る襞を指で押し広げた。

腫れが残る性器を無骨な男の指で触られる痛みと、同性に一しかも自分の夫の愛人に自分の秘密の場所を晒す羞恥に悲鳴を上げた。

「いい歳こいて何を小娘みたいに恥ずかしがっていやがる！」と、剛沢が晴江の尻を素手でパシンと叩いた。

「どうだ？女親分のオ●は、そこいらの壺振り女とは、貫禄が違うだろう！と、奥の奥まで見せ付けてやれ！」

嵩に掛かって剛沢が晴江の花弁を両手の指を使って押し広げ、その奥の赤く熟した牝芯を露わにした。

言葉の通りその花芯の奥までお竜の眼前に晒したので、思わず顔を背けて硬く目を閉ざし

た。

「お前も親分を寝取った若いオ●●●を姐さんに見せ付けてやれ！どうだ？悔しいだろう？と言ってやれ！」

真似して、黄原がお竜の柔らかい股の間の肉貝をこじ開けて内部構造を晴江の目に見せつけたので、今度はお竜が悲鳴を上げた。

「どうだ、ここの具合は？お互いに自分の方が良い持ち物をしていると思っているんじゃないか？」

剛沢が楽しそうに二人をからかった。

「お前達を買う客の中にわな、二輪車と言って同時に二人の女を相手にしたがる奴もいるんだ。そういう客は大抵、先に女同士の中の絡み合いを堪能して、自分を奮い立たせてから、抱こうとするもんだ。これから女同士での責め方やイカせ方を練習させてやるぜ。」互いのマ●●●に鼻先や唇を押し付け、刺激し合うんだーと、お竜の髪を鷲づかみにすると、晴江の股間にお竜の顔をグリグリと押した。

黄原も真似をして、晴江の顔をお竜の股間に押し付けた。

昨日から入浴していないため女芯は濃厚な匂いを貯え、その女の中心部に顔面を無理矢理押し付けられ、激しい羞恥を感じて思わず顔を背けあつた。

「ただ頬擦りするだけじゃない、相手の気分が乗ってきたら、舌を出して大事な所を舐め合うんだ！」

互いに羞恥に顔を赤く染めて中々女同士の行為を開始しない女達に焦れた様に、

「何時まで小娘みたいに頬を赤く染めてモジモジしてやがんでい！さっさと始めねえか！」

と、拳を握った状態で人差し指を上げて、その曲げた指の角でお竜の秘所をグリグリと扱き上げたので、思わずお竜が悲鳴を上げた。

黄原も剛沢に倣って、グリグリと晴江の秘所を責め上げた。

剛沢の命令に抗し切れない事を悟った晴江が、「お竜、許しておくれ・・・」と、小さく呟くと、剥き出しになったお竜の花びらにそっと口づけした。

晴江の優しい唇を急所に感じて「ああ・・・姐さん・・・」と、お竜が甘い声をもらし、涙を浮かべて晴江の大腿に頬擦りした。

二人の女は、抵抗しても無駄だと諦めたように、大人しく剛沢に命じられるままに、シットリと湿り気を帯びた互いの女性器を唇で摩り、鼻の頭で微妙な部分を突き上げ始めた。

「どうだ？お前の亭主を寝取った女の■■■■はどんな臭いがする？」

剛沢が鼻の頭を使い、お竜の華洞を突く晴江に声をかけた。

晴江は組長の女房として、亭主が愛人を作ることは、男の甲斐性であり、仕方がない事だと思っていた。そして愛人に嫉妬せず、組長の背後と組の秩序を守るのがヤクザの組長の女房としての務めだと自分に言い聞かせ、これまで我慢して来たが、やはり剛沢に露骨に言い立てられると複雑な気持ちとなり、お竜のその部分をじっと見つめるのだった。

「姐さんの歳取ったしわくちやマ■■■■を見たら、組長じゃなくても私の若いピチピチ■■■■コに乗り換えるわーと、姐さんに言ってみろ。」

黄原が真似をして笑いながらお竜に声を掛けた。

お竜の方も、決して奈和組長を寝取る気持ちはなかった。あの事件の後、半ば手込めにされるような形で、奈和組長に抱かれ、強引に愛人として囲われていたのだった。

それまで組長に恋心を抱いたことは無かったが、目高組に入って以来、畏敬の目で見ていた組長から抱かれたことが、嬉しかったことも事実だったし、逞しい組長に抱かれて幾度も女の喜びを極めたことも事実であった。

それ以降、組長とお竜の関係は目高組の中では公然の秘密となっていた。姐さんは素知らぬ素振りをしてくれるが、姐さんとすれ違う度に何時もすまないと心の中で詫びるお竜であった。

奈和組長もお竜を愛人にした秘密が組に波紋を拡げるのは拙いと思って、妾宅を買い与えお竜を住まわしていたのだった。それ以来お竜も目高組の事務所に顔を出す機会は少なくなっていた。

そして、久しぶりに姐さんと会う機会がこんなに惨めなものになるとは・・・

姐さんの開け放たれたその部分を今日の前に見ることになり複雑な気持ちとなるのだった。

「何時までも違いのマ■■■■を眺め回すばかりではなく、もっと舌を出して舐め合ってみろ。ひよっとすると親分のナニの味が残っているかも知れないぞ」と、剛沢が笑いながら二人に声を掛けた。

そして、男達に命じられ、全てを諦めた二人の女は、おずおずと舌を伸ばして互いの花園を舐め始めるのだった・・・

その頃、拷問室の別の仕切りの中では、暁美が銀子の調教を受けていた。

「怪我をした父親の治療費を稼ぐために、自分の体を売って金を稼ぐなんて、今時泣かせ

る話じゃない。その親孝行に免じて、特別に無料で教えて上げるから良く覚えるのよ。」

銀子が乗馬用の短い鞭を手で振り回しながら暁美に言った。

銀子の出で立ち、編み目の大きな黒いパンストの上に、ピンヒールの膝まである長い光沢の有るエナメル仕上げの黒革のブーツを履き、黒革のブラジャーとズボン吊りで吊り上げられた黒革のホットパンツ姿で、頭にはナチスドイツの将校の帽子をまねた黒い軍帽を被り SM の女王然としたいかにも芝居がかった格好をしてきていた。

一方暁美の方は相変わらずの全裸のまま、銀子の前に正座させられていた。

暁美は犬のように長い鎖の付いた首輪を詰められ、その鎖の端は、ストールに片脚を載せた銀子が握り締めていた。

整形手術によるものとはいえ、生まれ付きの美顔の上に更に美形を強調した暁美の色白で彫りの深い西欧系の顔立ちと、南方系の血が混じった様な、ぱっちりした、どこか東南アジア系スターを連想させるエキゾチックな銀子の顔・・・歳も暁美が二十歳を迎えたばかりで、銀子はまだ二十歳後半だ。

そのままモデルにしても通用するのでは無いかと思われる二人の美女が相對して、これからの様な場面が出現するのかと期待して集まった大亜門戸会の若い組員達が期待の籠もった眼差しで見詰めていた。

大亜門戸会のチンピラ達も、さすがにボスの剛沢や黄原には遠慮して、晴江とお竜の調教場面を見学するのは憚られるが、自分達と歳の近い銀子には、気兼ねする物は無く、ここに大挙詰め掛けたのだった。

この SM の女王と牝奴隷とでも言うような若い美女同士の調教場面に、調教室を埋め尽くすように大勢見物に詰め掛けていたチンピラ達は、興奮も露わに熱い息を吐きながら卑猥な色を目に浮かべて眺めていた。

目の前に集まった多くのギャラリーに気を良くした銀子は、いかにも SM の女王然として、暁美との間に置かれたスツールに片脚を載せて体を傾け、手にした鞭で暁美の背中をツンツンと叩き、犬の様に四つん這いになるように無言のまま指示した。

暁美が銀子の指示に従い、渋々正座していた上半身を前に倒し手を前についた。

暁美が四つん這いの姿勢を取ったのを確認して、次に銀子は暁美の尻を、鞭の先で軽く叩いて腰をあげるように指示した。

高く尻を持ち上げたため剥き出しとなった、剃毛され覆い隠す物の無い陰部を目に焼き付けようと、見物人達がぞろぞろと暁美の背後に回った。

そして、口々に「オオ！良く見えるぞ！とか、これがお嬢のオコカ！と興奮して叫び声を上げるのだった。

ギャラリーの反応に気を良くした様に、無言のまま鞭の先で小さく叩きながら、曲げていた暁美の両脚を真っ直ぐに伸ばさせ、一杯の高さまで尻をもたげさせて、更に脚も開かせて剃毛され隠しようも無い秘められた場所が見物人から更に良く見えるようにした。

その部分の佇まいがクッキリと露出して、見詰める若いチンピラ達から歓声が上がった。

「可哀想に・・・大事な所を男達から散々鞭で叩かれて、まだ鱈子みたいに腫れが残っているわね・・・」

治療を受けてかなり腫れは引いているが、まだ赤黒く腫れ上がった陰唇に銀子が指を触れた。

痛みが残る繊細な襞を銀子の指先でソロリと撫でられて、暁美の身体がビクッと痙攣した。

「青沼に抱かれて、ここはもう処女じゃ無いわね。」

組長の娘である暁美と若頭の青沼の関係は目高組の中では、公然の秘密であり当然銀子も知っていた。

ちょっと、此処の様子を確かめさせて貰うわよーと、言うのと両手暁美の陰唇を押し開いた。隠されていた部分が露骨に晒され、羞恥に暁美が腰を振った。

「何を恥ずかしがっているのよ！あなたはこれからマコカの奥だけじゃなくて、中の臓物まで残らず客の目に晒すことになるのよ！」

と言うと、赤く染まり羞恥にブルブル震える暁美の尻を平手で叩いた。

「まだ余り青沼とは経験をしていないみたいね？・・・ふふふ、隅の方にまだ処女膜が残っているわよ！可愛いわ！でもこんな物これから受けるトレーニングの間に擦り切れて無くなってしまおうけどね・・・」

銀子は潤滑ジェリーの入ったチューブを手にするると、右手の中指にジェリーを塗し、そのままスルリと暁美の肉洞に突き入れた。

突然自分の秘めた箇所にも中指の侵入を受けて暁美はアアッと声を上げて体を硬直させた。

「今日の所は初めてだから潤滑剤を塗って上げるけど、練習して四六時中ここを濡れ濡れにしておいて、何時でも男の物をスルリと受け入れられる様にしないとだめよ。」と、暁美の内部を中指でまさぐりながら声を掛けた。

いつ何時、前技も無しで、突然男から性具や怒張を突き立てられても受け入れられる体にしておかなければ駄目だと言うのだ。

そして、何時でも濡れたままの体になるようにこれから鍛えて上げると言うのだった。中指でまさぐり十分暁美の内部を吟味して、「内部の襞の具合も悪くは無いわね。素質は有りそうだよ。」と、言った。

今まで見下していた壺振り女に秘所を騷られる屈辱を硬く歯を食いしばって堪えていた暁美であったが、敏感な部分を這い回る銀子の巧みな指使いに思わず息が漏れた。

暁美の秘所が潤いを持ち始め、入り口が充分柔らかくなって来たのを見計らって、更に人差し指も入れて二本の指で内部をまさぐり始めた。二本の指を内部で広げたり曲げたりしながら腔壁の圧力を確かめた。

「一緒に連れて来た麗夜って娘は、素人の安い客相手の娼婦にするつもりだけど、あなた達が相手をしなければならない客は、金にあかして大抵の女遊びは窮め尽くした、この道のベテランが相手なのよ。」

銀子は一昨夜ここに一緒に連れ込まれた少女の事を思い出しながら言った。

この女達の片が付いた後で、大亜門戸会の男達から散々輪姦されながら泣き叫ぶ少女の痛ましい姿が蘇った。少女は驚くことにまだ処女であった。

赤石から射たれた麻薬の影響はすっかり無くなり、平常に戻った女体に男達が容赦無く襲い掛かった。

乙女の証を無残に引き裂かれ、股間から血を流して泣き叫ぶ少女に対して、男達は躊躇する事無く、それどころか処女を抱ける事に喜び勇み、益々苛烈に責め立てたのだった。

自分が大事に守って来た物を無数のヤクザ者に穢されたショックも癒えぬ俎に、今頃は娼婦共々目高組から強奪したS市市内の秘密の売春宿で、無理矢理客を取らされている事だろうと思った。

しかし、蛇の様に執念深く陰湿な剛沢が、この長年に渡って自分たちの組と敵対していた暴力団のトップに君臨していた女達に対して、その程度の生ぬるい事で、許す訳が無い事を銀子は良く理解していた。

「麗夜や組の他の娼婦みたいに、ただ脚を開いてマグロみたいに寝っ転がっていれば終わるような素人を相手にしていたら、とても二千万円なんて借金は返せないわよ。だから、ここを充分鍛えて、そんな性豪を相手にしても有頂天に出来るようになったら、いくらでも金を稼げるようになるから頑張るのよ・・・ほら！私の突っ込んでいる指を思い切り絞

めて見なさい。」

銀子の巧みな指捌きで心を完全に乱していた暁美は腰をくねらせて、いつしか無意識の内に銀子の指を絞めようと精一杯の努力を始めていた。

「ほら、もっと絞めるのよ！」と、手のひらで暁美の尻を叩いて言った。

「アア・・・絞めています・・・」

まだズキズキと鞭打ちの疼痛が残る股間の筋肉に力を込め、銀子の指を締め上げようと眉にぐっと皺を寄せて喘ぐように答えた。

日本人離れした容貌とスタイルの若い美女が、額に薄く汗を浮かべ苦しげに喘ぐ様を見て、若い男達は暁美から立ち昇る妖しい色香に魅入られたように立ち尽くした。

「客を取るには、未だ未だのようね・・・まあ、いいわ、これから張形や色々な器具を使ってここの筋肉を鍛えて、絞め方も教えて上げるわ。そのためには、唯々訓練に次ぐ訓練よ。」と、ため息を吐いた。

「貴方も青沼と散々セックスして、男にオコを貸すなんて大したこと無いと、高を括っているかも知れないけど、プロの女のセックスとは、そんな甘いモノじゃ無いのよ！・・・例えて言えば、近所の公園を趣味で走っている様な素人ランナーをオリンピックの金メダル級のマラソンランナーに鍛えるみたいなモノなのよ！後一ヶ月も無い間にそこまで鍛えなければならないのだから、あなた達も協力して上げてね！」と、見物の男達を見回して言った。

銀子から暁美をプロの売春婦に調教するため協力して欲しいと言われて、喜び勇んだ男達からオウ！と声が上がった。

「あなたは、小さい時からバレーのお稽古に通ったりして、体は柔らかかったわね。ちょっと見せてご覧なさい。」

暁美の腰を床に着けさせると、両脚を思い切り開くように命じた。

男達の好奇な視線の前で、大きく股間を開いてチンピラ達の好色な視線に晒す事に激しい羞恥を覚え、首を激しく振って拒んだ。

「今まで散々顎で使って来た男達に自分のアソコを晒すのは、大組織の親分の娘としての沽券に拘わるとでも言うの？」

イヤイヤする暁美の背を鞭で小突きながら

「馬鹿ね、散々男達に股の間を見せて来て、今更何を嫌がるのよ？」

そして、見物の男に声を掛け、二人の男を舞台上げて暁美の両脚首を掴ませて力尽くで開かせようとした。

「ほら、開くのよ。」銀子が鞭の先で太股を叩いた。

足首を掴んで、暁美を開かせる男達は、どこまでも際限なく開いていく暁美の股間の構造に驚嘆した。

とうとう両脚が180度まで開脚した。

全開の股間の中心にぽっかりと開いた女性器をもっと良く見ようと、見物の男達が床に顔を着けんばかりに注視した。

張り裂けんばかりに開いた股間の中心に痛いほど視線を浴びて、暁美は思わず羞恥に両手で顔を覆った。

「何を恥ずかしがっているのよ？こんな特技は他の女では出来ないのだから、良いセールスポイントになるわよ。セックスの前に柔軟な体を見せてアクロバティックダンスを踊ったら、男が歓喜すること請け合いよ。・・・今屋敷の中にあなた達が男を相手にするためのお部屋を作っているけど、あなた専用のお部屋にはポールを立てるのも良いわね。そのバレーで鍛えた体でポールダンスを覚えて、男の目の前でポールに絡んで裸で踊ったら、きっと男達は夢中になって通い詰めるわよ。」

立位で脚を頭より高く上げさせ、隠しようも無く秘所を正面から丸出しにさせたり、暁美の柔軟な体に色々卑猥なポーズを付けさせながら、次々と男を楽しませるアイデアを思い浮かべるのだった。

「何度も言ったように、あなた達の相手にするお客は、ほとんどのセックスは経験した人達ばかりなのよ。前の穴で男を夢中にさせるなんて当たり前のことで、こちらの穴でも男達を夢中に出来なければならないのよ。」

銀子は再びジェリーのチューブを手にとると、「こちらの具合も調べさせて貰うわね。」と、右手の中指を後ろの莖色をした菊の花に似た部分にあてがった。

銀子の意図を察した暁美は急に血の気が引いたようになって、イヤイヤと腰をくねらせ銀子の指先の侵入を避けようとしたが、そのような細かい抵抗にお構い無しに銀子はジェリーで潤滑させた指を滑り込ませようとした。

「イヤッ！イヤッ！痛いわ！」

銀子の指先が淫靡な形をした菊の花の中心を捉え、そのまま埋め込もうとする様子に恐怖を覚え狼狽して、叫び声を上げた。

「何が痛いよ？まだ入れていないわよ・・・」

と、潤滑剤を塗した指先で羞恥の孔の周囲を丹念にマッサージしながら暁美の狼狽えぶりを楽しむ様に微笑んだ。

そして、そのヌルヌルした柔らかな指先の動きに暁美が馴染んで来たのを確認すると、

「尻に力を入れたら駄目よ！力を抜いて息をスーッと吐くのよ。」と、暁美を励まし、スルリと中指を差し入れた。

アッと暁美が羞恥と苦痛の混じった小さな悲鳴を上げた。

「何が、アッよ！指一本で悲鳴を上げていたら男の太いモノなど、受け入れられ無いわよ！」と、暁美の狼狽ぶりにも構うことなく、ズブズブと更に深く中指の根元まで挿入した。

初めて経験した肛口への侵入に、腰をピクピクと震わせながら、銀子の指が奥へ奥へと差し入れられる間、アアッ・・・アアッ・・・と呻き声を上げ続けた。

暁美のその部分の締め付け具合を調べながら、指先で直腸内部を掻き回し内部の様子を確認した。

今まで排泄にだけ使用する不潔な部分としか思っていなかった暁美は、銀子の指先により掻き立てられる妖しげな感触から、悲鳴を上げながら尻を振って逃げようとしていた。

そんな暁美の努力も無視して、指先を曲げて内部を掻き回す間に、指先に当たる固形物を感じて、ニヤッと口元を歪めた。

「あなた、暫くお通じが無いわね？」と、羞恥に顔を染める暁美を見ながら聞いた。事実、便秘がちな暁美は、ここ3日ほど排便が無かった。

「こんなにお腹の中がいっぱい溜まっていたら、ここの穴の練習は出来ないわよ。一度浣腸してスッキリさせないといけないわね・・・そうだ、丁度良い機会だから、大亜門戸会の娼婦としてデビューする初仕事として、あなたがウンチする姿をビデオに撮っておきましょうよ！」

銀子は、この美女の羞恥に満ちた初々しい排泄姿をビデオに収録して闇のルートで売り捌けば、大きな儲けになると考え、男達に撮影の準備を命じたのだ。

剛沢と黄原の見守る前で、一所懸命に互いの女性器に舌を絡めあう二人の女が、興奮に顔を赤らめ荒い息を吐いている。

長い間、男女の性交渉が途絶えて、性の飢餓状態にあった晴江はお竜の舌先に肉洞を挟ら

れて女体の奥底に秘められていた女肉の喜びを表に引きずり出されようとしていた。

そして、そんな浅ましい女の本性を憎い男達の見詰める前に露わにすることを恐れ、男達に命じられるままお竜の股間に向け激しく舌を動かすことにより、その衝動を振り切ろうとしていた。

お竜も奈和親分から散々女の喜びというモノを教え込まれ、開発された女体を晴江から舌で愛撫され、込み上げる激情を抑えようと耐えていた。

晴江もお竜も互いの舌先により堪えようも無く劣情を昂かめ合っていた。

剛沢と黄原に命じられるまま、時には強く時には激しく舌を使った女性器の嘗め方を散々指導されて、ハアハアと荒い息を吐く二人の女の舌は疲れ切り動きが悪くなって来ていた。剛沢から許しが出来、長時間に渡る舌先の愛撫を終わる事が出来、ほっとしたように互いの股間に押し付けていた顔を離した。

晴江とお竜の眼前には、互いの舌技による愛撫で、熟した果肉の中心に濃厚な愛液を滴らせて濡れそぼる柔らかく開いた華洞があった。

「もう充分柔らかくなったようだな・・次は張形を啜えての絞め方の練習だ。」

傍に置かれたステンレスワゴンから卑猥な形状の筒具を手にしてニヤッと片頬を歪めた。

黄原も倣って同様の筒具に手を伸ばした。

突然、晴江の視野に巨大な張り形が現れた。それは久しく目にすることの無かった奈和のおっとの男のモノを思い出させた。

「ちょっと大きいかも知れないが、お前達も奈和の野郎のチンポを散々啜え込んできてヨガリ狂ったのだからこれ位どうって事無いだろう？」

男達は嬉しそうに笑い声を上げると、抵抗を封じられた女の秘奥を鰓の張った亀頭の先端でチョンチョンと突いた。

後ろを振り返ることは出来ないが、自分の秘孔にも圧力を感じて、目にしたのと同じ張り形が埋め込まれるのだらうと覚悟した。

そして、見つめる女達の鼻先をかすめるように、毒々しい色をした野太い張形がすっかり濡れそぼち受け入れ準備の完了した華洞にズブズブと音をさせて埋め込まれて行った。

剛沢は晴江の秘所に張形を突き立て、黄原はお竜の秘所を担当した。

巨大な張り形が柔肉を押し広げ体内にめり込んでくる感覚に、久しく絶えていた奈和の肉塊を思い出した。

そして、同じ受け入れるなら無機質なビニールの偽物では無く、熱く滾った男のモノを受け入れたいという本能的な欲望が込み上げて来て、その淫らな肉欲を否定するように激しく頭を振るのだった。

剛沢と黄原は張形を握りしめ、最初は深くゆっくりと張形を操作し、張形を絞める膣壁の肉の感触を確認した。

そして、女達の反応を見ながら次第に早くリズムカルに張形を操作し始めた。

最初は毒々しい卑猥な形状の張形に嫌悪感を覚え、無理矢理女体の中心に突き立てられても気持ちの悪い違和感しか感じなかった晴江達であったが、まるで男達の繰り出す、この棒には、命が宿っているのでは無いかと思わず疑った。

それはまるで生き物の様に自在に膣内を蠢き回り、女体の泣き所を知悉しているように敏感な箇所を次々と責め立てた。

最初は男達の思い通りにはならないぞ！と悲壮な決心で、対峙していた晴江達であったが、何時しか、その巧妙な動きに煽り立てられ男達の繰り出す攻め棒に堪えようとしても、熟れた女体が自動的に反応する様に、勝手に膣の筋肉が収縮して張形に肉壁が絡み付き、男達が引こうとすると無意識にそれを噛みしめて離さないように身体が意志を裏切って反応を始めていた。

昂奮に全身を赤く染め息を荒げる二人の女は、男達が張形を深く突き立てる度に、下腹を収縮させアッアッ！と短い声を上げていた。

剛沢の巧妙な操作に、快感の壺を突き立てられ、もはや堪らなくなったように晴江が、鼻に掛かった甘い声を上げた。

これまで千人以上の女を抱いて来た剛沢にとっては、女体の構造も快感を得るツボなども知り尽くしており、女を性の歓喜にきりきり舞いさせるのに、素人娘でもヤクザの女房でも関係ないと自信を持っていた。

事実、自分の繰り出す張形の前で、今や晴江は体中を走り抜ける快感に耐え切れず、体を緊張させたり弛緩させたり、剛沢の意図する通り、思い通りに操られていた。

片手で張形を微妙に操作しながら、もう片方の手で充血し充分屹立した木の芽を親指の腹で優しく撫でたり、神経が昂進して敏感になった周辺部分を撫で回したりして、晴江の興奮状態を一層押し上げるのだった。

ふと見ると、晴江の下に敷かれたお竜も全身を紅潮させ快感にのた打っていた。

見れば、黄原も剛沢に負けず劣らずのテクニックを駆使してお竜を責め立てていた。

「黄原！おめー、中々うめーじゃないか！」と、向かい合って責め上げる黄原に声をかけた。

「いえ、ボスの真似をしているだけですよ・・・」

額にうっすらと汗を浮かべながら一所懸命張形を操作する黄原が謙遜して応えた。

こうして、二人の性の達人にむりやり追い立てられ、晴江とお竜の二人は後戻り出来ない快感の淵にまで追い込まれていった。

最初は憎い敵方の前で落花無残な醜態を晒す様を思い浮かべると、とても堪えられず、心を励ましてなんとか敵が次々と繰り出す責め苦に耐えようと頑張っていたが、敵の技量の方が遙かに巧妙であった。

外堀を埋め、外郭の大門を抜き、更に内堀を渡って、ジワジワと本丸に攻め寄せる敵軍のように、落城は最早避けられない事態のように感じられた。

それでも、最後に残された気力を振り絞り、最後の瞬間を迎えることを必死に耐えていたが、それも単に時間の問題に過ぎない事を晴江もお竜も感じ始めていた。

このように圧倒的な男達の力の前では、万に一つの勝ち目も無い一と、哀しい諦めが心を支配し始めていた。

いじましい抵抗を続けて、地獄のような性の責め苦に何時までも、のたうち回るよりは、いっそ早々と落城して、敵に自分たちの恥ずかしい姿を検分させた方が楽になるのでは無いか・・・と、悲しい考えが頭によぎり始めていた。

男達の責め苦の前で、全身に汗を浮かべ、苦痛とも快感ともつかない呻き声をあげて、体をくねらせる女達の様子に剛沢は、女達がもうすぐイキそうで有ることを見て取った。

「うひょー！凄い流しようじゃないか！」と、剛沢が今更驚いたような声を上げた。

見ると張形を突き立てられた肉洞からは、夥しい愛液が流れ出しており、晴江から吹き出した濃厚な樹液はお竜の顔に滴り落ちお竜の顔面をビショビショにし、お竜の体から流れ出た甘い蜜はねっとりコンクリートの床に垂れ落ち水溜まりの様な染みを作っていた。

「こんなに、びしょびしょじゃ気持ちが悪いですから、一度スッキリさせてやりましょう」と、黄原が言うと張形をお竜の肉洞から抜き取った。

剛沢も張形を抜き去り、蒸したタオルで二人の顔や濡れそぼった股間を優しく拭き始めた。

落花無残な落城を寸前に控えて、突然責め手が退却を始めたような状況に、二人の女は、

最後の醜態を敵方に晒さずに済んだとホットするとともに、興奮した体と昂ぶり上がった心の持って行き場所が無いような、やり場の無い気持ちになっていた。

ビショビショに濡れた股間を暖かいタオルで優しく拭き取られ、ピークを迎えようとしていた興奮が冷め始めた頃、「それじゃ、続きを始めようか。」と、男達は張形を手にするると再び女達に襲いかかった。

一度は、この止めようも無い快感を正面から受け止め、最後の醜態を男達の目の前に晒すという哀しい決意をした女達であったが、今は興奮の度合いも下がり、再び男達の手管に負けてなるものかと、心を引き締めるのであった。

しかし、そんな女達の決意をあざ笑うかのように、男達の得意な責め技により、二人の女の防衛線は次々と突破され、無理矢理絶頂の頂きに押し上げられて行くのだった。そして、最早堪え切れず快楽の淵に身を投げようとした瞬間、再び責め具を引き上げられたのだった。

全身を紅潮させ、腰をモジモジさせながら、恨めしげにこちらを見つめる、晴江やお竜の仕草から、女達がイク寸前でお預けを食らい、頭に血が上っていることが剛沢や黄原には手に取るように判ったが、わざと気が付かない振りをして、顔の周りや背中など関係無い部分を撫でて女達をじらすのであった。

更にその後も何度も、男達の陰湿なじらしを受けて、とうとう堪りかねて晴江が、「お願いです！抜かないで下さい！最後までイカせて下さい！」と、張形を引き上げようとする剛沢に涙を浮かべて顔を狂ったように振り立てて哀願し始めた。

「今日はここを鍛える練習だから、最後までイカせるつもりはなかったんだが・・・そんなにイキたいのならイカせてやろうか。」と、剛沢が笑いながら二人に言った。

股間を綺麗に拭き清めてから、再び張形を突き立てながら、「これで仲良く二人とも息を揃えてイクんだぜ」と、話し掛けた。

晴江もお竜もこれで長かった苦しみからようやく解放されると、目を輝かせてウンウンと肯いた。

これが最後だと告げた男達の手管は巧妙精緻であり、女達をかつて到達したことも無い高みにキリキリと舞上げた。

二人の女の呼吸は速く浅くなり、口をパクパクと開いて、胸を大きく上下させて息をしながら、息苦しそうに身悶えた。

心臓は爆発寸前のように激しく脈動し、心臓から猛烈な勢いで吐出される血潮は激流とな

って、女の一番深い処に激しい勢いで流れ込もうとしているかのようであった。

そして、その激しい血流を受け止めた肉洞の襞は、今は熱く熱を持ち、柔らかく大きく膨潤して、男達が突き立てる得物をまるで軟体動物の口腔のように食欲に咀嚼しようとするかのようであった。

意識は朦朧とし、頭の中は真っ白となり、激しい動悸の音だけが釣り鐘のように頭の中に鳴り響いた。

そして、その恐ろしいほどに巻き上げられた快感の高みから、一気に快樂の淵に身を投じて、微塵に碎け散ろうとした刹那、再び男達は意地悪く矛先を引き上げてしまった。

「イヤ！抜かないで！」最後の瞬間を目前に控えて、叶えられなかった肉欲の疼きに女達は狂ったように泣き叫んだ。

「お前達はイキたくて、しょうがないかも知れないが、俺たちはさっきから手を動かさずばなしで疲れたぜ。疲れてもう手が動かさないぜ。」と、腕を摩りながら口元に卑猥な笑みを含んで剛沢が告げた。

収まらない女達は涙を流しながらイヤイヤするように首を振り立てた。

「そうだ！そんなにイキたいのなら、自分たち同士でイクってのはどうだ？」

何度もおあずけを食らい、叶えられない性の渴望感にヒステリックに泣き叫ぶ女達を面白そうに見つめながら、剛沢は30センチ程の長さの両頭のディルドウを取り出すと女達に見せつけた。

ウナギのように太くて長いディルドウの両端は亀頭を摸したものとなっていた。

長くて柔らかいディルドウは自由に曲げることが出来るようになっており、これの端を口に咥えて、頭を動かして互いに楽しみ合ったらどうだと提案するのだった。

哀しげにその両頭のディルドウを見つめる晴江が、「お願い・・・やってくれるかい、お竜？私はもう我慢できない・・・」と、呟いた。

「ああ・・・お姐さん」と、お竜も涙を浮かべて同意した。

ディルドウの中程をぐにやりと曲げて、その端をお竜と晴江の口中に突き入れた。そして、その一方の端を互いの秘所に突き当てた。

「さあ、これで遠慮無く自分たちで楽しみ合うんだ。」と、剛沢が命じた。

二人はおずおずと頭を動かし始めた。

そして、その動きはディルドウの端に伝わり、ディルドウの先端の亀頭部が肉洞の中に深く姿を没した。

最初は何かを確かめるかのように、互いに弱々しく首を振り、ゆっくりとディルドウを動かす二人であったが、その互いの首の動きでディルドウを相手の体内を突き立てている間に、これまで、じらしにじらされた肉欲の疼きが押さえようも無く蠢き始めた。

やがて、二人は何かに突き動かされるように、動きを速め、その激しい刺激が互いに更なる刺激を呼び起こし、更に相手に対する責めを強くするのであった。

激しい動きの余り、歯でかみ締めた亀頭部が外れて咽の奥深く没することもあったが、息が詰まる苦しさにもめげず、カッと目を見開き、再び啞え直すと相手の肉洞を激しく責め立てるのであった。

焦らしに焦らされた末の絶頂を希求する二人の思いは強く、見守る男達の嘲笑も言葉廻りも意識の中から消え失せてしまい、取り憑かれたように二人の女は互いを激しく責め合った。

お竜が首を振り立て、突き立てたディルドウの鎌首が晴江の肉体を強く突き上げると、その肉体的感動に煽られた晴江は首の動きを大きくし、お竜の秘孔を更に深く突き立て、その中心から脊髄を通して脳天に駆け上がる様な激しい情動に突き動かされたお竜は、益々激しく晴江の肉洞を抉る一と云うように、互いの淫らな動きが循環する間に次々と大きく増幅して行き、今は二人とも何も考えることも出来ず、汗まみれになって、本能に突き動かされるまま激しく互いを責め合っていた。

晴江の口に加えたディルドウがお竜の女の孔を深く突き立て熱い樹液を勢い良く吐出させた。

その激しい飛沫が晴江の顔を濡らした。

お竜も谷川のせせらぎのように流れ落ちる晴江の熱い愛液を顔にまともに受けて顔をビショビショにしていた。

今や二人の女は顔中汗と互いの愛液に塗れていたが、そんな事も最早気にならないかの様に激しく首を振り合っていた。

剛沢も黄原も今は必死に絶頂に向かって突き進む二人の女の浅ましい姿を卑猥な笑みを浮かべながら黙って見詰め続けた。

二人の女の激しい動きが頂点に達した時、晴江もお竜も同時に大きな呻き声を上げた。二人の女が同時に絶頂を迎えたのだ。

かつて経験したことの無い、じらしにじらされた末の、溜まりに溜まった欲求を一度に吐き出したゴールインであったため、その絶頂感は凄まじく、二人の女は全身汗まみれにな

り、意識を失ったように崩れ落ちた。

「いやー、お見事、お見事。女同士で手も使わずにイクなんて大した物だ。体を抱かす前にこれを見せたら、客が喜ぶこと請け合いだ！」と、剛沢が感激したように手を叩いた。剛沢のからかいにも応ぜず、二人の女は肩を激しく動かして早い呼吸を続け、憎みても余りある敵方の男達の目の前で絶頂を晒すという醜態を見せたことも意識から消え去ったかのように、ハアハアと激しく息を吐いていた。

長くしなやかな双頭の張形は未だ二人の股間に残されたままブラブラと垂れ下がり、激しかった絶頂の余韻を留めるようにプルプルと小刻みに震えていた。股間の淫靡な収縮に合わせて揺れるディルドウに手を掛け、ズルズルと表に向かって引き出し始めた。

胎内奥深く沈み込んだ樹脂製の異物を肉洞から抜き去られる際、ウツと、女達は声を上げて身体を痙攣させた。太い男性を模した道具が抜き取られた跡の肉の祠は大きく開いたまま神秘的な内部を晒し、その赤く充血した虚ろの奥からドロリと愛液を吐出した。

男達は、濡れたタオルで女達の熱い体液に塗れた股間を丁寧に拭き取った後、

「こんな凄いショーを見せられたら俺たちの息子もこのまま黙って引き下がる訳にはいかないからな」と、言いながら、二人はズボンの前を開くといきり立つ怒張を露わにし、女達の柔らかく開いたままになっている肉洞に埋めようとした。

長時間、張形により突き立てられて、何度も寸止め攻撃を受け、今また女同士の異常な体位による、経験した事もないような激しい絶頂感を極め、晴江もお竜も腰が抜けそうに重く疲れ切っており、膣壁も僅かな刺激で悲鳴を上げそうなほど摩擦しあった所に、男達から硬くいきり立った怒張を押し付けられ、思わず「あー！もう堪忍して下さい！」と、涙を浮かべて悲痛な声で哀願した。

「お前達は女同士で充分楽しみ合ったかも知れないが、俺たちはこんな凄いショーを見せられて、興奮が収まらないぜ。」と、言うと、女達がヒステリックに泣き叫ぶのも構わず、柔らかく開いた肉襞を割って赤熱した鉄棒のように熱くて固い怒張をゆっくりと滑り込ませて行くのだった。

「どう、上から見下ろす気分は悪くないでしょ？」

大亜門戸会が売り捌く浣腸ビデオを撮影する際に使う、ステンレス製の棚を改造して作った足場の上に、暁美を押し上げて銀子が下から見上げる様に言った。

それは、ホームセンターで売っているようなステンレス製の柱と網状の棚板を組み合わせて作った二台の足場で、曉美が押し上げられた棚板までは地上から1.5メートル程の高さがあった。二つの足場は60センチ程の間隔を置いて平行に設置され、二台の足場が離れないように上に伸びた四隅の柱の間を横棒をはわせることにより固定していた。

二つの高いステンレス製の足場に片脚ずつ載せて、大きく股を開いた姿が正面と背面に控えるビデオカメラにアップで捉えられていた。転落防止と称して上半身を堅く麻縄で縛められ、二つの足場をつなぐステンレスの横棒に縛り付けられており、大きく開けられた両脚も足場に縛り付けられており、高い足場の上で、隠す物の無い股間を大きく晒して、身動きもつかず固定されていた。

ふと下を見下ろすと、男達が洗面器一杯に入れたお湯にグリセリンの瓶からグリセリンを直接流し込み浣腸液を調合しているところであった。

洗面器に二瓶のグリセリンを空けるとガラス棒で良く掻き回し始めた。

そして他方では、ガラス製の太い浣腸器を握り締めた男達がニヤニヤ笑いながら待機していた。その中には目高組でも見知った三下達が混じっていた。

足下から照明が照らされ、あからさまにさらけ出された秘部を狙ってビデオカメラが回り始めた。

大人の肩程の高さのある台の上に押し上げられ、股を大きく左右に押し広げられ、下から股間を狙うカメラのファインダーには、剃毛されて隠す物の無い女の肉の割れ目とその後の僅かに董色を帯びた菊門が在り在りと捉えられていた。

曉美はこの男達が喜々として作業に打ち込む姿を目の当たりにして、本当に自分に浣腸をして、恥ずかしい排泄シーンをビデオに収める積もりだと云うことを思い知らされた。

ついこの間まではここに居る多くの男達を^{かしば}傳かせ、我が儘放題に暮らして来た自分が、そのような破廉恥な行為をビデオに収められ、販売されてしまつては、二度と世間に顔向け出来ない女になってしまうと羞恥と恐怖が込み上げて来て青ざめるのであった。

そして、今の自分にはそれを避ける力も残されていないと思知らされると押さえようにも嗚咽が込み上げて来た。

そんな曉美の哀れな姿にも構わず、銀子が待ち構える男達に、良いわよと声を掛けた。

男達は歓声を上げると、我先に手にした浣腸器を洗面器に突っ込むと中の溶液をガラス容器内に吸い上げ始めた。

最初に浣腸器の準備の出来た男が暁美の前に立ち、目に涙を浮かべた暁美に話しかけた。

「今まで目高組にいた時は、お嬢にも大変世話になりましたね・・・今日はその万分の一でも恩返しをするため、一生懸命お嬢の便秘の治療に当たらせて貰いやす。」と、ニヤニヤし言い、浣腸器の中に溜まった空気を抜くためピストンを動かして、同時に容器内に満たされたグリセリン液をまるで水鉄砲のように暁美の顔に吹き付けた。

その生ぬるい粘っこい液を顔に浴びせられ、思わず悲鳴を上げて顔を反らした。

男は笑いながら暁美の背後に回ると、暁美の鼠蹊部をのぞき込み、顔を近づけ匂いを嗅ぐような仕草をして、「初めてお嬢の●●を間近に見せてもらいやすが、いい匂いがしますね。」と、感激したような声を出して秘所を指で触れそうになった。

繊細な秘部の粘膜に嫌らしい男の鼻息が当たる様に感じて、思わず唇を噛んだ。

おい！いい加減にしろ、後ろがつかえているんだ！と後ろに控える男に急かされて、しょうが無さそうに浣腸器の嘴管を暁美のセピア色した菊の蕾にあてがった。

その瞬間暁美はヒィと小さく悲鳴を上げて体を硬直させた。

男は嘴管をぐっと押し出ると、暁美の悲鳴と狼狽を無視して一いやそんな暁美の哀れな抵抗を楽しむ様に、その先端を力尽くで暁美の腸内に埋没させ、

「それじゃ、お嬢、行きますよ！」と、一声掛けて強引にピストンを押し出した。

腹腔内に流入する生暖かいグリセリン液の気味の悪い感触に暁美は悲鳴を上げ続けた。

すっかり空になった浣腸器を引く抜くと、次の男が待ちかねたように乱暴に浣腸器を突き立てた。

こうして次々と男達によって浣腸器が突き立てられ、腸内に大量の溶液が注入され続けた。

その激しい水溶液の圧力に大腸がキリキリと痛み悲鳴を上げた。

「どう、お腹の具合は？随分お腹が張って来たんじゃない？」と、銀子が下から暁美の心持ち膨らんだような下腹を撫でながら聞いた。

「ここも鞭打たれて痛くて力が入らないかも知れないけど、もう少し堪えてお腹の中のモノをすっかり溶かさないと駄目よ！」

暁美は腸内に満たされ浣腸液の圧力と、浣腸液により促され始めた大腸の痙攣に、額に汗を浮かべて、眉を蹙めて、辛そうな顔をしていた。

銀子は、台の上で大股開きにされながらの必死に股間を寄せて、硬く閉ざそうと努めている菊花の中心に中指をあてがい指の腹でグイグイと押し、この門に閉ざされた内側の様

子を確認めた。

腸内では大量の浣腸液が渦巻き、グイグイと押し付ける銀子の指を跳ね返す様に内部から強い圧力で押し返していた。

アアッ！止めて下さい！と後を振り返り、外部から圧力を加える銀子に哀願した。

「どう？お腹が張って苦しいんでしょ？少し抜いて上げようか？」

と、銀子は苦痛に顔を歪める暁美を覗き込みながら、イタズラっぽい笑みを浮かべて聞いた。

そして空のガラス浣腸器を手にとると、その嘴管をピクピクと痙攣する菊の蕾に埋めた。

内部の圧力により決壊しないように注意しながら硬く喰い絞められた括約筋をゆっくりと押し開いて、嘴管を根元まで埋め込み、直腸内の圧力を楽しむ様に、平たい硝子容器の先端で外部に向かって隆起した菊座の周りを内部に押し戻す様に力を入れた。

そして、ピストンをゆっくりと引くと、たちまち浣腸器内は暁美の腸内を満たしていた茶褐色の不透明な液体が満ち始めた。

「ほら、これが今あなたの腸内を掻き回しているグリセリン液よ。ウンコが混じって随分濁っているけどね。」

と、採取したばかりの褐色に濁った液が満たされた浣腸器を暁美の目に見せつけた。

そして、抜き取った浣腸器の嘴管の先に暁美の軟便が付着していることを指摘して、

「あら、イヤだ！先端にうんちが引っ付いているじゃない！」

と、甲高い声で笑い出した。

それにつられたように、周囲を取り囲む見物の男達も笑い声を上げた。

そして、軟便の付着した嘴管の先に鼻を寄せて、

「何時も贅沢な物を食べている人のウンチはとっても臭いのよ。」と、臭いを嗅ぐ仕草をして、「あなたのウンチはとっても臭いわ！」と、大きな声を上げて、また男達を笑わせた。

「ネッ！あなたもこのお嬢さんのウンチの臭いを嗅いでみたいでしょ？」と、浣腸器の先を、一人の見物の男の鼻先に突きつけたので、男が慌てて後ろに仰け反った。

その男の慌てた様に周囲からまたも笑いが上がった。

腸内を掻き巻く苦痛に喘ぎながらも、この銀子の陰湿な振る舞いに暁美は腹を立て、「やめて下さい！」と、思わず大声を上げた。

「おや？人に自分のウンチの臭いを嗅がれるのが嫌なの？」と、銀子は浣腸器を手にしたままイヤイヤをするように首を振り続ける暁美に近寄ると、

「でも、自分の体から出たウンチなら臭いを嗅いでみたいと思うでしょう？」

と、浣腸器を顔の前に突き出した。

思わず顔を振った拍子に軟便の付着した嘴管の先が、暁美の頬に触れ、茶色い筋を残した。

「おやおや？大事な顔にウンチが付ってしまったじゃない？キレイにして上げないとね。」

と、言うも浣腸器のピストンを押して、水鉄砲のようにガラス容器内に溜まった茶褐色の液を暁美の顔に吹き付けた。

顔から不潔な固形物の混じった褐色の液を滴らせながら、暁美は、余りの屈辱感に、酷いわ！酷いわ！と、大きな鳴き声を上げ始めた。

そんな惨めに泣き叫ぶ暁美に向かって、

「ふん！ちょっとくらい顔が綺麗でスタイルも良いからって良い気になるんじゃないわよ！あんたにはそれがお似合いのお化粧よ！」

と、吐き捨てる様に叫んだ。

銀子は男達も認める美しい容貌を持っていたが、それ以上に美しい容姿を持つ暁美に激しい嫉妬心を感じていた事実を取り囲む男達は感じた。

今この不潔な液によりその美しい顔を汚すことが出来た事に心の中から快哉を叫んでいる様な印象を受けた。

「おやおや？深窓のお嬢様には、ちょっとショックが大きかったかな？・・・でもね、あなた達を買う男達は、色々あなた達に悪戯したがる人もいるのだから、これも本番の練習よ！大金を稼ぐためだから、じっと我慢しなければ駄目よ！」

と、悲痛な声を上げて嗚咽する暁美を見て、笑いながら^{なだ}看めるのだった。

その間にも、ピクピクと収縮を繰り返す堇色の蕾を見て、暁美の大腸の痙攣は極限に達し崩壊が間近であることを見て取った銀子は、

「カメラ大丈夫！決定的瞬間を逃しちゃ駄目よ！」と、カメラを操作する組員に声を上げた。

菊の蕾の収縮のピッチが益々早まり、見る見る肛門の周りが盛り上がって来た。

高い台の上に載せられた暁美が顔を悲痛に歪ませて、お願い！見ないで！と泣き叫んだ。

その瞬間、突然ビビビッというような鈍い音を立てて茶褐色の噴流が暁美の肛門を突き破って噴出した。

その様子に周囲の男達から、ワッと歓声が上がった。

高い足場の上から床の上に、細かい固形物が混じった褐色の液体を放物線を描いて撒散らした。

これまで顎で使って来た三下や敵方のチンピラの前で羞恥図を晒す衝撃に、一瞬目眩に襲われ体が崩れそうになったが、ステンレスの格子に背中を固定する様に縛り付けられていたので台から落下する事は無かった。

注ぎ込まれた浣腸液の大部分を放出したことにより、腸内の圧力が一時的に下がった暁美ではあったが、グリセリンの残した作用により大腸を襲う痙攣はそれだけでは止まらず、たちまち次の発作が襲い始めた。

大量の汚物が出口を求めて肛口に押し寄せる腸内の凄まじい圧力を感じて、更に野卑な男達の目の前で羞恥図を晒すことになるのかと思うと、ゾットする寒気のような絶望感が込み上げ、全身が鳥肌立ち、ブルブルと震えが襲って来た。

額に汗を浮かべ、眉を辛そうに寄せ、呻き声の様な声を上げながら、堪えられないように、白い豊かな双臀をゆさゆさと揺すった。

アアッ！イヤ！と、再び悲鳴のような泣き声を上げると、尻を大きく突き出し、汚水に濡れた双臀の狭間を見守る男達に向かって大きく晒した。

次の瞬間ピクピクと収縮を繰り返していた蕾が大きく弾け、その内部から突起した粘膜を見せて外に開き、円形の開孔を在り在りと露出すると、外界に向かって飛び出した濃いピンク色の腸粘膜のチューブを通してボトボトと黄褐色の柔らかい便を押し出し始めた。

それらの便塊が暁美の肛口から千切れ、床に落花する度に男達は歓声を上げ、鼻を摘んで臭い臭いと騒ぎ立てた。

「お嬢がまだ小さい時からお嬢の身の回りの世話を焼いて来たけど、お嬢がこんな臭い糞をたれるとは夢にも思わなかったぜ！」

「うんと臭い匂いを嗅がして、組を裏切ったお前達に仕返しをしているんじゃないか？」
大亜門戸会の以前からいた三下が新しく加わった元目高組の男達をからかった。

高く組み上げられた足場の下に、暁美の体内から排泄された夥しい便が堆く盛り上げられていた。

薄いベニヤ板の仕切りで覆われた地下の一廊は、暁美の体内から放出された排泄物の臭いで充満し、男達の劣情と混じり合い異様な雰囲気にも包まれていた。

泣きながら身をよじる暁美の苦痛は、腸内に溜まった汚物が全て排泄されるまで止むことは無かった。

「へへ・・・もう存分に出し切ったかい？」

一旦曉美の排泄が終わり、一人の男が涙に咽ぶ曉美に顔を近付けて聞いた。

曉美が苦悶に顔を歪ませて首を振った。

「おやおや？今度は太いのお出しになり始めたぜ！」

肛孔を大きく開いて、太い便塊が顔を覗かせ初めて、男達が笑いながら歓声を上げた。

「全く、おトイレには毎日行かないと駄目だぜ！こんなに溜め込んでよ！」

肛門から飛び出し大きく垂れ下がった便塊がボトリと落下した。

それに続いてドロドロとした軟便が流れ続けた。

「おやおや！・・・またお出しになり始めたぜ！全くどんだけ溜め込んでいたんだ？この女はよー！」

後ろの穴から軟便を落下させながら、ブルッと下腹を揺らすと堪え切れ無くなったのか小水の放出を始めた。

自分に敵意を抱く衆人環視の中で排便するという羞恥に下腹の神経は完全に麻痺しており、突然始まった放尿に自分でも驚いた様に、身を振って悲鳴を上げた。

後ろからボトボトと軟便を排泄しながら、堰を切ったように放尿する姿に、

「人目も憚らず前と後ろから伸び伸びと垂れ流して、元目高組のお嬢たる者がいい気なもんだぜ！」と、盛んに揶揄が飛んだ。

男達の嘲りを受け、悲痛な涙を流しつつも、曉美はいつまでも卑猥な男達の見線に晒されながら体内に溜まった汚物を排泄するという無残な姿を晒し続けるのであったー

「ほらほら、またイキそうじゃないか？」

ビッショリと汗を浮かべた額に、苦しげに眉根を寄せて、切れ切れの喘ぎ声を上げながら腰を蠢かす晴江の様子を醒めた目で観察する様に見詰めながら、腰を振り立て、熟女の熱い肉洞に突き立てながら剛沢が声を掛けた。

「アアーッ！イヤ！もうイキたくない！・・・もう堪忍して！」

剛沢の腰の動きに煽り立てられ、再び、どうにも成らない程快感を押し上げられてしまった晴江が、最後の瞬間を迎える直前となり、恐怖に駆られたように様に首を振り立て、泣き叫んだ。

二人とも既に2時間にわたって精力絶倫の男達から休むことなく突き立てられていたのだった。

その間記憶にない程、何度も激しい絶頂を味合わされ、頭はガンガンと痛み秘部は苦痛を伴い、もはや男から突き立てられても苦痛しか覚えず、このまま再び絶頂を迎えれば息の根が止まってしまうのでは無いかと恐怖に襲われていた。

日頃、性の渴望感に苛まされていた晴江であったが、今は渴いた喉に水を与えられた満足感を通り越して、身体が受け入れられる以上の量の水を無理矢理体内に流し込まれる水責めに遭っているような恐怖を覚えた。

しかし、こんなに何度も自分達は絶頂を極めたというのに、男達は一度も緊張を解くことなく、薄笑いを浮かべて、自分達の肉棒の責めにのたうち回る女達の様子を醒めた目で観察しながら、懊悩に苦しむ女達の姿を楽しむように腰を使い続けるのであった。

男達の太い肉茎で突き立てられる激しい痛感の中から、不意に狂おしい快感の嵐が巻き上がって来た。

その晴江の変化に気付いたように、剛沢が一層腰の動きを激しくしてグイグイと快感の高みへ押し上げて行った。

甘美な絶頂を極めた後に襲い来る激しい疲労感を伴った苦痛を何度も痛感させられていた女達はイヤイヤと涙を流しながら譫言のように叫び続けていた。

しかし、その快感の渦は余りに激しく急激に込み上げて来たので、今の女達には、最早押し止める力も残されておらず、その激流の様な快感の中に呑み込まれていくのだった。

「ああー、もう駄目！イキます！」と体を仰け反らし一声叫ぶと、その瞬間、膣内の奥深くに溜められていた熱い樹液を一機に噴き上げ、華洞内に収まったままの剛沢のモノに激しく浴びせかけるのだった。

がっくりと晴江の頭がお竜の柔らかい太腿の上にくずおれた。晴江の下敷きになっている形のお竜も一瞬遅れてイク！と声を上げると力をなくして検診台からはみ出した頭をダラリと下に垂れた。

「お前達、娼婦のくせに自分たちばかり、イッてたら商売にならないぞ！」と、激しい絶頂の名残を留めて、荒い息を吐きながら、ピクピクと身体を痙攣させるお竜の体内に怒張を埋めたまま黄原が叱咤した。

「いいか？これは客と娼婦の真剣勝負なんだ！客は娼婦を面白がってイカそうとするが、娼婦が客に煽られて一々イッていたら体が持たないぞ。ここを鍛えて、客を先にイカせる技術を身に付けなければ、お前達は永久に色道地獄を流離うことになるぞ。」と、剛沢の一喝に、晴江もお竜も混濁する意識の中で確かにその通りだと思った。

今日この男達に何度絶頂を極めさせられたのかも記憶に無い。自分たちは何度も絶頂に追い上げられ腰は痺れきり、疲労で体を動かすことも出来ないのに、まだ一度も射精に至っていないこの性の猛者達は、未だに自分たちの体の中に隆々としたものを突き入れているのだ。

このままでは自分たちは、いつ果てるともなく性の地獄を彷徨うことになるのではと、恐怖を感じていた。ならば、この男達が相對している女の武器を使って男達を果てさせないことには、解放されることは無い—と、悲壮な決意をすると、擦り立てられ、ジンジンと痺れる肉洞に神経を集中し、体内に残された最後の力を込めて、男の物を締め上げようと必死の努力を始めたのだった。

晴江の熱くたぎった肉洞に分身を埋めながら、剛沢はオヤッと思った。

かすかではあるが、膣壁が蠢き始め、その柔らかい襞を使って肉棒を包み、奥に誘うように、しごき始めたような気がした。

晴江の体へのピストン運動を止めて、怒張に神経を集中したが、どうやら確かに肉洞が、その秘められた能力に目覚め、機能を発揮し始めたらしい。

黄原も動きを止めて、お竜の膣腔の蠕動運動に神経を集中しているようだった。

長時間に渡る張形責めや肉棒責めなど、これまで女達が経験した事も無い様な、極限の責めを受け続けることにより、男の力に対する女体の自己防衛本能が誘起され始めたのか、この女達の女性器がその隠されていた神秘の機能に目覚め、まだ極僅かではあるが、膣壁の筋肉を自分の意志で動かし、男のモノを締め上げる、名器と呼ばれる素質をこの女達が見せ始めたことに剛沢は嬉しくなって来た。

そうだその調子だと、女達の尻を叩き、段々強くなって来る締め付けを楽しみながら励ました。

最初から激しく調教して、大事な部分を故障させてしまっっては、元も子もないと、どこかで調教を終了しようと考えていた剛沢は、初日から女達が名器の片鱗を見せたことに満足し、更なる開発は次の調教にして本日はこれで終わりとしようと黄原に目配せした。

「ようやく、お前達もコツが掴めてきたようだから、今日の所はこれで終わりにしてやるぜ。最後に4人揃って一緒に気をやろう。外したらまた最初からやり直しだからな・・・」と、女達に声を掛けた。

女達もこれでやっと長く苦しい性の奉仕から解放される—と、男達の精を一刻も早く絞り出そうと股間に一層力を込めた。

男達の鼻息が荒くなり腰の動きも益々速くなった。女達もリズムカルな喘ぎ声を上げ始めた。

男達の動きが一層荒々しくなり、堪らず二人の女が同時に体を痙攣させた。

それを見届け剛沢も黄原も緊張を解き、女の体腔内に夥しい精液を放出した。

女達は、とうとうこの悪鬼の様な男達から精を搾り上げた事を歯を喰い絞めて感じた。

そしてこの憎い敵の首領から大量の穢れた体液を吹き掛けられた事を膣奥に感じてウッ！

と声を上げて身体を硬直させた。

女達はぐったりと疲れて、意識も薄れ、最早僅かな力も残されていないような感じであったが、ようやく男達の精を絞り出し、この肉体の地獄から解放された事にホッと安堵したかのように見えた。

長い苦痛の末にやっとこの獣の様に凶暴な男達を自失させた感動からか、身体が奈和親分を裏切り敵の男達の子種を植え付けられたという穢された思いへの慚愧か、それらの色々な思いが緋い交ぜとなって、女達は忙しなく息を吐きながら啜り泣いていた。

若干硬度を失った肉塊を今は緊張感を失った女の肉洞からゆっくりと抜き出した。

半勃起したそれは、女の愛液と男の放出した精液でベッタリと塗されていた。

その醜怪な物をこれ見よがしに女の鼻先に突きつけると、驚きや嫌悪感も見せずボンヤリとした痴呆の様な表情を浮かべたまま何も言わず、顔をもたげて、自分達を散々苦しめたそれを口に含み、慈しむ様に舌先を使って汚れを清め始めた。

この過酷な長時間の調教を受ける間に、女達の気位は木っ端微塵に吹き飛び、身も心も娼婦として開眼し始めたかのようにであった。

「どうですか？姐さん。お竜のアクメ汁の混じった俺の精液は美味しいですか？」と、お竜から抜き出した男と女の白濁した粘液に塗れたモノを晴江に啜えさせ、満足した表情を浮かべながら、黄原がからかった。

そんな、黄原の嘲りも気にする素振りを見せず、愛おしそうに真心を込めて舌を走らせて、竿の汚れを絡め取り、汚濁の液を飲み下しながら、口中で舌先を絡めて黄原の亀頭部を無心で愛撫した。

お竜も今は無心に口内に含んだ剛沢のモノをしゃぶり続けていた。

そんな、優しい女達の愛撫に、口中で男達のモノが再び固さを増し始めていた・・・

黄原のモノを口で奉仕する晴江の開け放たれた股間では、長時間の肉体調教の後で8ノ字

筋はすっかり弛緩したままとなり、前の孔と一つの筋肉で繋がる肛門括約筋は緊張を失いうっすらと外の向かって口を開いていた。

その可憐なたたずまいを示す菊口に新たな欲望を感じた剛沢は、

「素直になったお前達に何かご褒美を上げないといけないな・・・」と、お竜の口による奉仕を続けさせながら、細身のバイブを手にした。

そして、それを目の前の女のアヌスにズブリと突き立てた。

すっかり締めりを喪失したその部分は何の抵抗も示さず細長いバイブレータをズブズブと根元まで埋め込んで行った。

「ああー、何処にお入れになったの？」

長時間の責め苦により晴江の股間は痺れ切り、また後ろの孔を使った経験も無かったので、何かが体内に埋め込まれた事は感じたが、それが何処に埋め込まれたのか理解出来ていない様子であった。

黄原のモノを咥えていた晴江が、痺れきった股間を新たに襲った違和感に朦朧とした目で剛沢の方を振り返って弱々しく尋ねた。

男勝りの啖呵を威勢良く発していた口から、この様な女々しい言葉を聞いて剛沢は嬉しくなった。

何度も何度も男達により自分が女であったことをその身に思い知らされ、女の弱さを骨身に滲みて味あわされ、強い女の仮面を無理矢理引き剥がされ、生身のか弱い女の本性に戻ってしまったのだと判った。

剛沢は晴江の後頭部を掴むと無言で黄原のモノを再び咥えさせた。

剛沢に強制され、舌と口唇を使って黄原のモノを洗い清め、再び汚れを嚙下し始めた。

黄原も剛沢を真似て細身のバイブをお竜の菊花に押し当てた。

剛沢のモノを口内で清めながら、お竜がビクッと身体を震わせた。

長時間に渡る呵責無い責めにより、下腹の神経は完全に疲労困憊して麻痺しており、肛門に何を突き立てられたのかは判らない様であったが、直腸内に異物を押し込められたのは感じている様であった。

お竜の腔の筋肉も完全に疲労して麻痺していたため、それと同じ筋肉で繋がる肛口も半ば開いており、潤滑のゼリーも塗されていない親指程の太さのバイブが何の抵抗を受けることも無くスルスルと呑み込まれて行った。

立て続けに絶頂に追い上げられた浮遊感と激しい疲労感により、女達は半覚醒状態のまま

意識も虚ろな状態であったが、男達に強制され朦朧としたまま男のモノを口内で愛撫していた。

真心の籠もった女達の口腔での奉仕で男達のモノは再び逞しさを取り戻していた。

女達の口内に隆起したモノを前後に出し入れさせながら、男達は、頃合いは良しと、互いに目配せした。

バイブのスイッチを突然オンにされ、直腸内に深く埋没したバイブが突然激しく振動を始めた。

突然下腹をおそった刺激に、女達は男のモノを口に含んだまま白目を剥いて、腰をブルブルと震わせ続けていた。

長時間に渡る女体責めでその部分の快感を無理矢理覚醒させられた女達はその近隣に備わるもう一つの孔の秘められたる快美感も呼び覚ましたのか男達に向かって拒絶の態度を示さず、ともすれば薄れそうになる意識の中で本能的にナヨナヨと腰を振り鼻を鳴らして男達に掘られるままであった。

女達が後ろからの刺激に感じ始めていることは、女芯から新たに滲み始めた愛液が示していた。

女達の口腔に男根を突き立て、バイブで廻りながら、この女達が後ろの孔でも快感を感じられる種類の女であることが分かり、掘り出し物を得た様に嬉しそうに白い歯を見せた。

そんな女達の身悶える様子を半ば醒めた目で見ながら、すっかり本来の牝の姿に戻った二人に最後のご褒美を与えるように、口内に熱い樹液を放出した。

真夜中の肉体改造

長時間に及んだ調教が終わり、お竜と晴江が、剛沢と黄原に担がれるように監禁室に連れ戻されて来た。

二匹の獣の様な男達から女の源泉を無惨に占領され蹂躪され続け、更に後ろの穴まで翻弄され、今でも下腹は重い鉛の塊を埋め込まれた様にズッシリと重く、股間から込み上げる疼痛により足腰は痺れ切り、二人とも足にも腰にも力が入らず、フラフラとして、歩行も覚束ない状態で有ったが、二人の男に引きずられるようにここまで連れて来られたのだった。

「ほら！約束通り、ベッドもフカフカの物に換えてやったぞ」

剛沢が檻の中を指し示しながら言った。

女達を一流の娼婦とすべく肉体改造のため丸一日牢を空けていた間に、剛沢の命令によって檻の中は大きくリフォームされていた。

中に閉じ込めた囚人の人間性を拒絶する様に荒々しい表面を晒していたコンクリートを打ちっ放しにしていた壁には、一面淡いピンクを基調とした若い女性が好みそうな素敵な壁紙で覆われていた。

昨日までの簡素な固いベッドは姿を消し、打ちっ放しの床には毛足の長いフカフカの深紅の絨毯まで敷き詰められ、その上には豪華なクイーンサイズの柔らかそうなベッドが置かれていた。

天井に埋め込まれていた薄暗い裸電球も大型の明るいシーリングライトに交換され、すっかり女性の寝室らしく演出された部屋の中を明々と照らしていた。

内部の調度品や床や天井や壁の三面を見る限り、それらは上品な女性の寝室に相応しい雰囲気を出していたが、それはまるでドラマ撮影のためテレビスタジオに作られた寝室のセットみたいに閉じられた部屋では無く、通路に面した部分は全体が冷たく黒光りする鉄格子で構成されており、部屋の中の様子は丸見えで、中の人間のプライバシーを護れる要素は何も無く、檻の内部が豪華だけに一種滑稽な様を示していた。

「まあ！素敵なお部屋じゃない！」

丁度同じ頃に調教を終えて、やはり足腰フラフラになった暁美を若い男達に引きずらせて戻って来た銀子が大きな声を上げた。

浣腸による強制排泄で既に神経をズタズタにされた暁美であったが、そんな物はこれから始めるトレーニングの為の単なる準備体操の様な物だーと冷酷に言い放つ銀子から、様々な器具を股間に押し込まれ、つい今し方まで責め立てていたのだった。

銀子はそのまま檻の中に入ると、真新しいベッドの上に寝転び、飛び跳ねて固さを確かめたり、軽く柔らかな羽布団を被って見たりした。

「良いベッドに良いお布団ね。これなら素っ裸で寝ても寒くは無いわね。羨ましいわ！」

と、男達を笑わせた。

「まるで一流ホテル並の豪華な部屋じゃない？ただしバスとトイレは無いけど、・・・どうせお風呂はあなたたちのおへや春部屋でお客と一緒に入るし、ウンチも何時もお客の目の前ですることにな

のだから必要ないわね。お小水だけなら、そのバケツにすれば良いし・・・」と、部屋の片隅に置かれた蓋付きのポリバケツを指した。

銀子の話を聞いて、男達は、鉄格子から丸見えの牢内で女達がポリバケツを跨いで用を足す姿を見たいと、見張りの役を買って出ようと思った。

「今日の練習が終わったばかりで悪いけど、余り時間も残されていない事だし、暫くの間、寝ている間も、この女達の体を鍛えておきたいの・・・」と、銀子が下げてきた手提げ袋から小型の張形を手にし、次に二個のピンポン球を継いだような紐を取り出した。

「このディルドウは前の方に、ピンポン球は後ろの穴よ・・・」と、銀子が、張形に結ばれた紐と二個のプラスチック球を繋いだ紐の端を持って、両手で胸と股間を隠して前屈みとなり、男達の中から少しでも羞恥の部分を隠くそうとする女達の目の前で二つの淫猥な性具をぶらぶらさせた。

今日一日凄惨な肉体調教に晒され、心身共に疲弊しきり、感覚も失われたようになった女性器にそのような物を挿入しようと言う、悪魔のような女に晴江達は言い知れぬ恐怖を感じた。

銀子はそんな女達の気持ちなど意に介さないように、「これで、あなた達は前の穴と後ろの穴に同時に刺激を受けて、おネンネしている間も大事な所が鍛えられるのよ。」と、毒々しい性具を楽しそうに女達に見せ付けるのであった。

「寝ている間に、抜け出してしまわないように、奥まで入れたら、この貞操帯で蓋をさせて貰うわね。」と、更に黒い革で出来た、T字型のベルトを取り出して、恐怖に怯える女達に見せ付けた。

「ね！良くできているでしょう？ここの部分にゴムの突起が付いているのよ。」と、銀子はT字帯を裏返すと、股間と接触する部分を殊更強調して見せた。

その部分は、白っぽい軟質ゴムでナマコのような形の盛り上がりを形成しており、女性の股間の凹部に密着するように出来ていた。

更にその連なった盛り上がりの途中の2カ所には、周囲より一段高く半球状の突起が形成されており、女性の二つの開口部の真上に位置し、秘孔を強く封じる事が出来るように細工されていた。

銀子の手にする二つ性具が女体内部に収められた後、体内の圧力で性具が抜け出ようとすると、表から柔らかく押し返す仕組みになっていることは明らかであった。

「ね！凄いでしょ？貴女たちの穴の位置を採寸して、貴女たち一人一人にあわせて大急ぎで作らせた特別誂え品なのよ。」

軟質のシリコンゴムで形成された前後に並んだ突起の弾力を確かめる様に指で押し込みながら甲高い笑い声を上げた。

男達はその繊細な構造に感心したようにウンウンと首を振った。

「あなた達は寝ながらお腹の中の物をそこの筋肉を使って押し出すように努力するのよ。すると表で待ち構えているこのシリコンゴムの突起が、柔らかく元の位置まで押し返すから、あなた達はそれに負けないようにまた押し出すように努める、そうするとこの突起がその力を受けてもっと強く押し返すから、自然とあそこが鍛えられるという寸法よ。」

と、銀子は指先でゴムの突起を押し込んでその弾力を確かめながら、子供が玩具に触るように嬉しそうに説明した。

「だから、この貞操帯を着けられるとね・・・あそこにピッタリと密着して、トイレに行けなくなるから今の内に出しておいてね。」と、男達に小型の青いポリバケツを持って来させた。

「さあ、これから張形を押し込んだり、ピンポン球を詰め込まなければならないんだから、さっさと済ませてね。」と、銀子が女達の目の前に並べられた3個の青いプラスチック製のバケツを指し示しながら言った。

この残酷な女の意図を知り、男達が見守る前での排泄行為という羞恥に女達は尻込みした。

「何をモジモジと恥ずかしがっているのよ！あなた達は、これから変態客からそんな要求されたら、何時でも何処でも、にっこり笑って目の前でオシッコをして見せたり、ウンチをしたりしなければならないのよ！これも練習だと思ってさっさとやりなさい！」と、尻込む女達を叱咤した。

「お嬢は、さっき皆の前でウンチしたし、お竜^{ねえ}姐さんと姐^{あね}さんは明日の朝ウンチをさせて上げるから、今夜は我慢してね。さあ、時間も無いし、オシッコだけだから早くシャーとやっしまいなさい！」

お竜と晴江は今日一日剛沢達から調教を受けている間、一度もトイレを使わせてもらえず、大量の尿が体内に溜まり、さつきから膀胱を激しく圧迫しているのを感じていた。

曉美にしても浣腸による排便時に同時に小水を漏らしてしまったが、それからかなり時間が全裸のまま過ごしており、激しい尿意を感じているのは事実であった。

女達の僅かな腰の震えから、耐え難い尿意を我慢していることを察した剛沢が、

「そういえば、お前達は今日一度もトイレに行っていないな。我慢していると体に毒だから早くシャーとやっつけてしまえ。」と、大きく笑いながら声を掛けた。

どうせ、お前達が、俺たちの前で小便をちびるのは初めてじゃないんだから、別に恥ずかしがることも無いだろうと、剛沢は言うのだが、前回男達の前で見せた排尿姿は、股間を鞭打たれた激痛により意識が朦朧とする中での失禁であり、自分自身では破廉恥な放尿姿を敵方の男達の目の前で晒した自覚は無かったので、今回のように意識のハッキリしたなかで、男達に見られながらの排尿とは違い、尿意は極限にまで高まっているとはいえ、最後の女としてのプライドが踏み止まらせていた。

自分達を犬や猿の様に扱い、次々と辱めを与え、今又元の子分の前で醜態を晒させようとする剛沢達に怒りを覚え唇を噛んだ。

しかし、今日一日剛沢達から言語に絶する扱いを受けた晴江は、どんなに拒んでも銀子やこの男達は、結局のところ自分たちに無理矢理醜態を晒させるのだらうと、哀しい諦めをして、限界を超えた尿意に背を押される様に、前屈みとなり両手で羞恥の部分を隠しながら、廊下に3つ並べて置かれた中央のスベスベとしたプラスチックのバケツの前に怖ず怖ずと歩み出た。

それを見た、お竜と暁美も諦めたように左右の空いたポリバケツの方に歩み寄った。

三人並んでポリバケツの上に腰を下げた女達の姿に、周囲を取り囲む男達は、「ハハハ・・・良い格好じゃないか。女親分もお竜姐御もオシッコする時はそんな格好をするのか?」、「男勝りの姐御達だから立ったままするのかと思ったぜ。」とか、口々の勝手なことをほざきながら爆笑した。

スベスベしたバケツの縁に豊かな尻を載せるようにしゃがみ込み、股間をピッタリと閉じ、上体を海老の様に折り曲げてしゃがみ込む女達に、取り囲む男達は、

「そんなに硬く股を閉じていたらション便出来ないだらう?もっと堂々と股を開いたらどうだと!」と囃し立て、周囲から何本もの手を伸ばして、嵩に掛かって、左右から肩を押さえ付け、上体を引き剥がす様に正面を向かせて、膝を掴んで股間を左右に拡げさせようとした。

超武闘派の組を預かる大姐の晴江にしてみれば、若いお竜には及ばないにしても、本来ならこんな男達をなぎ倒す事くらい簡単なことであったが、今は剛沢達から長時間に及ぶ肉体調教を受け、全身疲れ切り、腰は痺れて力が入らず、前後左右から手を伸ばし、両手を掴み取り、脚を押さえて羞恥の部分をさらけ出させようとする男達に抗する力が最早残っ

ていないことを自覚するしかなかった。

まるで熟れた果実に群がる蠅の大群の様に自分の身体に触れてくる男達の手の気味の悪い感触に堪えかねた様に男達の手を払い除けると、

「五月蠅いねー！あんた達は女のここを見たことが無いのかい？そんなにここを見たいのなら、ほら見せてやるよ！」

と、自棄になって男達に向かって股間を大開にした。

始めの内は、顔を真っ赤にしてヒステリックな叫び声を上げる元の女親分を薄ら笑いして眺めていた男達であったが、自暴自棄になって大股を上げたのを見てわっと晴江の前に駆け寄った。

そして、自分達に向かって開かれた股間の最奥を少しでも良く観察しようと、何人もの男達が晴江の前に腰をしゃがませ、上体を折り曲げ、息が掛かる程間近から開け放たれた秘所を眺めるのであった。

そこには、綺麗に陰毛を剃り上げられたため遮る物が無い、鞭で打たれた腫れ跡も痛々しい無残な女芯があった。

「そんなに顔を近付けて、かかっても知らないよ！」

と、ヒステリックに叫ぶのを男達はニヤニヤと下卑た笑いを浮かべて見続けるのであった。そして、「大姐はこんなに堂々と股を開いて奥の院までご開帳しているじゃないか！お前達も大姐だけに恥ずかしい思いをさせず、仲良く一緒に大股を開いたらどうだ？」と、ポリバケツの上に腰を降ろして身体を硬く丸めるお竜と暁美に声を掛けた。

晴江が敵方の男達に無惨に城門を開く姿を目の当たりにして、観念したように怖ず怖ずと固く閉ざしていた股間を開いた。

「見せ物じゃないんだよ！ちょっとの間向こうを向いてておくれ！」

バケツの上で蹲踞の姿勢を取りながら、これ以上の屈辱に堪り兼ねたように、卑猥な視線を投げかける元の子分達に、怒りのためか、羞恥のためか、肩をブルブル震わせ顔を真っ赤に染めながら声を上げた。

「何言ってやがる！男勝りの姐さん達がどうやってシャーッとやるのか、みんな見たくて仕方無いんだ！さっさと始めな！始まったらみんなで見つめて大笑いしてやるぜ！」

ついこの間までなら、晴江に一喝されると嘘の様に大人しくなった荒くれ男達であるが、今はその呪縛がすっかり解きほぐされたか、元の女親分の威厳を屁とも思わず、盛んに毒

づくのであった。

なおも晴江達は男達に向かって鋭い声を張り上げ続けたが、取り囲む男達は女達のヒステリックな怒声を面白そうに聞き流して、益々卑猥な言葉を投げ続けた。

過酷な肉体調教により、強い女の仮面を剥ぎ取られ、一時的に大人しい女になった晴江達であるが、少し体力も回復して来たことにより、元の子分達に対する気位が蘇り、堪らず声を上げたのだと気付いて、この高慢さを取り戻した女達を存分に責め苛むことに新たな嗜虐の喜びの様なものを感じる剛沢であった。

アー、イヤ・・・と小さく呟く様に口にするとすっかり紅潮した上体を前に折り、上気した顔を俯かせて瞼を固く閉じ唇を噛み締めた。

自分達を裏切り敵方に回った男達への反発から大きく開いていた秘部がブルブルと震え始め、我慢の限界に達していた晴江の膀胱が忍耐力の限界を迎え、開き切った秘裂の奥の小さな肉の孔から染み出し様にポツポツと先走りの温湯を滴らせ始めた。

晴江の股間からレモン色の水滴が滴り始め、ポタポタとポリバケツの底を叩き始めたことに気付いた男達が気色を浮かべた。

男達の嘲笑に顔を真っ赤に染めながら、遂に我慢の限界に達した晴江が、内側からの圧力に抗しかね、とうとうポリバケツの中に激しく放水を始めた。

その瞬間晴江の口からつんざく様な悲鳴の様な声が上がった。

「ワーッ！とうとう始めやがったぜ！」

間近から晴江の仄暗い股間を覗き込んでいた男達が歓声を上げた。

その叫び声に取り囲んでいた男達からドッと笑い声が起き拍手が上がった。

これにつられるように、二人の女も放水を開始した。

限界を超えた圧力で膀胱の中に押し込められていた汚水が出口に殺到して溢れ出していた。ポリバケツの縁を叩く激しい水の音が地下室の天井に反響した。

「へへ！まるで滝の様じゃ無いか！」

女体の最奥部から迸り出る奔流を覗き込む様に凝視する男達が騒ぎあった。

怒りに任せ、頭に血が上って、ヤケツパチになって男達に向けて思わず大股を開いてしまった晴江であったが、男達の淫猥な視線を感じて本能的に股間を閉じようとしたが、両側に陣取っていた男達が抱えるように両脚を絡め取り、股を閉じることを封じた。

股間を全開にしたまま、後から後から止めどなく排出される激しい放尿に、男達は聞くに

堪えないような野次や卑猥な言葉を投げ付け、狂ったように笑いさざめいた。

「アアーイヤ！　お願い、見ないで！見ないでくれ！」

ついさっきは、頭に血が上って威勢の良い啖呵を切った晴江であったが、敵方の男達や元の子分達の目に屈辱の姿を晒す羞恥に堪えかねたのか、両手で顔を覆って肩を震わせた。

男達の哄笑の中で恥ずかしい姿を晒し続け、最後の一滴まで絞り出した後、静寂が周囲を包んだ・・・衆人環視の前での、激しい放尿姿を晒してしまったという羞恥に、音に聞こえた鉄火女達も両手で顔を覆って泣きじゃくり始めた。

人目も憚らず号泣する女達の惨めな姿を目にして、周囲を取り囲む男達は一機に溜飲を下げ、更なる嗜虐への期待に目を輝かせるのであった。

「ご苦労、ご苦労、これでさっぱりしたろう？さあ銀子にお願いして性具を埋め込んで貰え。」と、剛沢が手を叩きながら言った。

銀子は男達の目の前で晒した羞恥図に自失状態の女達の濡れた股間をティッシュで拭き取りながら、「何をぼんやりしているのよ？これからこんな事を人前で披露するなんて、日常茶飯事になるのだから、甘えるんじゃ無いわよ。」と、キツパリと言うと、

「さて、綺麗さっぱりしたところで、例のモノを入れて上げるわね。」と、告げた。

「今日は大サービスでクリームを塗ってあげるわ」と、銀子が怪しげな乳白色のクリームを歯磨きの様なチューブから絞り出し、ベツトリと二つの性具に塗り付けた。

「催陰クリームよ！これを塗られると、どんな不感症の女でも、あそこがカッカし始めて堪らなくなるのよ！」

丁寧な女体責めの道具にクリームを塗しながら楽しそうに説明した。

晴江たちは喜々として、攻め道具の準備をする銀子に底知れぬ恐怖感を感じた。

「お待ち遠様、それじゃ入れて上げるわね！」

と、二つの性具を手に女達に近づいた。

銀子は男達に指示して、二種類の器具をそれぞれ女達の秘所に埋めさせようとした。

三人の女達を並んでコンクリート床の上に仰向けに寝かせると、左右に立った男達が女達の両足首を掴み思い切り上に持ち上げて左右に開いた。

銀子から卑猥な器具を手渡された男達がギラギラした血走った目で大きく開け放たれたそ

の部分を感じと注視していた。

血に飢えた狼が柔らかな子羊を舌なめずりしながら見詰める様な、昨日までの従順な子分から打って代わった冷酷な加虐者のそれに変化した凶暴な目付きに、女達はゾッと血の気が引く思いであったが、長時間に及び激しい調教で疲労困憊しており、逆らう体力も残されておらず、足を閉じようとする力も失われ、まるで赤子がオシメを取り替えられる時のように足を大きく広げさせられたままであった。

女達が抵抗出来ないように両側の男達からがっちり足首や太股を固定されていることを確認すると、股の間に立った男が、今にも涎を垂らしそうな唇をニヤッと歪め、大きく広げさせられた股間の花卉を指先でゆっくりと開き、男性器の龟头部分を切り出したような性具を前の穴に押し当てた。

長時間に渡る肉体調教を受け続け、これ以上のダメージから女体を守ろうと、生理的に受け入れを拒否しようとする反射的抵抗を無視して、男の力でまだ腫れの残る陰部の奥の柔らかく閉じられた秘孔にズブズブと埋め込まれて行った。

大きな物でなかったが、長い時間、調教を受け続けて敏感になりヒリヒリする所に無理矢理異物を押し込められて、思わず女達から悲鳴が上がった。

男の太い指先に押され最深部まで挿入されながら、女達は目に涙を溜めてイヤイヤと首を振り続けた。

女達の肉洞内に女体開発用の器具を完全に押し込んだことを確認した後、銀子の指示に従って、男達は後の穴にもピンポン球を連結したような性具を埋め込もうとした。

女達の悲鳴を無視して、男達は寄って集って、今度は女達を俯せに転がし、上半身を床に押し付けられたまま両膝立ちで尻を高く擡げる姿勢を取らせた。

取り囲む男達の目に暁美とお竜の白い豊かな双臀がこれ見よがしに上に吐き出されているのが目に映り、背中から尻肉を経て太腿まで隈無く刺青を施された晴江であったが、双臀の間から下腹にかけては、白く柔らかな肌理の細かい素肌を晒しており、極彩色の刺青と白い艶やかな肌のコントラストの紡ぎ出す妖艶さに思わず唾を飲み込んだ。

鮮烈な女達の秘裂は今はピタリと閉ざされ、胎内深く納められた淫具は完全にその姿を没し、その割れ目の間から淫具をつなぐ紐が表に垂れ下がっているだけであり、その淫靡な亀裂の直ぐ上にはこれから受ける辱めに怯えるかのように可憐な小菊がフルフルと震えていた。

かつて顎で使って来た三下の手により、女として最も恥ずかしい後ろの穴まで暴かれて、今また淫猥な器具を埋め込もうとされ、耐え難い羞恥と屈辱感が再び込み上げて来たのか晴江は、元の大姫御としての意地が蘇ったかのように、

「止めておくれ！オカマじゃ在るまいし、わたしゃケツメドにモノを入れる趣味なんか無いんだよ！」と、叫んで男達を涙を溜めた瞳で睨み付け、手を振り払おうとするかのように両脚をジタバタと動かせ必死に腰をうねらせた。

疲労困憊してすっかり大人しくなっていて女達が、最後の力を振り絞り死に物狂いで抵抗する様を残酷な笑みを浮かべ面白そうに見詰めながら、

「何を馬鹿な事を言っているの？あなた方にそんな趣味があるかどうかは関係ないのよ！貴方たちを買う男の中には女の後の穴を責めるのが趣味の人も大勢居るのよ！だから其処を鍛えて置かないと大変な事になるのよ！」

と、ピシヤリと言い放った。

「こんな物普通のピンポン球より小さいでしょう。普段あなた達がするウンコの太さと対してたいした違いは無いでしょう！？」

銀子の大姫達を冒瀆する言葉に、男達が^{チグーネー}違い無いやーと笑い声を上げた。

「今日のところはこんなに小さな物だけど、貴女たちがお客の前に出るまでには、野球のボール位の大きさの物まで呑み込めるくらい開かせて上げるからね！」

良いから、早く突っ込んでしまいなさい！ーと、青ざめる女達を無視して男達に指示するのであった。

劣情に突き動かされる男達の手により哀れな女達の尻たぶは大きく左右に広げさせられ、その目標である菊の蕾にも似た羞恥の器官が露わとなった。

これまで人に見られた事の無かった秘奥の中心を野卑な男達の熱い鼻息が感じられる程間近で見詰められ、ブルブルと腰を震わせて悲痛な声を上げた。

白く柔らかな女肉が形作る谷間にひっそりと存在する、薄く色素を沈着させた肉の井戸の佇まいをしっかりと目に焼き付けた後、元の親分の妻や娘や愛人を責めることに興奮して眼を血走らせた男達が荒い息を吐きながら、中心の薑色した蕾の中心にピンポン球のような性具を押し当た。

その瞬間、ビクッと身体を強張らせ、無理やり没入しようとする異物に対して反射的に固く閉まる筋肉の動きに抗して、淫靡な球体を後口に押し付ける親指の腹にグッと力を込めた。

鼻の頭に汗を浮かべ、眉根を固く寄せ、歯を食いしばり男の暴力に耐えようとした。
そんな空しい努力をあざ笑うように、男の力に抗し切れず、後口周囲の粘膜が引き摺られる様に内側に窪み、菊花の皺が見る見る開いて行く様子が目に映った。
こうして、無理矢理肛門をこじ開けると肛腔の圧力を排除して直腸内に女体調教用の球体をグイッと押し込む事に成功した。

硬質プラスチックの球体が肛口をズルッと通過する時不快な感触に女達は短く叫び声を上げた。

「何だかんだ言っただって、すんなり最初の玉がお尻の穴に入ってしまったやしたぜ。こんなに簡単に入るなんて組に居た時、人に隠れて一人尻穴で楽しんでいたんじゃないですかい？」

男が、ほとんど全体を肉の窪みの中に埋没させ、肛口の肉の輪の中に白い表面をわずかに覗かせている球体を、体内の圧力で外に押し出してしまわない様に指先に力を入れて奥へ奥へと押し込みながら、卑猥な笑みを浮かべて苦悶する晴江の顔を冷たい目で覗き込みながら囁き掛けた。

性具に塗り込められたクリームの潤滑効果により、卑猥な器具はすりと体内に没入した。球体が通過した後、責め具を押し込む男の指先を肛門の筋肉が柔らかく絞めたが、元の親分の妻を陵辱するという昂奮に包まれた嗜虐者の男は、排使用の穴に指を突き入れても不思議と不潔感を感じず、直腸全体から指に伝わる暖かさを楽しむように指の付け根近くまで奥深くグリグリとねじ込んだ。

「ああ・・・イヤ！イヤ！止めておくれ！」

男の力で腸内に異物をねじ込まれながら、激しく顔を左右に振りながら涙を流して哀願を続けた。

両側の男にがっしりと掴まれた両脚を振り解こうと必死に藻掻いたが、激しい調教で疲弊した脚には力が入らない様子であった。

晴江の両太腿を掴んだ男達は、晴江の苦悶ぶりを楽しむかのように更に尻を上に向けて突き上げさせ、尻たぶに手をかけて左右から大きく広げさせて、陰具を埋め込まれた肛門を真上に向けて晒し、一層羞恥を煽った。

お竜も曉美も男達に陰具を肛門に埋め込まれながら悲鳴を上げ続けた。

「お嬢様のお上品なおケツの穴には大き過ぎましたかねー？」

女体責めの球体でグリグリと菊の蕾の中心部をこじり上げながら、笑い声を上げた。

「イヤッ！痛いわ！止めて！」

大亜門戸会に鞍替えしたチンピラから狭い菊の蕾を強い力でこじ開けられようとして、その痛みに涙を流しながら身悶え続けた。

「仕方無いわね、もっと尻穴の奥までクリームを塗り込んでやって。」

銀子が男と暁美の格闘を見ながら、催陰クリームのチューブを手渡した。

「今回は特別大サービスで滑りが良くなるようにたっぷりクリームを塗って上げやすく、今度からは潤滑剤無しで入れられるようにならなきゃ駄目ですぜ！」

チューブからたっぷりクリームを押し出し、中指の先に載せると、暁美のセピア色した菊花の皴を一本一本伸ばすように丁寧に塗り込めた。

淫靡な粘膜に妖しげなクリームを塗り込められ、暁美が舌足らずの悲鳴を上げてビクビクと腰を奮わせた。

肛口の周囲にたっぷりクリームを塗り込めた男は、再びチューブを手にして中指にたっぷり塗ると、そのままズブリと肛門内に差し入れた。

その瞬間、ヒッ！と悲鳴を上げて身体を強ばらせ男の指を強く喰い絞めたが、嗜虐者の男はその強い緊縮力を楽しむ様にグルリと指を動かして直腸内に催陰クリームを塗り込めた。男の指先で腸内を弄ばれる羞恥心と、ネットリしたクリームの発するジワジワと込み上げる熱い刺激に、歯を食いしばって耐えながらも陰具を埋め込まれた前の肉洞がジュルッと潤んだ。

指先を後ろの孔に突き立てたまま、暁美の肉体の変化に気付いたのか、ニヤリと薄ら笑いを浮かべると、

「もう十分でしょう？さあ、入れやすぜ・・・おや？今度はすんなりと入ったじゃないですか・・・」

と、熱病にうなされたように全身を汗塗れにしてハアハアと荒い息を吐き続ける暁美を見下ろしながらほざいた。

「アアーッ！お願いします！この責めはお竜一人が受けます！大姐とお嬢は許して上げて下さい！」

自らも男から女体責めの玉を埋め込まれながら、その身を切り裂くような激しい苦痛と羞恥に大恩在る奈和親分の妻と娘が苛まれているのかと思うと堪らない気分になって、苦しい息の下でお竜が晴江と暁美を庇おうと叫び声を上げた。

「流石に音に聞こえた女侠客のお竜姐さんだね。この期に及んでも身体を張って大恩在る

大姐達を庇おうなんて当に任侠の鑑だね！見上げたもんだよ！その心根の優しさには涙が出るよ！」

銀子が感心したように言った。

「でも駄目よ！これは娼婦としての基本トレーニングなんだから、全員此処を鍛えて置かないと一人前の娼婦とは成れないのよ！誰が何と言おうと野球のボールが呑み込める位になるまでは鍛え続けるわ！」

今や女達のその部分には、一つめの玉が完全に没し、閉じられた薰色の菊の蕾の中心部から玉を結ぶ紐だけがピンと張り出していた。

壮絶な調教を受け、一旦は大人しくなっていた女達が、再び激しく狼狽を示したことに、その部分がこの女達の大きなウィークポイントであり、そのことに本能的に気付いた女達が、自分の秘められた弱点を責められることに怯えて、このように激しく取り乱しているのでは無いか？と思った。

先程の調教でも小振りなバイブではあったが、直腸を内部から責められ絶頂に達した事からも、この女達が背徳のアナルセックスで感じる種類の女である一と、気付いた剛沢は、新たに女達の責め所を見付けたと、サディスティックな快感に浸るのであった。

男達は、女達の抵抗を無視して二つめの球を体内に埋没させる作業に取り掛かっていた。

「へへ・・・二つめの玉もすんなりお腹の中に収まりましたぜ。どうです？存外良い気持ちなんじゃ無いですか？」

菊門内にねじ込んだ二つの球が体内の圧力で逆戻りしないように指先で深く腸の奥まで押し込みながら楽しそうに話し掛けた。

球体を押し込む指が汚辱の穴の中に根元まで沈み、指全体を痛い程締め付けてくる後ろの陰門の圧力を楽しみながら、体内に埋め込まれた異物の発する違和感と対峙するように、額にベっとり脂汗を浮かべ、眉を蹙め苦悶の表情を浮かべる晴江の顔をじっと見詰めた。

「へへ・・・やっぱり姐さん達はこういう事が好きなんだ！俺の指をイヤって程喰い絞める肛門の筋肉がドクドク脈打って熱くなって来やしたぜ！それに前の方もジットリと濡れて来て張形を啜えた部分がピクピクしてやすぜ！」

女達の体調の変化に気付いた男達が身悶える女達を揶揄した。

女達は男達から卑猥な言葉を投げ付けられても、最早毒突く気力も喪失したのか、鼻を啜

り顔を赤く染めイヤイヤと女々しく頭を振るだけであった。

男達に両脚を捉まえられ、倒れないように支えられ恥ずかしい部分を丸出しにされても、女達は身体に力が入らず、メソメソと啜り泣きを漏らし続けた。

涙を啜り上げ、敗北感に包まれながら、銀子が言ったように、二つの性具に塗り込められた催陰クリームの効果か、その二つの性具を包み込む薄い粘膜を通して、下半身が熱く火照りドクドクと血流が速まりゾクゾクするような感じを痛感していた。

「今日は初日だから、まだ小さな物だけど、これから毎日少しずつ大きな物に代えて、ピンポン球の個数も大きさも増やして行くわよ。これで何時でも何処でも前技無しでも男のモノを受け入れられる、何時も濡れ濡れの体を作るのよ・・・」

と、笑みを浮かべながら話しかけるのだった。

二つの器具が完全に股の奥の柔らかい肉中に姿を没し、性具に結び付けられた紐だけがピッタリと閉じた前後の穴から垂れていた。

準備が整ったのを確認して、T字型のベルトで抜け出ないように上から固定した。

銀子の言うように海鼠形をした軟質シリコンゴムはピッタリと女達の花園に密着し、二つの突起は型で押した様に前後の窪みを押し上げた。

ベルトの金具を硬く固定され前後から強い圧迫感に襲われ女達が思わずブルッと身震いした。

この様を見詰める男達は、全裸の上に、禪のような革製の貞操帯を着けられた女達の卑猥な姿に思わずゾクッとするものを感じた。

女らしく細くくびれた腹を更に締め上げる様に捲かれた腰ベルトに、柔らかく豊かな双臀を二つに割る様に股間に食い込んだ縦ベルトが固定され、一層淫靡な風情を醸し出していた。

下腹に淫猥な異物を二つも押し込められ、その前後から襲い来る性感に煽られて、ピクピクと腰を震わせ、苦しげに瞼を閉じて、切なそうに眉を蹙めて、激しく顔を左右に振りたてる女達の姿からは、少し前まで見せていた、男などに負けて堪るかと思う様な毅然とした態度は姿を消し、女としての色香がまるで絞り出される様に振り捲かれるのを感じていた。

「夜中にベルトを弛めて勝手に自分で抜き出さないように、悪いけど手を縛らせて貰うわ

ね。今日はそのまま寝るのよ。」と女達の両手に革製の手枷を填めた。

両手に填めた手枷は短い鎖で首枷と繋がっており、女達は両手を首の前で交差させたまま、下に手を持って行くことは出来なくなってしまった。

男達はコンクリートの床に横たわる女達の身体に手を掛けて無理矢理起き上がらせ立ち上がらせた。

そして女達の身体を突く様にそれぞれの牢に向かって歩ませようとした。

股間を締め付ける太いベルトに付けられた軟質ゴムが神経の集中する女の泣き所を押し上げ、体内に埋没された性具が前後から異物感を発生して、一歩足を進める度に女達に悲鳴を上げさせた。

思わずへっぴり腰の姿勢となり歩幅を最小にしてヨチヨチ歩きになるのを、「何をヨチヨチ歩いていやがるんでー！、もっと胸をシャキッと張って歩かねえか！」と、怒鳴り上げた。

昨日までの恐ろしいばかりの威厳を振りまいていた女達の姿は無く、女の急所を内部から責め立てられ、ナヨナヨと体をくねらせ苦しげに顔を歪める姿を目の当たりにした下等な男達は、益々残忍な気持ちを奮い起こされ、女達の無様な姿を見下して高笑いし、後ろに向かって突き出した尻を平手打ちしながら叱咤した。

女達の狼狽する様子を楽しむ様に周囲を取り囲んだ男達は、牢の前まで連れて来ると、無理矢理檻の中に押し入れるのであった。

低い檻の入り口を通過するため頭を下げ、腰を折った時に、股間のベルトが意地悪く内側に向かって付き上げ、体内に埋め込まれた性具がその機能を発揮して膣壁の薄い粘膜を挟むように蠢き、催陰クリームが発する灼熱感と股間を責め上げる圧迫感に、イヤッ！取ってー！と思わず悲鳴を上げた。

淫靡な苦痛に身悶えして思わず女々しい悲鳴を上げるかつての勇ましい女侠客達の姿に男達の哄笑が起きた。

女達の首根っこを乱暴に掴むと、強制的にお辞儀をさせる様に、無理矢理上体を前に向かってグイッと折り曲げさせた。

尻を上に向ける姿勢となり、秘裂の上を覆うベルトがグッと張り詰め、二つの陰具を秘部に押し込む激しい衝撃に悲鳴を上げるのも気にせず、低い檻の入り口を通過させると、尻を蹴り上げ、乱暴に女達を各人用の牢内に押し込んだ。

女の二つの泣き所を責め立てる異物の凶暴な感触に、毛足の長い絨毯を敷き詰めた床の上に倒れ伏したまま苦悶の表情を浮かべ身悶える女達を冷たい目で見下ろすと、ガチャンと

大きな音を立てて鉄格子の扉が閉められ、施錠された。

男達が立ち去り、灯りが消された闇の中で、催淫クリームの効果も手伝い体内に挿入された異物が誘発する怪しい刺激に女達は、堪えられず股間を蠢かせ、小さく呻き声を上げ、すすり泣きを続けた。

股間から込み上げる淫靡な刺激に責め立てられながらも、身体をくねらせ何とか、自分のベッドまで這い上がった女達であったが、豪華なベッドに横たわっても、今日一日激しい肉体改造を強要され身体は痺れたように疲労している所に、今また秘所に新たな責め具を挿入され、容易に寝付ける状態では無かった。

これまで猛々しい態度で男達に接して、男どもを見下して来た女達も、間断無く股間から込み上げる疼きにより、自分も唯のか弱い女でしか無かったことを骨の髄まで思い知らせれ涙を流した。

呵責無い責めの前に完全に降伏した女達は互いに掛け合う声も無く、ただメソメソとすすり泣くだけであった。

こうして、調教第一日目が過ぎていった・・・

羞恥の肉体改造

翌日の朝　　—と言っても光の差し込まない暗い地下室では、一体今何時なのかも閉じ込められた女達には、知る由もなかったが— 突然牢舎内の電灯が点されたので、布団に横たわる女達はハッと目を醒ました。

男達からの常軌を逸した激しい責めに体力を奪われ、疲れ果てて何時の間にか寝入っていたことが判った。

この昨日までに起こった事がとても受け入れられず、現実の事だったんだろうかとボウツとする頭で回想するが、下腹から込み上げる妖しい違和感に自分達が今置かれた立場を思い知らされた。

男達のさざめく声が牢の外から聞こえて来た。

声の方に目を向けると、銀子が先頭に立ってヤクザ男達を引き連れて、女達を収容する牢の前にやって来るのが判った。

「剛沢会長も黄原もああ見えても、何気に忙しい身だから、今日から三人の調教は私が、

面倒見るからね。」と銀子が女達の前で宣言した。

この限りない残酷性を秘めた、元目高組の壺振り女が主体となって、自分たちを娼婦に貶めるための肉体改造を実行するという事に女達は、底知れぬ恐怖を抱いた。

一晩中、股間の二つの秘孔を責め続けた二つの性具により、腰は痺れを伴いまともにベッドから起き上がることも出来ない状態であったが、檻の中に侵入した男達は、乱暴に布団をはね除け腰部の卑猥なベルト以外何も身に付けていない裸身を丸出しにした。

昨日は散々男達の目に晒した裸身であったが、突然の行為に咄嗟に裸身を海老の様に丸めて少しでも男達の視線からそらそうとした。

身体を折り曲げた時に、股間に留め置かれた二つの陰具がその効果を發揮して、ウツと呻き声を上げた。

男達は、女達の羞恥の様子も気にせず、乱暴に長い髪の毛を掴むと、寢床から起き上がらせ、男の暴力に抗議する様に呻き声を上げる女達をそのままベッドの横に立ち上がらせた。昨日からの疲労が抜けない内に更に一晩中淫猥な器具で下腹を内部から責め上げられた女達は腰に力が入らず、身体がふらついてまともに立つことも出来ない様子であったが、男達は口の端の残忍な笑みを浮かべて、「何をフラフラしてやがんでえ！シャキト立ちやがれ！」と剥き出しの尻に激しく平手打ちを喰らわせるのであった。

こうして性器を裏側から責め上げる苦痛に苦悶する女達の尻を蹴り上げたり、背中を叩いたり、丸出しの乳房を引っ張ったりしながら無理矢理牢の外に連れ出した。

男達の粘っこい野卑な視線に晒され、怯えた表情を浮かべる三人の女が、檻の外の廊下に一列に並んで立たされた。

一晩中自分が女であったことを身をもって思い知らされた晴江達は、昨日の様に威勢の良い啖呵を切ることも無くしおらしい姿で男達の眼前に並んでいた。

両手を首の真下で拘束されているため、形の良い乳房を取り囲む男達の中から隠すことも出来ず項垂れて立つ女達の女性らしい柔らかなカーブを描く白い腰には、黒い革製の貞操帯がまるで禪の様に食い込んでいた。

好奇心目で三人を一瞥した銀子は、「さてさて、ここの様子がどうなっているか見せてね。」と、楽しそうに言いながら、女達の股間を締め上げていたT字帯を外し始めた。

女達は手枷を嵌められたままで、銀子に抵抗することは出来なかった。

「まあ！びしょ濡れじゃない！そんなに良かったの？」と、T字帯を取り去ったあとの、粘液に艶々と光る股間を見つけて大げさな声を上げた。

これには男達もつられて爆笑した。

男達の視線は剃り跡も青々とした股間の深い亀裂に注がれた。

こうして男達の眼前に20代、30代、40代の年の差を持つ陰裂が晒された訳であるが、三つ並んだそれぞれの割れ目は、皆自らの湧き出した樹液により艶々と輝いていた。

そして、その肉の狭間からはたつぷりと樹液を染み込ませた白い紐が下に向かって垂れ、恥ずかし気にフルフルと揺れていた。

昨夜は一晩中股間に埋め込まれた性具から発する妖しい刺激と催陰クリーム of 意地悪い刺激を受け続け、痛烈な嫌悪感に反して、何時しか生身の女体は、この女の内奥に秘めた背徳の欲求を引きずり出すような刺激を受け入れてしまっていたのだった。

催陰クリームのもたらす灼熱感と搔痒感に煽られ、体内に埋め込まれた異物に無意識の内にすがってしまい、何時しか堪らず柔肉で食い締めてしまっていたのだった。

昼間の激しい調教により疲労仕切った体は睡魔に襲われ朦朧としていたが、体内から突き上げる違和感に責められる浅い眠りの中で、何時しか、肉洞の筋肉は自発的にその機能を発揮し始めていた。

催陰クリームは何時しか溶けて体内に吸収され、その効果は無くなっていたが、無理やり目覚めさせられた女体の本能は、疲労と睡魔で朦朧とする中で、無意識の内にまるで口内に含んだ食物を噛み締める様に性具をきつく締め付けたり、胎内に居座る異物を排出しようと、ゆっくりと外部に向けて抽送する様に自律的に動き、一方股間を塞いで待ち構えていた軟質ゴムがそれを柔らかく受け止め、圧力を蓄積して内部に押し返す—と言うような反復運動を一晩中、無意識の内に続け、気付かない内に股間をビッショリと濡らしてしまっていたのだった。

今、銀子から恥ずかしい検分を受けて、その恥ずかしい現象を指摘されても反発することも出来ず、黙って恥を堪え忍んだ。

続いて銀子は、暁美の前に腰を降ろすと、ピッタリと閉ざされた股間の秘孔から垂れ下がる、粘液にベっとり濡れた紐を摘んで、胎内収められていた器具をズルッと引きずり出した。

柔らかな花卉を内側から押し開き張形が表に引き出された瞬間、暁美がウツと声を上げて腰をくねらせた。

「何がウツよ！一晩中良い気持ちにさせて貰った玩具を抜き取られて寂しいの？大丈夫

よ！これからもっと良い気持ちにさせて上げるわよ！」

と、暁美の表情を窺う様に声を掛けた。

一晚中秘所を責め苛んだ器具は、ネットリとした蜂蜜の中に漬けてから引き上げたようにベットリと愛液に塗されており、濃厚な粘液が張形の先端から糸を引いて垂れ落ちた。

銀子は紐を摘んだまま、卑猥な笑みを浮かべて、この濡れそぼった張形を男達の目に見せ付けた。

男達も濃厚な愛液にテカテカ光り、女の深部の匂いを塗され撒き散らしている様な責め具に血走った目を見開いて注視した。

銀子はそんな男達の浅ましい目の輝きを見ると、一人の若いチンピラの前に暁美の身体から抜き取ったばかりの張形を差し出した。

満面の喜色を浮かべた男は、両手を前に差し出して銀子にその掌の上に置いて貰うと、未だ温もりの残るグッショリと粘液に濡れた陰具を嬉しそうにジッと眺め、鼻の前に持って行って匂いを嗅いだりした。

そんな男の仕草に、暁美は男から直接股間に鼻を押し付けられその部分の匂いを嗅がれる以上の羞恥を覚え、思わず顔を伏せるのであった。

こうして三人の女の前から、張形を取り出し終え、検分した後、女達に回れ右をさせて後ろを向かせた。

更に前屈みになってお尻を突き出すように命じた。

両脚を開き、お尻を突き出した女達の菊座は、何事も無かった様に閉ざされ品の良い菊花の様な佇まいを見せていたが、その中心から紐が一本恥ずかしげに垂れ下がっている滑稽な様子が男達に淫靡な笑いを誘った。

再び、暁美の背後に回り、垂れ下がった紐を摘むと、そのままズルズルと引っ張り始めた。

すぼまった蕾の中心から伸びる紐がピンと張り詰めた。

そのまま力を入れて引き続けると、菊の蕾が内側から膨らみ始め、直腸内に収められていたプラスチック球が徐々にその鮮やかな色を見せ始めた。

暁美の肛門はジワジワと球の直径まで一杯に広がり、ポンと音を立てるようにプラスチック球が体外に飛び出した。その瞬間アッと暁美が小さな悲鳴を上げた。

「何が、アッよ？こんなモノ普段しているウンチに比べれば、ずっと小さいでしょう？」

と、男達を笑わせた。

「毎日少しずつ、大きくして行って、鶏の卵くらい楽々呑み込める位に広げて上げるからね！」と、銀子に声を掛けられ、自分達に架された肉体改造の過酷さに底知れぬ恐怖を感じる女達であった。

更に紐を引いて、繋がった二個目の球を取り出して、紐に繋がれてブラブラ揺れるその淫猥な性具をじっと観察した後、傍の男に渡そうとした。

男は喜色を浮かべて、両手を差し出した。

「昨日浣腸して腸内の汚れを全部取った後だから、見た目は汚れていないようだけど、直腸の中に入っていた、バッチイ物だから良く洗っておいてね。」と、銀子に言われて、両の掌で二個のボールを包む様に受け取った男が、不潔な物に触れたように慌てて、ステンレスの汚物入れの中に投げ込んだ。

続いて、銀子は同じようにお竜の肛門内からプラスチック球を引き出した。

「うわーっ！汚いわ！」

お竜の肛門から引き抜いた二つのプラスチック球を繋ぐ紐に茶褐色の便が付着していることに気付いた銀子が大げさな声を上げた。

「それに、お竜姐さんのウンチって、とっても臭いわ！」

と、紐の端を摘んで、鼻の前にプラスチック球をぶら下げて、臭いを嗅ぐ仕草をしながら頓狂な声を上げたので、つられて男達が爆笑した。

お竜は銀子から加えられる辱めに肩をブルブル振るわせ唇を噛みしめて、じっと耐えていた。

「やっぱり、汚物入れを持って来て正解だったわね。」と、便に汚れた性具をステンレスの箱に投げ入れた。

「さて、^{おね}姐さんの方はどうかな？」

と銀子は楽しむように晴江の背後に回った。

「わー！姐さんの方もウンチがこってり！」

と、二個のプラスチック球や紐の回りに塗された様に付着した汚物を見詰めて、楽しそうな声を上げた。

「それに、女親分の貫禄で、姐さんのウンチの方が、お竜姐さんのウンチよりずっとずっと臭いわ！」と、男達を笑わせた。

自分の身体から出た不潔なモノを男達に見詰められる羞恥と、これ見よがしに見せ付ける銀子の態度に憤怒の思いが込み上げて来て顔が赤く染まった。

銀子の嘲りを受けながら、羞恥と憤怒が縋い交ぜになって肩を小刻みに震わせ唇を噛みしめて恥辱に耐える晴江であった。

「こんなにウンチが穴を塞いでいたら調教が出来ないから、先ず、今日はこの女二人に排便させてスッキリさせてから、その後で前と後ろの穴の調教よ！この前みたいに排便姿をビデオに撮るから準備をしておいてね！」と、背後の男に声を掛けた。

「これだけお腹の中に溜まっていれば、浣腸しなくても出るわね？」

と銀子は手術用の薄いゴム手袋をして、中指でお竜の直腸内を掻き回しながら言った。

第二関節まで突き入れた中指の指先に、腸内に滞留する固形物が触れた。

銀子の指先で腸内に溜まった汚物を掻き回すようにいじりまわされて、堪らずお竜が、顔を赤くして、腰をビクビクと震わせ、恥ずかしそうに悲鳴を上げた

お竜も晴江も、暁美の時のように排便撮影用の足場の上に載せ上げられ、下からカメラで捉えられていた。

大人の肩程もある高い台の上に押し上げられ、身動き出来ないように上体をステンレスの横棒に麻縄で縛り付けられ、大きく股間を広げられた姿勢で、女達が顔を赤く染めていた。

「ああー、どうか元の目高組の人達の前で晒し者にしないで下さい」

かつては賭場の壺振り女と軽く扱っていた銀子に涙を浮かべながら哀願した。

やはり、晴江達にとって従来顎で使っていた三下達の前で醜態を晒すのは堪えがたい苦痛なのだ。

「何言ってるの？大亜門戸会に鞍替えした元目高組の人も含めて、大亜門戸会の若い衆には今日からの調教に参加して貰うことになっているのよ！」

女達の哀しい願いを無視するように、大きく左右に広げられた股間の中心をズロリと撫で上げて銀子が冷たく言い放った。

「ほら！頑張っ、て、お腹に力を入れてウンチを出すのよ！あなた達のお客の中には浣腸による強制排便より自然な排便を見たがる客も多いのよ！」と、銀子が晴江の尻を平手でパシリッと叩いた。

これまで見下していた銀子から打って変わった高圧的な態度で迫られ、二人は恐怖と混乱の懊悩の中に居た。

急激な運命の変転の間に、加虐者に対する抵抗心も衰弱してしまった二人の女は、命じら

れるままに、下腹に力を込めて、直腸内に溜まった汚物を排泄しようと努力していた。

二人ともお通じが悪い方ではなかったし、銀子が指摘するように便も下腹に降りて来ていたが、高い台の上に載せられた恐怖感と、周囲を埋め尽くす男女から卑猥な目で見つめられる緊張感で肛口は固く締まり排便できずにいた。

いつまで経っても、排便を始めない二人の女の前に銀子が立ち上がった。

「出せ出せと言われても貴女たちにとってはお虫酸が走る様な男達の目の前でウンチをしろと言ったって緊張して出来る訳無いわね・・・いいわ！私がどんな時でも排便出来る身体に調教して上げるわ・・・」と銀子はお竜の後口の周囲を指で撫で回しながら言った。

「よう！お前達面白そうな事をやっているじゃないか？」と、仕事の手が空いたのか剛沢が黄原を伴って調教室を訪れた。

「丁度良い所に来たわ。ちょっと手伝って欲しいの」と、銀子が黄原に声を掛けた。

「この女が緊張して、がちがちになっているから、一度気をやらして体をほぐして上げていの」と、銀子が黄原に頼むと、

「ああ、良いよ。」と、銀子の差し出したパイプを手にして答えた。

そして、足場の上に載せられたお竜の正面に回った。

大男が一人、隙間に入れる程の間隔を置いて設置された2台のステンレス製の棚を利用して作られた足場の上に、お竜は両足首を麻縄で縛り付けられ固定されていたので、股間は大きく押し広げられ、目の前に立つ黄原に対して、飾り毛を筆り取られ隠すことも出来ない秘所がパツクリとその姿を晒していた。

上半身を二つの足場を固定する横棒に縛り付けられ、身動きも出来ず、両脚を大きく開いた形で両足首を固定され、秘められた場所を隠すことも出来ず、直ぐ前に立つ黄原の目に晒す屈辱感にお竜が身悶えた。

冷たい目でその周辺の佇まいをじっくりと観察していた黄原は、無言で手を伸ばすと、二本の指でその周囲を撫で始めた。

アアッ！止めておくれ！と、目高組を崩壊に導いた憎い裏切り者の指を避けるように腰を身悶えさせたが、それに構わずお竜の泣き所に指を這わせ続けるのだった。

奸計を廻らし組を破滅に追いやった切り者の指先が、繊細な神経を散りばめた秘所の柔らかな襞を押し開き、内部の充血した粘膜に触れた瞬間、ヒッ！と小さく悲鳴を上げ、ビクッと身体を震わせた。

そんな、お竜の素振りにも躊躇せず、二本の指をゆっくりと秘奥に突き立てていった。それに呼応するように、銀子もお竜の背後に立ち指先で、董色した幾つものの放射状の皺を一本一本伸ばす様に指先でまさぐり始めた。

二人の息の合った前後からの攻撃に、一晩中お竜の身体を責め苛んでいた性具の残して行った残り火が再び炎を熾したのか、ああっ、と甘い声を上げて切なそうに身体を身悶えさせた。

「中々、仲睦まじい所を見せてくれるじゃないか、俺たちもやろうか？」と、剛沢が見物人の仲に混じっていた愛人の亜紀に気付いて手招きした。

剛沢に呼ばれて野次馬の間から近づいて来た亜紀が、先日晴江から奪い取った着物をちゃっかり着込んでいるのに気付いて笑い顔を浮かべた。

剛沢は屋敷内に三人の愛人を囲っており、亜紀が一番年配であり、愛人同士で仲違いしないように、他の二人の若い愛人を統率するような役目も負っていた。

剛沢より少し年下の30台半ばの歳で、以前銀座のクラブに居た所を剛沢に見初められて愛人になったと噂されているキリッとした顔立ちの着物が良く似合う美人であった。

剛沢は亜紀にパイプを持たせると、前を責めるように指示して、自分は晴江の背後に回った。

亜紀は新たに屋敷内に連れ込んだ三人の美女に剛沢を寝取られるのでは無いかと、心の内で危惧している所があり、この女達に密かに嫉妬心の様なものを感じていた。

晴江の開け放たれた股間の間に立った亜紀は、晴江の女の道具を値踏みする様に、ジロジロとその構造を間近から観察し始めた。

亜紀の敵意を帯びた鋭い視線を飾り毛を喪失して剥き身となったその部分に感じて、羞恥に身悶え顔を伏せて「お願い・・・見ないで・・・」と、か細く哀願の声を上げた。

「ふん！男には見せられても女にはイヤだったのかい？良いじゃないか、別に減るもんじやなし・・・」

と、不敵な笑みを浮かべて見詰める男達の方を振り向き男達の笑いを誘った。

「荒くれ男達を顎で使って来た怖い女親分さんのオ███だからどんな形をしているかと思ったら、案外可愛い形をしているじゃないか！色も綺麗で形の崩れも無いし・・・ちょっと触らせておくれよ・・・」

と、言うともき出しとなった晴江の秘裂に指先を伸ばした。

その恥ずかしい部分に同性の指先を感じて、ビクッと身体を震わせるとアアッと悲鳴が上がった。

「ふん！女の手で大事な所を捲られるのはイヤだったのかい？」

亜紀の指先を避ける様に下腹を揺らす晴江に、

「昨日は、散々剛沢や黄原さんに触らせたんだらう？男には触らせても女には触らせたく無いと言うのかい？」

そんな晴江の狼狽ぶりを無視して、亜紀の指先は秘裂をなぞり、その奥に秘められた秘密の花園を押し開き、そこの具合を確かめる様に指を這わせた。

「柔らかくて綺麗な襪をしているじゃないかい。これは良い売春婦に成れそうだね？女親分をやっているよりアンタには娼婦の方があっているよ！」

と、晴江の秘奥を撫でさすりながら勝ち誇った様に笑い声を上げるのだった。

同性の、しかも剛沢の愛人に秘所を撫でられる感触と屈辱感に晴江の身体がブルブルと震えた。

指先でしつとりを潤んだ、お竜の内部の感触を充分楽しんだ後、不意に黄原はお竜の股間に顔を埋めて舌を伸ばし、潤い始めたお竜の秘裂を嘗め始めた。

突然の黄原の口唇を使った攻撃に、お竜は堪らず舌足らずな悲鳴を上げた。

お竜の身悶えを押さえ付ける様に、両の太股をガッシリと抱え込んだ黄原は、そのまま舌先を秘奥の最奥にある肉の洞窟に伸ばしその内部を味わい始めた。

残り火に再び火が点いて、心に反して下腹がゾクゾクと燃え上がり始め、肉洞の内部の細かな絨毛を通して分泌し始めた愛液を啜り上げる様に黄原は舌で内部をまさぐり続けた。

お竜の真後ろから、菊の蕾を愛撫していた銀子も、突然お竜の尻の狭間に顔を押し付けると、口唇で菊花の周りを優しく撫で、舌を硬く立てて、その中心部に突き立てた。

不潔な排泄口であることも気にならない様に、伸ばした舌先で括約筋を押し開き、腸内に舌先を押し入れる事に成功するとその内部を味わった。

ざらつく舌先で前後の羞恥の孔を嘗め上げられて、お竜の頭は真っ白になり、意味の判らない悲鳴を上げて身悶え続けた。

「ホホ・・・アンタ随分と大きなクリをお持ちじゃないか？男のアレみたいな形をしていて、

何だか変な気分になって来るじゃないか！」と、指先で押し広げ晴江の陰核をむき出しにして淫猥に微笑み、見守る男達の哄笑を誘うと、次の瞬間大きく剥き上げたルビーの粒に唇を押し当てた。

不意に股間を急襲された衝撃に晴江が乾いた悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。

そんな晴江の激しい狼狽ぶりも無視して、上下の唇で剥き上げた肉芽を柔らかく扱き、舌を延ばしてその敏感な豆の形をした物を嘗め上げた。

亜紀の思わぬ口撃に女性の神経の集中する部分を責められ、晴江の頭は白くなり訳の分からない呻き声を上げて身悶えした。

その部分を唇と舌で淫靡に責め上げられ、晴江も昨夜から寝ている間も陰具に攻められ続けられた性感の残り火に火を点されたようであった。

秘裂の奥からドロリとした熱い樹液が滴り落ちた。

晴江の前の部分を担当する亜紀も晴江の体調の変化を敏感に感じて、晴江の陰裂に頬張るように口付けし、晴江の体内から溢れ出る愛液の味覚を舌先で味わい品評した。

剛沢も晴江の泣き所の一つと気付いた後の孔に舌先を突き入れ、その内部をまさぐり続けた。

前後の孔を二人の舌先で責められる晴江が白目を剥いて、身体を痙攣させた。

一方、お竜の方も二人の巧みな舌使いでの攻撃にドクドクと愛液を漏らし始めていた。

ビッショリと股間が潤って来たことを確認した黄原はバイブを手にする、グッショリと濡れた秘孔にズブズブと突き立てていった。

直ぐにはスイッチを入れず、ゆっくりと抜き差しを繰り返して、お竜の情念を押し上げて行った。

巧みな技術でお竜を責め始めると、頃合いを見て、銀子も小型のバイブを手に取りお竜の後ろを責め始めた。

バイブをいきなり柔らかく潤んで来た蕾の奥に突き立てるのではなく、細かく振動させながら柔らかい菊花の周辺を円を描く様に撫で回して刺激を与えるのだった。

銀子のバイブにより一層燃え立ち、物狂おしそうに前に突き立てたバイブを締め付け始めたことに気付いた黄原がバイブの電源を入れた。

前後の性感帯を襲うバイブの振動に責め立てられ、二人の息の合った攻撃に堪らず、お竜も腰をブルブルと震わせ甘い声を立て始めた。

「どうだ、俺の言った通り、この女は中々良い持ち物を持っているだろう？」と、前の穴を責める亜紀に剛沢が声を掛けた。

亜紀も筒具で晴江を貫きながら、晴江の開発され始めた膣内の筋肉の食い絞めるような動きに目を見張った。

振動を止めた野太いバイブをふくよかな肉襞を押し広げるように、ゆっくりと出し入れすると、バイブを迎え入れる時は如何にもそれを歓迎するかのような深奥の柔肉を蠢かして奥へ奥へと迎え入れ、抜き出す時はまるで名残を惜しむように柔らかな襞を巻き付かせて抵抗を示すことが筒具を通して伝わって来るのであった。

そして、抜き差しする度にピッチリと加えたバイブと膣壁の隙間からから滴り落ちる豊富な愛液の量に目を瞠った。

亜紀と剛沢に前後から責められ、何時の間にか、感情を押し上げられた晴江が高い台の上で堪え切れ無くなって身を揉んで鼻を鳴らしていた。

「ええ、・・・でも、どんなにこの女のあそこが良くても、これ以上浮気をしたら嫌よ・・・」と、亜紀が軽く嫉妬を込めて剛沢を横目でにらんだ。

「馬鹿野郎、俺が商売物に手を出すかよ！」

亜紀の嫉妬心を恐れたように声を上げた。

亜紀が嫉妬の気持ちを込めた様にバイブのスイッチを入れた。

しどろに愛液を滴らせる肉壺の内部から突然襲い上げた振動に、アンツと鼻を鳴らして腰をくねらせた。

銀子はバイブを細かく振動させてアヌス周辺を撫で回して責めながら、次第にお竜のアヌス周りが熱を帯び、柔らかく、しっとり潤んで来たことを感じていた。

「これからが、難しいのよ・・・下手にバイブを突き立てて、切れ痔にでもしてしまったら商品価値が無くなってしまいうんだから・・・」と、言って、たっぷりワセリンをバイブに塗り付けると、慎重にバイブをお竜の後ろの穴に含ませて行った。

これまで千人以上の女を抱いて来て、女の体の事は知悉していると自信を持っている剛沢は、そんなことは判っているとばかりに晴江の背後を慎重に刺し貫いた。

お竜も晴江も前後の穴をバイブにより同時に責められるという未体験の攻撃に堪らず、甘い悲鳴を上げ始めた。

薄い皮一枚を挟んで微妙な振動に責め立てられ、二人の女は頭の中が真っ白になり、もはや自分を制御できなくなり、かつて顎で使っていた目高組のチンピラも混じる野卑な男達の嘲笑の中で、敵対していた男女に責められるままに激しく絶頂を迎えた。

「さて、緊張も解れた様だし、いよいよこれから本番に行くわよ！」と、銀子が言うと、厚いゴムで出来た細長い風船のような物を手にして、表面にベッタリとワセリンを塗した。台の上で悔しい絶頂を極めされたお竜の股間には二本の杭の様にバイブが突き刺さったままで、激しい絶頂の余韻で腰はブルブルと震えていた。

バイブを加えたままピツタリと閉ざされた後門から淫具をズルズルと抜き取った。腸を引き出される様な感触に、お竜がアアア・・・と小さく声を上げた。

責め苛んでいたバイブが抜き取られた後のうっすらと口を開いた肛口の状態を見詰めて銀子が微笑んだ。そして潤滑オイルを塗した風船の先端を柔らかく開いたお竜の後門に押し当てた。そして指を添えてその細長い風船をジワジワとをお竜の腸内に押し入れ始めた。突然の異物の腸内への侵入にお竜が悲鳴を上げて、銀子の手を避ける様に腰を振ったが、黄原が前に突き立てた儘のバイブを巧みに操作してお竜の肉体を操って銀子の仕事を助けた。そうこうしている間に細長い風船を肛門内に全体に押し込む事に成功した。

ゴム風船を完全に体内に収めて、再びピツタリと閉ざされた菊花の中心からは風船につながる細いゴム管だけが飛び出していた。

次に銀子は、お竜の尻から尻尾の様にぶら下がったゴム管に空気ポンプを繋ぎ、空気を送り込んだ。

腸内で見える見る大きさを増していく柔らかいゴム風船の発する、まるで大量の便が直腸内に溜まった時の膨満感のような気味の悪い感触に、お竜が不安を感じて尻をブルッと震わせた。

銀子はそんなお竜の様子を意に介さず、直腸内で十分に風船が膨らんだ事を確認し、風船に送っていた空気を止めた。

「本当ならお客からウンチをするように言われたら、自力で排泄しなければならないのだけど、最初だから人前で自然排便するコツをその身体に教えて上げるのよ。」

と風船の圧力でこんもりと盛り上がった菊の蕾の周りを指で摩りながら言った。

大亜門戸会の浣腸ビデオ撮影に使う足場の上に載せられたお竜の双臀は、周囲を取り囲む男女に向かってこれ見よがしに大きく後ろに突き出しており、大きく開いた股間には成熟

した今が花盛りと言えるような女の魅力をまき散らす柔らかく蠱惑的な女芯が、あからさまにさらけ出されていた。

そして、その直ぐ後の放射状の皺を刻んだ菊の蕾を思わせる部分からは、飴色のゴムチューブがまるで尻尾のように垂れ下がっていると言う滑稽な姿を晒していた。

銀子はここまでの仕事に満足したかの様にお竜の様子を暫くジット眺めた後、尻穴から垂れ下がるゴムチューブを掴むと、ゆっくり引きながら、完全に直腸内に埋没して、姿を隠しているゴム風船をジワジワと肛門から引き抜き始めた。

飴色のゴム風船は直径4センチ程に膨らみフランクフルトソーセージのような形をしていた。その太い風船が肛門括約筋に絞り上げられながらも菊の蕾を割ってゆるゆると出現する姿に見守る男達が生唾を飲み込んだ。

まるで便が肛門を通過する時のような、ワセリンで潤滑されたゴム風船の柔らかい刺激にお竜が堪らず声を上げた。

何時の間にかゴム風船の全体の半分以上が尻穴から飛び出しており、尻穴にソーセージを差し込んだような滑稽な姿となっていた。

肛口の輪状の筋肉を内側から押し広げるゴム風船の弾力と微妙な柔らかさにお竜の意識が薄れそうになった。

銀子はお竜に排便時の緊張感を無くするための肉体調教として、一機に抜き取るのではなく、ジワジワと時間を掛けて引き出し、遂に全体を抜き取った。

まるで苦しんで便を腸内から送り出したあげく、放出した時の様な感触にお竜がウツと声を上げて顔を蹙めた。

銀子は抜け落ちたゴム風船の空気を抜くと、再び小さく萎んだ風船を、お竜の尻穴に埋め込み圧縮空気を送り再び内部で膨らませた。

「アアーッ！イヤ！もう堪忍しておくんない！」

直腸の内側から込み上げる^{たと}噓えようの無い違和感にお竜が思わず悲鳴を上げた。

そんなお竜の喘ぎにも斟酌する素振りも見せず空気を送り続けた。

再び直腸内で膨張を始めたゴム風船から与えられる感覚に思わず腰をブルッと震わせた。

直腸内に密着した柔らかなゴムの感触が直腸内壁を刺激して、腸全体の蠕動を促す感触を感じ始めていた。

その様子を見ながら、剛沢も銀子をまねて晴江の直腸内にゴム風船を挿入した。

「ここまで飛び出したら、後は引っ張らなくても出せるわね？」

何度か腸内に風船を埋め込まれ、排便の練習を繰り返し、菊花を内部から押し開き半分程ゴム風船が飛び出したお竜の尻を平手で叩きながら言った。

お竜も晴江も何度もゴム風船の出し入れを強制され、その排便の動きを模倣した妖しげな刺激に煽り立てられ、何時しか、元の子分達が卑猥な目で見詰めるのも意識出来なくなり、顔を赤く染め、ハアハアと肩で息を吐いていた。

ワセリンで潤滑された柔らかなゴム風船が肛門括約筋を押し分けて体外に押し出される際の言葉に出来ない様な淫靡な感触を含んだ怪しげな感覚に責め上げられ、堪えられない気持ちになっていたお竜は、銀子に命じられるままに、下腹に力を入れた。

排便の際のように強く息むと、風船の残りの部分がスルスルと出て来て全体が、開いた肛門から飛び出した。

まるで便塊が肛口から飛び出す様な姿に見物の男達から笑い声が上がった。

何度目かの柔らかな風船の出し入れをされながら、お竜も晴江も頬を紅潮させ、舌足らずの悲鳴を上げ、喘ぎ声を発していた。

腸内に挿入した風船の刺激で、排便を邪魔している筋肉の緊張感も喪失している事を確認した銀子は、

「今度は、表から引っ張らないから、自分の力で風船を押し出すのよ。」と、挿入を終えた風船が、葷色した菊門内に完全に埋没していることを確認して命じた。

お竜が辛そうに眉間に皺をよせて、息むと、柔らかい菊門をゆっくりと押し広げて餛色のゴム風船が徐々にその姿を現し、柔らかい生き物のように蠢きながらにゆるにゆると体外に押し出されて、ポンと音を立てて股間から飛び出した。

良く潤滑されたゴム風船のもたらず、排便時のような柔らかい刺激を何度も繰り返し肛門括約筋に覚え込まされ、二人の女の直腸も蠕動運動が誘発され初め、堪らず女達が呻き声を上げた。

ゴム風船による直腸への微妙な刺激が、自発的な排便に向けての腸の運動を呼び覚ましたのだった。

「あー！もう止めて下さい！おかしくなる！」

太くて柔らかいゴム風船が肛門を通過する時の妖しい刺激に堪らなくなった女達が悲鳴を上げた。このような責めを続けられたら本当に発狂してしまうのでは無いかと恐怖が襲った。

「どう、ウンコが出そうなの？」と、銀子の問い掛けに対して、恥ずかしげに首を縦に振った。

ウウッ・・・と小さく呻き声を上げると、堪えられなくなった様に尻を振り、これから我が身に襲い来る羞恥の嵐を予感したのか顔を赤く染めて俯き、身体をナヨナヨと震わせた。ビデオカメラが焦点を当てる中で、董色をしたお竜の菊の華が柔らかく膨らみ、その中心部を押し開いて、逞しい茶褐色の便塊がにゅっと、その姿を見せ始めた。

その尻穴を割って太い棒のように突き出した、淫靡で滑稽な姿に観衆から大きな笑い声が上がった。

直ぐ隣では、剛沢に責められた晴江が、堪らず排便を始める所であった。

「ホホホ・・・マア！お尻の穴がこんなに開いて！流石に男勝りの鉄火姐さんは、お出しになるモノも男勝りだわ！」

肛門の皺を伸ばして、その奥から褐色の塊が姿を現したのを見て、亜紀は可笑しくて堪らないと言うように笑い声を発した。

「それにしても、何て凄い臭いかしら！元の子分達が見ている前にそんな強烈な臭いモノをお出しになって恥ずかしく無いのかしら？」

ついこの間まで晴江が袖を通していた着物の袂で鼻を押さえながら肩を揺すって笑い声を上げた。

「これは、これは、二人とも見事な一本糞だ！」と、見物の男達が二人の女の強烈な排泄図を見守り歓声を上げた。

二人の女の肛門から送り出された、太く長い便が千切れることなく、真下に向かって垂れ下がっていた。

「流石は男勝りのお竜姐さんだ！随分太くて長い糞を放り出すじゃないか？・・・俺だってこんな太い糞は出せないぜ！」

間近で美女の排便姿を眺めながら腹を抱えて笑い上げた。

「大姐の糞も大したモンだぜ！見ろよケツの穴を目一杯カッ^じ拡ろげて、奥から奥から臭い物を出して来なさるぜ！」

お竜姐さんの方が太いーイヤイヤ大姐の方が太いと二人の排便姿を指差して笑いながら言い合った。

「自然排便は臭いが強烈だから嫌ね。」と、銀子が鼻を摘みながら言った。

「しかも、二人同時だから臭いも二倍よ！」と、長々と排便を続ける、二人の女を揶揄した。

晴江もお竜も野卑な男女の卑猥な野次を浴び続けながら、一旦動き始めた腸の動きは、もはや自分の意志で止めることも叶わず、卑猥な男女の前で、気も遠くなりそうな羞恥の排便図を晒し続けるのだった。

そして、便を体外に送り出すため、直腸を絞り上げるように力を下腹に込めていたため、下腹の緊張が膀胱も締め上げ、突然お竜が、後方から排便を続けながら、前方からも小水を噴出し始めた。

この凄まじくも醜悪な、美女の排泄姿に取り囲む男女が、驚きの声を上げた。

「このアマまた小便を撒き散らし始めたぜ！全く此所の栓の緩い女だぜ！」

目高組当時お竜に頭の上がらなかった男達が盛んに揶揄し始めた。

そして、その喚声に誘発されたかのように晴江も、膀胱に溜まっていた尿を激しく前に向かって噴出し始めた。

晴江の正面に立っていた亜紀が慌てて避けたが、着物の裾に小水が掛かってしまった。

「ちょっと！何するのよ！アナタ、わざと狙ったのでしょうか？」

排泄の羞恥に俯く晴江の顔を掴んで自分の方に向けると睨み付けて気色ばんだ。

ああっ！ご免なさい！と、怒気を含んだ剛沢の愛人に向かって涙を浮かべながら謝るのであった。

本来ならこんな女など晴江の敵では無いが、全てを打ち碎かれた晴江には刃向かう気力も沸き上がらないのであった。

「ふん！良いわ！この仕返しはこの後充分やらせて頂くから！私達も銀子さんからこの後の貴女たちの調教を手伝うように言われているのよ！」

と、憎々しげに言うと前に突き出した乳房を乱暴に握り締めて悲鳴を上げさせるのであった。

「ちょっと、ちょっと！元目高組の大姐御とお竜姐さんともあろう者が、人前でウンコしながらオシッコまで撒き散らして恥ずかしく無いの？見ているこちらの方が恥ずかしくなってくるわよ！」と、銀子が、次から次から羞恥図を晒す、台上の二人の女を激しく非難した。

男達もこれに交じって、盛んに女達に聞くに堪えないような言葉を浴びせ続けた。

男達の汚い罵声を浴び、二人の女は羞恥と屈辱に耐えかねて泣きじゃくりながら腸内に残留していた最後の汚物を排出し終えた。

衆人環視の中で排便と排尿するという、強烈な羞恥図を晒し終えた後、二人の女は、精神的にも完全打ち拉がれて、ぐったりと首を項垂れすすり泣きしながら、男達からティッシュペーパーで肛門の回りを拭き取られてから、熱い蒸しタオルで股間を清められていた。

「ほら、何をボンヤリしているのよ？ さつきのは、これから始まる調教のためのウォーミングアップであって、きついのはこの後よ！」と、怪しげな性具を女達に見せ付け、口元に冷たい笑みを浮かべながら女達に宣告するのだった。

「ほら、もっと舌を延ばして、裏筋を丁寧に嘗めるのよ！」

さつきまで男の物の締め方の練習と称して、性器に太い張形を突き立てられ、何度も股間の筋肉を収縮させて、それを締め付ける訓練を続けられていたのだった。

そのため、股間が痺れたように疲労していたが、銀子はそんな女達に休む間も与えず、その女達が体内から絞り出した濃厚な樹液でビッシヨリ濡れたままの張形を使って嘗め方の訓練をされているのであった。

女達への休憩とは疲労した箇所を一旦停止して、連続して別の箇所を調教する事であった。

銀子は、正座するお竜の前に仁王立ちとなり、まるで男が隆起した物を突き出すように、張形の根本に取り付けられた紐で自分の股間に固定し、その先端をお竜の唇に押し当てていた。

剛沢の愛人達も銀子を真似て、面白そうに張形を握って、晴江と暁美の口唇を襲っていた。

「チンポコ嘗めなんて、売春婦に取って初歩の初歩よ！・・・貴方たち剛沢親分から嘗め方がなっていないーて、怒られたんだって？ こんなもの簡単だから、さっさとコツを飲み込んで次に進むわよ！兎に角、貴方たちの売春婦としてのデビューまで、時間が、無いんだからしっかり覚えるのよ！」と、銀子は鞭を振り上げながら、舌と口を使って男性器の性感帯を責めるテクニックを教えるのであった。

「ほら！舌の先端で鰓の裏側に沿って回りを何度もなめ回すのよ！」

張形の先でお竜を責め上げながら次々と指示を与えるのであった。

「次に雁首の裏側の筋の部分の部分をザラザラした舌全体を使って前後に嘗めのよ！」

動作が悪いと、容赦なく鞭を振り下ろし、悲鳴を上げさせた。

「そうすると男達は、感じ始めてオシッコの穴から透明の液を流し始めるから、舌先を鈴口に沿って這わせてから、舌先を固く尖らせてオシッコの出る穴を左右に押し開く様にして、強く突くように嘗め上げるのよ！」

言葉ではテクニックを伝え難いと思うと、時には、指導のため女達を集めて、張形を自分で啣えて見せたり、舌を伸ばして嘗め方の見本を示したりした。

そんな卑猥な動作をおくめも無く開陳する銀子に、同性として堪えられない様なものを感じて思わず顔を背けてしまう女達に気付いて、「何をそっぽを向いているのよ！これは貴女たちに教えるためにやっているんでしょう！目を反らすなんて何事よ！もっと真剣に見なさい！」と、怒気を孕んで怒鳴りつけるのであった。

その後も、何度も同じ動作を反復させられ、スムーズに一連の舌技が出来るようになって来たのに満足したように微笑むと、いきなり腰を突き出して、お竜の口内深く張形を押し込んだ。

「ほら！喉の奥の筋肉全体を使って亀頭全体を柔らかくマッサージするのよ！そして舌で陰莖の中程から根本まで強くしごくのよ！」

突然、喉の奥深くまで張形を突き立てられ、目を白黒させながら、堪らず咳き込むお竜に容赦なく鞭の雨を降らし、

「ほら！何をのんびり一息吐いているの！さっさとディープスロートの練習をするのよ！」と、なおも深く喉の奥に突き立てたまま、柄を握って左右にグリグリ捻り回すのであった。

剛沢の愛人達も銀子を真似て、晴江と暁美の喉の奥深く張形を押し込み、異物への反射反応により喉が痙攣して、嘔吐しそうになるのも構わず、責め立てるのであった。

この美貌を持った目高組の女達に剛沢を寝取られるのでは無いかと、不安と嫉妬を感じていた女達は、情け容赦なく母娘を虐め上げた。

銀子たちから調教される女達を取り囲んで見物している男達は、大きな暴力団組織の頂点に君臨していた女達が、今はその地位も全て剥奪され、顎で使っていた壺振り女からフェラチオの技巧を教え込まれ、目を白黒させ、脂汗を滴らせながら必死に練習している様子を薄笑いを浮かべ、卑猥な目で眺め続けるのであった。

「マッ・・・基礎は大体教え込んだけど、所詮張形は張形だから、やっぱり生のチ■■■■を使わないと本当のテクニックは身に付けられないわね。後は実践練習在るのみよ！・・・

誰かこの女達の練習台になってくれる？」

一連の技巧を叩き込み、一応様に成って来たところで、じっと卑猥な目で調教を受けさせられる女達を取り囲んで見物していた男達に銀子が声を掛けた。

さつきから凄艶な指導を受ける女達の妖艶な姿に、股間を屹立させたままモジモジさせていた男達は、元目高組の女達にこのいきり立つ興奮を解消してもらえると、喜び勇んで正座して待ち受ける三人の女の前に列を作った。

お竜に股間を蹴り上げられ、その恨みを鞭打ちでも返せず、悔しい思いをした植木が、今度こそ恨みを晴らそうと、お竜の前に真っ先に並んだ。

お竜の前に列を作ったのは、先日お竜に無様にのされた男達が多く、執念深く恨みを抱き続けており、この機会に遺恨を晴らそうとしている者達ばかりであった。

「お竜、お前に蹴られたチンが、まだ疼くぜ！お前の舌で優しく嘗めて治してくれ！」と、ズボンを下げるとまだ腫れの残る肉茎を取り出した。

それを見ていた周りの組員から、「植木！お竜に蹴られて、粗チンが腫れ上がって立派なチンポに成ったじゃないか！」と、からかわれたのでムツとした顔をした。

お竜の目の前には唾棄すべき男の肉塊が熱を帯びて屹立していた。

こんな愚劣な男など本来のお竜であれば一撃でノックアウト出来るのに今の自分にはそれも叶わないことが悔しくてならなかった。

男の性器の発する不快な生臭い臭いに思わず嘔吐を催したが、目を固く閉じると崖から身を投げる様な思いで、植木のモノに唇を寄せて行った。

固く閉じた瞼の間から一筋の涙が頬を伝わった。

「ちょっと！何、目を瞑ってご奉仕しているのよ！ちゃんと目を開けて男の人が喜ぶ様子を観察しながら嘗めなければ駄目でしょう！イヤイヤ啜えて貰っても男の人は嬉しくないのよ！貴女の方から嬉しそうに笑みを浮かべながら嘗めなきゃ駄目よ！」

眉間に皺を寄せ、固く目を閉じて植木のモノに舌先を匍わすお竜の様子に気付いた銀子が邪険な声を上げた。

お竜の舌先が、銀子に仕込まれた技術を思い出しながら、必死の思いで雁首の回りや裏筋を丁寧に嘗め上げたので、込み上げる快感に、植木はうっとりした表情を見せ始めた。

ところが、偶然まだ痛みが残る部分に強く舌先が触れたため大げさに悲鳴を上げると、カッとなって、思わずお竜の顔を殴り付けたのだった。

お竜は突然植木から横顔を殴り付けられ、そのまま床に倒れ伏してしまった。

そして、突然殴られたことにショックを受けたように、床に顔を押し付けたままシクシクと泣き始めた。

お竜にしてみれば、こんな男など易々と倒すことが出来るのに、何も手出しが出来ない今の境遇の惨めさに思わず涙を流してしまったのだった。

ダイナマイトを腹に巻き付け殴り込みを掛けて来た時や、自分の股間を蹴潰した時は、どんなに恐ろしい女かと思っていたが、剛沢にダイナマイトを股間に突き立てられ、骨の髄まで死の恐怖を味合わされたことにより、男勝りの強い女の鎧を無理やり剥がされてしまい、その下から か弱い女の本性を露わにされてしまった様に、女々しく啜り泣くお竜の哀れな姿を見て、今はお竜から反撃される心配をすることなく一方的にお竜を虐待することが出来る一と、どす黒い嗜虐の喜びがメラメラと燃え上がって来るのだった。

床に倒れたままのお竜の長い髪を掴むと、無理やり涙に咽ぶ顔を引き起こし、自分のいきり立つモノをその赤い唇をこじ開けてねじ込むのであった。

晴江の前に列を作ったのは、やはり年配の組員が多く、長年目高組の組員として晴江も目を掛けて来た、良く顔を覚えている男達が混じっていた。

日頃から目を掛け、信頼もしていた男達が、あっさりと目高組を見限り大亜門戸会に鞍替えしてしまった事実信じられない様な気持ちとなり、またこの裏切り者達の男根を自らの口唇で慰撫しなければならなくなった現実に堪えられない悲憤を感じるのであった。

股間から醜いモノを隆起させて晴江の前に立つ男に、無言のまま恨みの籠もった目を向ける晴江に痺れを切らしたように、

「何時まで女親分で御座いーてな顔をしているんでえ！お前は馬鹿な兄貴連中の命乞いに全財産を使い果たして、その上怪我した奈和親分の治療費として剛沢親分から借金している身の上なんだろう！その借金を身体を張って返済しなければならないだろう？これも身から出た錆ってヤツだ！さっさと俺のモノを嘗めやがれ！」

と、意味の判らないおかしな事を怒気を含んで怒鳴りつけるのだった。

確かに今の自分は大怪我をした夫を人質に取られているようなもので、彼らに逆らう事は出来ないと思い直すと、目を固く閉じて、決死の覚悟で、男の不潔な臭いを立ち昇らせる熱く熱したモノに唇を押し当てていくのであった。

晴江の相手をしなければならぬ男達はそれなりに年配で、女との情交経験も豊富な男達が多く、口唇を使つての奉仕に不慣れな晴江にとっては、中々男達を追い上げることが出来ず難渋していた。

「ほら、喉の奥まで使つて口の中全体で男のモノを煽り立てるのよ！」

銀子が晴江の後ろ髪を驚掴みにすると、グイッと男の股間に顔を押し付けた。

男も銀子の暴力に併せるよう、腰をグッと押し出したので、硬く大きく膨張した物が晴江の喉深くまで侵入した。

目を白黒させて苦闘する晴江の様子を見ながら、

「ほらほら、口を休ませては駄目でしょう！」と、晴江の背後に立ったまま、色々指示を与え、後ろ髪を掴んで晴江の顔を前後左右に振りたてたりしながら、男が絶頂に達するまで、口技の指導をするのであった。

「喉の奥深くを使つて、亀頭をマッサージしながら、舌先で裏筋を嘗め上げて、唇を窄めて根本を締め上げるのよ！」

口腔内に充満する男の性臭と満足に呼吸も出来ない窒息感に正常な神経を失い、顔を真っ赤に染めて脂汗を流しながら、何時しか銀子に命じられるままに、口を窄め、必死になつて男のモノを吸い上げようとしている晴江がいた。

目高組に居た時は、絶対的権力を握つて君臨するこの女達を恐れ、まともに目を合わすことも出来ず、何時も怯えて、俯くように仕えていたのに今は立場が逆転して、自分の悪臭を漂わす肉塊を白目を剥きながら頬張る晴江の姿を見下ろして痺れる様な快感が込み上げて来るのであった。

女遊びには慣れている男であったが、まだ拙いながらも晴江が発揮始めたテクニックにより、煽り立てられ、腰をブルブルと痙攣させると激しく熱い白濁した液体を晴江の喉の奥に噴出した。

熱い奔流を突然口内に受け、顔を真っ赤にして必死の思いで目を剥きながら、ようやくその粘つく物を飲み下した。

ようやく男を自失に追い込んだ事にホッとしたような晴江に、

「男一人に追い込むのに随分時間が掛かったわね！貴方の前に立つ男の数を見なさい！こんな事じゃ全部終わるまでに夜が明けてしまうわよ！」と、冷たく言葉を浴びせるのだった。

やっとの思いで、男を放出させ、ホッとしたように口の端から唾と精液が混じった粘濁液

を垂らしながら、男のモノを口から出そうとした晴江に、

「何をやっているの？ザーメンを絞り出したらそれでお終いと思っているの？貴方のお口を使って全体を綺麗に洗って上げないと駄目でしょう！心を込めて舌先で鈴口を良く嘗め上げて、その後尿道に残っている精液も全部吸い出すのよ！」と、死ぬ思いで男を嘗め上げた晴江を休ませること無く事後の奉仕を命じるのであった。

曉美の前に列を作ったのは若い組員が多く、女性と経験した回数も少ない者も多く、列に並んでいる早い段階から、最早興奮を抑えることも出来ない様子であったので、拙いながらも教えられた技を駆使して、最初の男を早々とゴールインさせることが出来た。

「ウヒョー！俺は大巫門戸会に鞍替え出来て、本当に運が良かったぜ。以前から憧れていたお嬢にこんな凄いサービスをして貰えるとはよー！」と、曉美の口中に放出しながら、感極まったように快哉の叫びを上げた。

敵方に寝返った元目高組の若い三下組員で女性経験も少なく、最初から元の親分の娘を陵辱出来るチャンスに恵まれて興奮していたので、以前は陰も踏めなかったお嬢から熱く屹立させたモノに口技を受けたことに感激して一機に快感が高まり放出したのであった。

口技自体は直ぐに終わったが、若さ故のその量の多さに動揺した。

三人の女を指導して回る銀子に背中を小突かれ、無理やりその生臭い男の精を嚙下し、放出した後の奉仕を強要される曉美だった。

若さ故回復も驚く程早く、射精後の口腔全体を駆使した後始末の気持ちよさに感激して、再び、口内に嵌めたまま膨張を再開し、連続して何回も続けて放出する男もいた。

何人かの男の後で曉美の前に立った男は、曉美も良く覚えている目高組から鞍替えした山川という若い男だった。

今回女達の実技練習への参加を買って出た男達は、皆着ている物を全て脱ぎ捨て、興奮のあまり列に並んでいる間も待ちきれずに、股間の醜い物を隆々と突き上げている男達ばかりであったが、何故か山川だけは裸身にブリーフだけを残していた。

やっと順番が回って来て、^{ひざまず} 跪く曉美の正面に立った際にも、流石に元親分の娘に対して気後れがあるのかモジモジとしていたが、それでも込み上げる若い性欲に勝てず、さっとパンツを膝まで降ろすと、興奮したモノを曉美の顔の前に突き出した。

その山川の隆起したモノを目敏く見付けた銀子が、「キャハッ！可愛い！」と、笑い声を上げた。

山川のそれは、子供の陰茎の様に包皮に覆われていたのだった。

「あら！山川ちゃん、あなた包茎だったの！」

銀子も山川のことは目高組で見知っており、それを見て面白そうに笑い声を上げた。

男は一瞬ムツとしたが、良く見知っている銀子から自分の秘密をからかわれて、半分泣き笑いの表情を浮かべた。

「うるせーな！早く啜えろ！」

山川は、子供のような男根を人の目に触れられることを恥じて、暁美の口中に突き立てることにより周囲の目から隠そうと思って、暁美の口をこじ開けて中に突き立てようとした。

「別に恥ずかしがらなくても良いのよ！若い人には包茎は多いんだから！」

銀子が山川を慰めるように言った。

「それに山川ちゃんのは仮性包茎みたいだから、優しく剥いてあげれば、ちゃんと露出するわよ」と、山川のモノを掌の上でポンポンと持ち上げて硬さを確かめたり、包皮を指先で摘んでひっぱたりして、包皮の付着具合を確かめながら言うのだった。

銀子の手で自分の恥ずかしい部分を撫で回され、

「こら！勝手に人のモノを触るな！」と、顔を赤くして怒鳴った。

「まあ、良いわ！外人には包茎の人も多いうて云うし、ひよっとすると大金持ちの包茎の外人が買いに来るかも知れないから、丁度良い練習よ！」

流石に包茎の張形は売って無いから、色々な経験を積むには、丁度良い練習台だと銀子が嬉しそうに言った。

銀子は暁美を後ろから押して、そのツンとする様な不快な刺激臭を立てる陰茎に顔を近寄せさせると、

「舌先に唾液を一杯付けて包皮と中身の間にそっとこじ入れるよう差し込んで、周囲に沿って、ゆっくりとグルツとなめ回すのよ・・・」と、僅かに露出した亀頭の先端から唾液を載せた舌先を包皮の間に差し入れるよう指示した。

「そして舌先で嘗めて張り付いた皮膚を少しずつ剥がしながら、口を丸くすぼめて剥がれ出した包皮を唇全体で包む様にして、ゆっくりと剥き上げるのよ！」

暁美と山川の様子を見ながら次々と指示を送った。

暁美も銀子の指示に従い、必死に男に対応した。

暁美の口技により、亀頭を覆っていた包皮がゆっくりと捲り上げられて行き、まだピンク色をした亀頭部分が次第に露出を始めた。

暁美の口技による強い快感に山川が腰をガクガクと振るわせ、痺れるような声を上げていた。

剥き上げられた包皮と亀頭の間には白い恥垢がびっしりと付着しており、日頃良く洗われていない深部の強い臭いと、付着した恥垢が暁美の舌をヒリヒリと刺激した。

「ほうら！剥けて来た！・・・山川ちゃん、良かったわね！これであなたも大人の仲間入りよ！」

暁美の口技によりピンク色をした真皮の露出を始めた怒張を見ながら銀子が嬉しそうに笑い声を上げた。

これまで恐れ崇めて仕えて来た目上の女達の口中を穢す快感に酔った男達は、相手の女を代えて更なる快感を貪ろうと、かつては蔭も踏めなかった女の口内に溜まった濁液を思う存分放出すると、直ぐさま次なる女の列に並んだ。

親子の違いを確かめるんだ！と、暁美の口内にタップリと精液を放出した後、晴江に迫ったり、本妻と妾の違いを確認してやるーと、お竜と晴江の間を往復したり、男達は驚喜して三人の女達の間を行き交った。

連続して何人もの男の肉塊を含んだ女達の舌は痺れ切り、唇は擦り切れる様な痛みを感じ、激しい疲労で顎は満足に動かさない状態となっていた。

男達の放出したドロドロとした腐臭を放つ粘液で口内は満たされ、最早唾液も出てこなくなっていた。

一人の男への奉仕が終わった後、次に並んだ男を拒否するように俯いてしまったのを見つけた銀子が、「何休んでいるんだい？舌が疲れたって言うのかい？だらしがないね！後が聞えてるんだよ！肩の龍の刺青が泣くよ！」と、鞭を振り上げ強制するのであった。

最初の頃は噎せ返る様な悪臭を発する男の肉棒から吐出される粘り気の強い汚水に嘔吐を催したものであるが、今はその様な神経も鈍麻して、熱に浮かされる様に、男達に強制されながら熱く勃起したモノを口に含むのであった。

「アアッー！私がそんなに憎いなら殺して！早く殺して！」

際限の無い男達からの陵辱に、突然晴江が突き付けられた腐臭を発する男根から顔を逸らして、堪りかねた様にヒステリックな叫び声を上げ、号泣し始めた。

あの氷の様な伶俐な雰囲気は漂わせ、常に尊大な態度で周囲に対していた大姐が、かつて

の良く通る凜とした声ではなく、腔内に満たされた粘つく精液の為かまるで老婆の様な呂律の怪しいしわがれた声で、悲痛に泣き叫ぶ様子を目にして、あの気位の高い女を此処まで貶めた事に、ゾクゾクとする言いようの無い嗜虐の快感が込み上がって来て、

「何をおっしゃいます・・・大恩ある大姐の事を憎いなんて思ったことは一度だってありませんよ！それどころか、大姐達は剛沢親分から大金を借金して、売春婦となって借金を返さなければならいんでしょう？俺達はこれまでのご恩を返すために、一刻も早く姐さん達に立派な売春婦に成ってもらって、客から大金を稼げるようになって、借金を返せる様になって、この身を投げ出して練習のお手伝いをして上げているんじゃないですか・・・」と、うそぶくと、この男勝りの気位の高い女を心ゆくまで陵辱出来る喜びに、背中がゾクゾクとするような嗜虐の快美感が込み上げて来て、益々硬度を増して来たモノを晴江の唇に押し付け、無理矢理こじ開けようとするのであった。

「女は、自分の気分が乗って来ると、死ぬー！とか、殺してー！って言うもんだぜ！」と晴江の隣でお竜の口内に突き立てている男が気持ち良さそうに腰を振りながら、ニヤニヤ笑みを浮かべながら囁し立てた。

お竜も暁美も自分の口内に突き立てられた男根を対応するのが一杯で、虐待される大姐の事を心配そうに横目で見詰めるしか無かった。

「死ぬ程辛い、苦しいと思うかも知れないけど、一人前の娼婦となるためにはこれを乗り越えないと駄目なのよ・・・」と、晴江の後ろに立った銀子が、激しく嗚咽する晴江をあやししながら再び男の押し当てる怒張を含ませていくのであった。

何度も男達を放出に追い込んだ女達であったが、今は疲弊して折り重なるようにコンクリートの床の上に倒れ伏していた。

薄く目を開いてぼんやりと焦点の定まらない目で天井を見詰めていた。

最早、女達には声を上げることも涙を流す気力さえ残されていないようであった。

「さあさあ、皆^{みんな}休みを取った事だし、午後のトレーニングに入るわよ！」

パンパンと手を叩いて銀子が床の上に横たわる女達の手を引いて起こして回った。

「濃厚な生ジュースもタップリ頂いた事だし、お腹もいっぱいの筈よね？」

銀子は女達に食事を与えること無く、少しの休養だけで次の調教を開始しようとするのだった。もっとも銀子が口にするように何度も男のエキスを飲まされた女達には何か食べる気力も喪失していた。

銀子の目配せを受けた男達が数人掛かりで何やら台の様な物を運び込ませた。

それは先日剛沢と黄原により晴江とお竜の調教に使用した検診台と呼ばれている女性を拘束するための台であった。

怯えた目を浮かべる女達の前に三つの台が並べられた。

銀子の指示を受けた男達が、女達を立ち上がらせ台の所まで引き立てて来ると、そのまま台の上に仰向けに寝かし着けた。

四本の鋼鉄製の脚に取り付けられた拘束具に手足を縛り付けられていったが、女達は抵抗する気力も無く、大人しく台の上に固縛されていった。

長さが 70 センチ程の短い台であるので、女達の尻の大半は台の上に敷かれた黒革のマットから宙に飛び出し、両脚を大きく開いた形で台の柱に固縛されているため、最も隠しておきたい女の部分はパッキリと開いて見詰める男達に向かって隠しようも無くさらけ出されていた。

「そもそも娼婦にとって最も大事なのはココの性能なんだから、ココを使って男を楽しませることが出来る様鍛えるわ。」

門型に股間を拡げた暁美の中央部を指先で撫でながら宣言した。

青沼以外に迎え入れた事の無い秘裂を撫でられて、ヒッ！と悲鳴を上げて身体を震わせた。

「貴方達は皆男を知っているんだから、これ位の物易々と呑み込めるわよね？」

禍々しい形状の張り形を手にするると、仰向けに横たわる女達にその大きさを見せ付ける様に示した。

女達はその不気味な形状の筒具を青ざめた顔で見詰めた。

「私一人で同時に三人の調教は出来ないから、手伝って貰うわ。」

横一列に並べられた検診台に縛り付けられた女達を背にして、取り囲む様に座る嗜虐者達に向かって喋った。

我こそは元目高組の女達に張り形を突き立てたいーと、逸る男達が何人も銀子を見詰めて手を上げた。

「男達に力任せに突き立てられたら、大事な所が壊れて使い物にならなくなるから駄目よ。」

銀子に冷たく言い放たれて、男達はガクリと首を垂れた。

「ここは亜紀さん達にお願いするわ・・・」

何時の間にかジーパンとTシャツに着替えた剛沢の三人の愛人が前に進み出た。

亜紀達は銀子から張り形を受け取り、嬉しそうに検診台に固縛された女達に近づいた。

晴江の前には亜紀が、お竜の前には春華が、暁美の前には香住が陣取った。

三人は野太い張り形を握り絞め、キラキラ光る目で生け贄の女達の股間を見詰めた。

台の上に固定された女達は、不気味な笑みを浮かべる同性に犯される事にゾッとするモノを感じた。

「汚れても良いように、ジーパンとTシャツに着替えてきたから、汐でも小便でも好きなだけ嘔き上げて良いわ・・・」張り形の先端で晴江の秘裂をなぞりながら亜紀が冷たい笑みを浮かべて口にした。

「アンタ達は娼婦なんだから、自分で濡らして受け入れ出来るようにしないと駄目よ！」龟头を模した張り形の先端でお竜の柔らかな肉襞を押し開く様に操作しながら春華が冷たく口にした。

「私達は銀子さんから何時でも何処でも男のモノを受け入れ出来る身体にするように言われているのよ・・・」香住が指先で幾重にも畳まれた襞を押し開き、露出した肉口を筒具の先端でグリグリと摩擦した。

「ああー！痛いわ！」

潤滑剤の塗布されていない張り形で、乾ききった秘裂を無理矢理こじ開けようとする行為に女達は怯えて声を上げた。

しかし女達は、ガサついた男達のように力任せに突き立てる様なことをせず、先端部で秘部を刺激しながら、乳房を揉み上げたり、陰核を撫でたりして女達の身体が柔らかく開のを待った。

女故に女の身体を知り尽くした巧みな攻めに、筒具を突き立てられた秘裂からジワジワと愛液が滲み始め、見詰める男達から「巧いもんだな」と、感嘆する声が上がった。

最初は得体の知れない女達に恐怖を覚え身体を硬くした晴江達であったが、優しく巧妙な技で丹念に攻められる内に不思議な陶酔感を感じていくのであった。

剛沢の愛人達による巧みな愛撫に誘引され何時の間にか女達は性感を昂ぶらせ始めていた。

股間から滲み始めた粘稠ねんちような樹液を丹念に龟头部に塗すと、グイッと肉の狭間の中に押し

入れた。

巨大な張り形が肉を押し分けめり込んで来た感触に女達がウッと呻いて身体を硬くした。しかし、そこから一機に押し込む事はせず、先端部を僅かに埋めただけで、柔らかく出し入れして、更に愛液が滲み出すのを待った。

「どう？良いでしょう？良いっておっしやい・・・」

亜紀が身を乗り出して、苦悶する晴江の顔を覗き込みながらゆっくりと責め具を操作した。鮮やかな刺青の施されたプックリと膨れた乳房を手で揉み上げたり、乳首を指先で愛撫したり、柔らかな唇を押し付けたりして、晴江を快美感の淵に誘って行った。

その感にも亜紀の手にする筒具がジワジワと晴江の体内に消えて行った。

これまで荒々しい男の性しか知らなかった晴江は、女から与えられる甘美な刺激に次第に身体を溶かされて行き、思わず甘い呻き声を発した。

同性から辱めを受けるという汚辱感も野卑な男達の目に醜態を曝すという羞恥心も何か不思議な桃源郷の中に誘われる感覚で薄くなっていった。

ああ・・・と甘い呻き声を発したのを逃さず、亜紀の唇が晴江の唇に重なった。

脳内が桃色の霞に覆われたように何も判らなくなった晴江は亜紀の差し入れた舌に無意識のまま舌を搦めた。

今や女達の股間は夥しい愛液に溢れ、それが半ばまで埋まった淫具の表面を潤滑し、何時の間にか、突き立てられた筒具は根元まで体内に消えていた。

「ほほほ・・・三人とも自分で濡らして見事に張り形を呑み込んだわね・・・」

銀子が嬉しそうに手を叩いて声を上げた。

男達はこの様子を眺め、何も潤いの無かった秘部に潤滑されていない淫具を根元まで押し込んでしまった女達の技量に目をパチパチさせた。

今や溢れ出る体液に塗れ、テカテカと濡れ輝るそれはスムーズに出入りしていた。

巨大な筒具の長いストロークを味あわせる様に、ゆっくりと浅く深く女芯に埋没させ、女達から甘露なすすり泣きを上げさせていた。

「さあさあ、何時までも張り形をお腹の中に入れて貰って良い気持ちに浸ってないで、膣の筋肉で喰い絞めるのよ！」

手にした乗馬鞭で晴江の下腹をピシャピシャと叩いた。

剛沢の愛人達の甘美な技巧と、肉洞から込み上げる膨満感に、頭の中は靄が掛かったよう

に意識が薄くなっていた女達は銀子の言葉でまるで呪文を掛けられたように、胎内に納められた淫靡な棒を周囲の筋肉を酷使して絞め始めた。

ゆっくりと筒具を前後に動かす亜紀達が、急に動きが悪くなったのを感じた。

次第に強くなる肉の抵抗感を楽しむ様に、淫門への疑似ペニスの注送を続けた。

検診台に固縛された女達は、眉根に皺を寄せ、歯を食いしばって、筒具を締め付けた。

「香住さん、調子はどう？」

目を血走らせて暁美の股間を責め立てる香住に声を掛けた。

「ああ・・・銀子姐さん・・・」

香住が股間に埋没したままの責め具から手を離し、銀子に持ち場を譲った。

銀子は筒具の端を握ると肉の絞まり具合を確認するよう操作を始めた。

「何よこれは！もっと真面目に絞めるのよ！」

突然、怒り声を上げて、手にしていた乗馬鞭を振り上げると暁美の下腹を殴打した。

暁美の甲高い悲鳴が上がり、鞭で打たれた白い下腹に赤いミミズ腫れが残った。

暁美の悲鳴を耳にして晴江もお竜も力を振り絞って、胎内の物と格闘する様に絞め上げた。

こうして、銀子は次々と女達の絞め具合を確認して巡り、その都度女達の下腹に赤い痣が増えていった。

銀子の鬼気迫る姿に、これは唯の性行為では無く過酷な肉体調教だと改めて実感して、男達は呆然と見守った。

検診台の黒革のマットの上で白い裸体が全身を蠢かせて、責め具を絞め上げ続けていた。

瞼を固く閉じ、眉根に深く皺を刻み、歯を食いしばって、全身に玉の汗を浮かべながら全身の筋肉を総動員するように体内に侵入した物と戦っているのがあった。

しかし、強い力で絞め上げれば絞め上げるほど肉洞内の異物の大きさや硬さを意識させられ、何時の間にか下腹は激しく感じ始めていた。

鞭打たれた下腹の痛みも今は麻痺して、腹中に納めた疑似男性器の形状が、責め立てられる女達の脳内を支配し、夥しい愛液が溢れ出し、ピストン運動を続ける筒具と肉壁の間からはビュッビュッと手押しポンプで掻き出される井戸水のように噴き出すのであった。

遂に暁美が耐えきれなくなって、悲鳴の様な声を発して、白目を剥いて仰け反った。

暁美の絶叫につられたように晴江とお竜も絶頂を迎えた。

胎内に埋め込まれたままの淫具は、手を離しても落ちることは無く、意識を喪失した女体が強烈な絶頂の余韻を無意識の内に楽しんでいるかのように秘孔から水平に飛び出したままピクピクと蠢いていた。

その陰惨な光景に男達は声を上げる事も出来ずにいた。

やがて、その淫靡な蠢きも治まってくると、胎内の圧力に押されて、ジワジワと迫り出して来て、ポトリと床の上に落下した。

張り形の形状を残して開いたままの肉洞からは、ツート一筋の透明な液が流れ出し、充血した内部を嗜虐者達の目に晒していた。

男達は声も無く血走った目でじっとその様子を見守っていた。

「何だか私達も変な気分になって来たわね？」

凄まじい目高組の女達の崩壊場面を目にして、興奮に顔を赤らめた剛沢の愛人達は、はにかんだような笑みを浮かべて互いに見交わした。

「それじゃこれを着けてスッキリすれば良いじゃない。」

銀子が革ベルトの様な物を手にして亜紀達に示した。

「えー！イヤだ！それを着けるの？」

銀子が手にしたのはT字型をした黒革のベルトで、T字を描く下の部分からは男性器を模した野太い淫具が突き出していた。

愛人達は照れ笑いを浮かべていたが、肉欲に満ちた目は満更でも無さそうにそれを見詰めていた。

愛人達は、ジーパンの上からベルトを巻き付け、「まるで男の子になったみたいね！」と、互いの筒具を触り合いながらキャッキョと笑い声を上げた。

剛沢の愛人としての立場上、子分達の目の前で裸になる事は出来ず、Tシャツとジーパンを身に着けたままであったが、薄いTシャツを通してノーブラの乳房が透けて見え、固く尖った乳首が内側から生地を押してテントの様に突き出している様子を目にして、愛人達も十分に昂奮しているのが見て取れた。

「それじゃ、トドメを差して上げるわよ！」

それぞれの女が検診台に固定された女の前に立った。

まだ意識が朦朧とする晴江達には何が起きているか理解出来ない様子であったが、股間に醜い棒状の物を身に着けた亜紀達が、淫靡に濁った目で自分を見下ろしている様子にハッとするものを感じた。

亜紀は無言で晴江の股間に淫具を突き立てて行った。

男の逞しいモノを突き立てられるなら、まだ我慢も出来るが、女から犯されるのは惨めすぎる！筒具を押し入れられながら屈辱に涙を流して抵抗の意志を示した。

そんなむずかる晴江の顔を両手で支えると、晴江の唇に自分の唇を重ねていった。

十分に濡れそぼち、柔らかく開いた華口に亜紀の腰の物が吸い込まれる様に埋め込まれて行った。

ウツと一瞬呻き声を上げ身体を痙攣させたが、両手で顔を支えて唇を押し当てる亜紀の柔らかな肉感に抵抗を奪われた。

淫欲の残り火に再び火を点されて、憑かれたように互いの赤い唇を重ね合い、舌を貪り合う二人の熟女を男達はただ呆然と見詰めた。

隣では香住が股間に装着した巨大なモノで暁美の淫孔を貫いたまま、暁美の上に身体を預け男達が巨乳と評する豊かな乳房の上に自分の柔らかな乳房を重ねて擦り付けていた。

最初の内は拒絶の態度を示していた暁美であったが、何時しか乳首を勃起させ、香住もシャツ越しに乳首を勃起させていた。

何時しか二人は憑かれたように互いの乳首を擦り合い乳房を重ね合い、互いの口を貪り合った。

春華も腰の物でお竜お竜を串刺しにしたまま、激しくピストン運動を続けながら、お竜の上に身体を被せ、両肩の鮮やかな彫り物の上や、開ききった脇の下や、乳房に舌先を這わせた。

最初は気味の悪い舌の動きとしか思えなかったが、激烈な股間からの刺激と相和し、何時しか素肌の上を蠢き回る柔らかな舌先を受容し始めていた。

こうして晴江達は剛沢の愛人達の繰り出す、レスボスの愛技により官能を昂かめ始めていた。

愛人達もジーパンと下着越しではあるが、淫具に自らの性感部を押し付け、甘い声を上げる様になっていた。

剛沢の選り抜いた愛人達であるから容貌もスタイルも抜群であり、それが勝るとも劣らない目高組の美女達と愛欲に耽るという、官能的な場面を目にして、朝から何度も放出し、既に陰嚢内は空っぽの男達であったが、レスボスの愛に没頭し陶酔状態にある6人の女達の姿を目にして、キリキリと肉塊を膨張させるのであった。

腰に装着した淫具で目高組の女達を深々と串刺しにしながら、愛人達の腰がピクピクと震えだした。

「いくわよ！・・・いくわ！」

6人の女達が一斉におめく様な声を発した。

まるで男が女に突き立てたまま、膣内に射精するように相手の股間に自らの下腹を強く押し当てたまま、ブルブルと腰を震わせた。

フーッと深い息を吐くと、そのまま尻餅をつくように台の下にへたり込んでしまった。

ヌラヌラと淫液に輝る筒具を身に着けたまま、大腿を開いて座り込むジーパンの股間には黒々とした染みが出来ており、それが責め立てた女達から着いたものか自分達から滲み出したものか分からなかった。

検診台の上では相変わらず拘束された女達が凄まじかった崩壊の余韻を残すようにハアハアと荒い息を吐きピクピクと身体を痙攣させていた。

取り巻く男達は扇情的なレスボスの愛に声を上げる事も出来ず、血走った目でジッと見詰めていた。

そんな肉欲に飢えた男達の間を見回しながら、「お待ちどおさま、それじゃ入れても良いわよ・・・」と、男達に声を掛けた。

銀子の許可を受けて男達は歓喜の声を上げて立ち上がり、僅かに腰の回りを覆っていたパンツを脱ぎ捨てた。

男達は列を作って三人が横たわる検診台の前に並んだ。

朝から何度の放出した男達であったが、長時間の休憩で体力を取り戻し、剛沢の愛人達による鮮烈なレスボスのショーで獣欲を掻き立てられ、隆々と屹立する怒張は天を向きその鈴口からは先走りの露が滲み出ていた。

朝から何時間も肉体を酷使され、へトへトに疲れている女達は、薄い意識の中で目の前に

醜い肉塊を押し立てる男達が並んでいるのに気付いて、恐怖の表情を浮かべ、「お願いです・・もう身体はクタクタです・・これ以上は勘弁して下さい・・」と、哀願の声を上げた。

「何を言っているの？貴方達は娼婦なのよ！娼婦はココに男のモノを突っ込んで貰ってナンボなのよ！さっきまでの準備運動でこれからが本番なのよ！」と、冷たく女達の哀願を無視した。

頬に淫靡な笑みを浮かべた男達はいまだ愛液を垂れ流す、開ききった秘孔に自らの分身の先端を押し当てると、そのまま腰に力を込めていった。

女達の口から絶望的な声が響いた。

「何だ！このゆるゆるマ●●は！お前達も娼婦なら娼婦らしく真心を込めて客のチ●●を絞めるんだ！」

疲労の余りすっかり弛緩してしまった秘奥に突き立てながら男達が腹立たしげに声を上げた。

「ああ・・無理よ・・」

男に突き上げられながら呻くように口にした。

そんな哀れな女達の様子も気にせず、腹を立てた男が平手で頬を叩きながら、「サッサと絞めるんだ！」と、大声を上げた。

股間から込み上げる苦痛と男の暴力に泣き喚きながら女達は最後の力を振り絞って男の分身に奉仕した。

こうして何人もの男達から休む事なく連続して犯された女達が死んだように検診台の上に横たわっていた。

開け放たれた股間からは、何度も男達が胎内に残していったものがドロドロと溢れ出ていた。

「それじゃ、夜も遅くなって来た事だし、明日も早くから調教に掛からなければいけないから、最後は軽く仕上げで終わりにするわよ・・」

男達に突き立てられる女達の様子を観察していた銀子が、ボウッとした表情を浮かべる女達を覚醒させるようにパンパンと手を叩きながら言った。

身体は泥のようにクタクタになり、頭はガンガンと痛むのにまだ自分達を責め立てようとするのかと、銀子の底知れぬ残酷さに虚ろな意識の中で恐れ戦いた。

そんな女達の様子も気にする事なく、男達に命じて検診台に固定していた手足の拘束を解かせた。そして一旦身体を持ち上げると今度は裏返しにして検診台のマットを抱きかかえるように、俯せの姿勢を取らせた。

男達により再び手足を拘束されていきながら、女達には最早抵抗する力は残されていなかった。

検診台のマットから女達の丸い尻が飛び出していた。

「ホホホ、良い格好よ。」銀子がお竜の白い柔らかな尻を撫で回しながら言った。

「最後は、軽く尻穴の調教よ！いきなり男のモノを突き立てたら裂けてしまうかも知れないから、最初はオモチャで開いて行くわ。」

銀子の指示を受けて再び愛人達が張り形を手に現れた。

「私達もお尻の穴の使い方は良く知らないけど、銀子さんに教えて貰いながら開いて行くからね・・・」

「最初はこんな細いモノだけど段々と太くしていくからね・・・」

愛人達はズンと突き出した双臀の狭間にその中心部を薄く開いた清楚な菊花を見詰めながら舌舐めずりした。

前の筋肉と繋がっているため過酷な調教で弛緩した女の中心部と同様に女達のもう一つの秘孔は、緊張を失って柔らかく開いたままとなっており、残忍な心をけしかけた愛人達は張り形の先を押し当てた。

「これだけ緩んでいたら潤滑ジェリーは必要ないわね・・・」

緊張を失った肛口にグイグイと張り形を押し進めていった。

疲労困憊している女達ではあったが、それでも肛門反射により受入を拒もうとした。

「力を入れると痛いわよ！息を吐いて下腹の力を抜いて受け入れるのよ！」

銀子が虐待される女達を励ますように声を掛けた。

菊の花を押し開いてメリメリと淫具が腸内に侵入して来るのが分かった。

そこには、快感など微塵も無く、苦痛と屈辱感しか無かった。

潤滑剤の塗られていない張り形を愛液の分泌する事の無い穴に突き立てられ、女達は歯を食いしばって激痛に耐えていた。

こうして、女達は何時でも何処でも事前の準備無しで全身の全ての穴で男を受け入れられる娼婦の身体に作り替えられて行くのであった。

肉の修行場

次の日もその次の日も銀子が主体となって、三人の女の肉体改造が続けられた。

非番の組の若い男衆や剛沢の愛人達も調教の手伝いを買って出た。

合間を縫って、剛沢や黄原も顔を出し、調教の進み具合を確認して回った。

男達の生身の肉棒を相手に調教を重ね、むかつくような不潔な臭いのする、様々な男の肉の武器と相対して休むこと無く口に含ませられ続けていた。

最初の頃は拙い舌先の愛撫による口技であったが、見守る銀子や、口内を激しく突き立てる元目高組の三下や、敵対していた大亜門戸会の男達から厳しく命令され、舌を使って肉茎を強くしごき上げたり、頬を絞って強く吸い上げるよう指導され、男の発する精に噓せ返りながらも、次第にその技巧は巧妙なものとなり始めていた。

これなら普通の客なら口技だけで、簡単にイカせることも出来るだろうと剛沢達は思った。女性の肝心な部分も、昼夜を分かたぬ絶え間ない鍛錬によって膣を構成する筋肉が鍛えられ続け、自分の意志で肉壁を自由に動かし、中に入れた肉棒を締め上げる一いわゆる俵締め芸当が出来るようになって来ていた。

後ろの穴は、未だ銀子が宣言したように野球のボールが入る程には開いておらず、後ろの穴を使う事に対する嫌悪感も依然強いようであるが、大抵の男の持ち物程度の太さの物なら問題無く埋め込める所まで来ており、そんなに焦る必要も無いだろうと思った。

剛沢の目にもこの元目高組のトップに君臨していた女達がそれぞれ男と夢中にさせる様な身体の特製を秘めていることに気付いていた。

格闘技で筋肉が鍛えられたためか、お竜のアソコの締めりは三人の中でも群を抜いているし、晴江の口技も大した物だと感じていた。

特に、暁美の柔軟な体を利用した、扇情的なストリップダンスも評判を呼ぶだろう一客とのセックスの前に、このような艶技を披露すれば、評判を呼び上客が飛び付くこと請け合いだと、胸の中で算盤を弾いた。

日中激しい性の調教を受けて全身が痺れるように疲れ切っている、夜もゆっくと体を休めることは出来なかった。

毎晩ベッドに入る前に、銀子から前と後ろに性具を挿入され、寝ている間も肉体改造が続けられているため、高級なベッドで柔らかい布団にくるまれているとはいえ、前後から女の急所を刺激する猥褻な器具の発する妖しい感触に誘発され、性感を掻き立てられ、ぐっすり眠ることも出来なかった。

その様な不十分な睡眠状態で休む間もなく鮮烈な性の奥義を仕込まれることにより、正常な神経状態で発する様な一女性調教に取って一余計な雑念を抱く余裕も無く、まるで夢遊病者の様に朦朧とする意識の中で羞恥心も嫌悪感も感じる余裕すら無く、その肉体に深く植え込まれていくのであった。

日中の肉体改造も日々苛烈さを増して行き、その後の夜間に挿入される性具も毎回大きくグロテスクなものに変わり、最初の時と比べるとその大きさは著しく大きくなっていった。そして、それが体内で発揮する妖しい違和感も最初の時より格段に大きなものとなっていた・・・

こうしてほぼ一日中昼夜の休み無く連日男を楽しませる技術と男を夢中にさせる様な肉体に鍛えられ始めてから既に十日も経とうとしていた。

久しぶりに剛沢が調教の進み具合を確かめに、地下の調教室に降りて来た。

室内は換気され温度管理されている筈なのに、獣欲を滾^{たぎ}らせた男達が逆らせた夥しい精液と囚われの女達の体から流れ出た淫液の匂いがムツと鼻を衝き、劣情に燃え上がった男女の発する体温で蒸し蒸しと暑さを感じた。

女体を貪る男達も、必死になってそれに応える女達も、異常なまでの性の技巧に没頭する有様で剛沢の来訪にも誰も気が付かない様子であった。

テカテカと額に浮かべた汗を光らせながら頬を窄めて、顔を真っ赤に染めて必死に男のモノをほおぼる晴江の前まで来て立ち止まった。

男のモノをその根元まで深々と口内に呑み込み、喉仏や喉の回りの筋肉が淫靡に上下する様子が見て取れた。

突然の剛沢の来訪に気付いた銀子が剛沢の方に歩み寄った。

激烈な陰情の中で溺れた様に一身不乱に陰技に没頭する晴江に声を掛けようとするのを、剛沢が傍に居ることに気付いて集中力が途切れるのを心配して手で制した。

「あー！大姐のディープスロートは最高だ！」

^{ひざまず} 跪いた姿勢の晴江に立位のまま太い陰茎を根元まで口中に突き立てていた男が、快感にブ

ルブル腰を震わせて擦れた声を上げた。

「全くその通りだぜ！三人とも舐^{ねぶ}って良し、吸って良しの見事な口技をここ数日で身に付けて来たが、中でも大姐のフェラが一番だぜ！」

「一日中休む間もなく、俺達が相手してやっているから、こんなに短期間で上達したんだぜ！少しは感謝して貰いたいや！」

「元々そんな素質が在ったんじゃないか？組に居た時から俺達が相手してやれば良かったぜ！」

周囲を取り囲む男達の卑猥な声も耳に入らないかの様に顔を真っ赤に染め、汗を滴らせながら喉の奥まで駆使して突き立てられた怒張と格闘する姿があった。

銀子の連日の激烈な調教により何時しか晴江は、口内に押し込まれた怒張の亀頭分を咽喉の奥深くに導き入れ喉の筋肉を駆使して亀頭全体をマッサージする秘技を身に付ける様になっていた。

「大姐のここは、まさに喉マ^マだぜ！チンポの先が柔らけ一喉の奥に当たって、堪らねーや！」

ビッシヨリと汗を浮かべた額から滴り落ちる汗が目には滲みるのか、まともに息の出来ない苦しさのためか、硬く閉ざした瞼の奥からは涙を滴らせながら、頬を膨らませ男のモノを完全に口内に含んでいたが、それだけではまだ飽き足りないかの様に、まるで蛇が餌食としたもう一匹の蛇を体内に飲み下して行く様に、更にジワジワと剛毛に覆われた付け根まで口の中に納めて行くに出あった。

「おうおう！そんな所まで！」

全身びっしり剛毛で覆われた毛深い男のジャングルの様に密生した陰毛の中に顔を埋める晴江に、堪えようの無い快感を煽り立てられた男は、晴江の頭を鷲掴みにして更にグリグリと力尽くで自分の股の間に押し付けた。

かつて歯牙にも掛けなかった下っ端の子分の暴力に必死に堪えながら、喉の奥の筋肉を総動員して先端部分を刺激しながら、柔らかな口唇を使って睾丸までも愛撫する元の親分の女房であった。

時々吐き気を催したのか、喉を激しく痙攣させる事はあったが、脂汗を流し、白目を剥きながらも必死に堪えるのであった。

そんな女の断末摩にも似た咽喉の痙攣も男に取っては無上の快感を呼び覚ます様であった。

今^ま当に絶頂を迎えようとして気もそぞろな男と在りっただけの口技を駆使して男を最後の

瞬間に追い上げようとする女には剛沢が間近に居ることも気が付かない様子であった。

「喉の奥がウネウネ動いて・・・亀頭全体をマッサージされて・・・金玉まで柔らかけ一唇でマッサージされて！・・・アアッ・・・堪まんねえ！」

断末魔の叫びを上げると、男は晴江の後頭部を両手で掴むとグイッと自分の股の間に引き寄せて激しく喉の奥に射精した。

气道を太い男根で塞がれ声を上げる事の出来ない晴江は、一瞬身体をビクッと硬化させたが、男の股間の濃い陰毛に顔を埋めたまま、喉仏を大きく上下させて男の排出したモノを嚙下させていく様子が覗えた。

死ぬ想いで男を放出させた後、男のモノを口内から抜き取った晴江は、力が抜けた様に床の上にグッタリと崩れ落ち、喉に残った粘り気の強い生臭い粘液が气道を刺激するのか激しく咳き込み続けた。

そんな哀れな姿を晒す元親分の女房にゾクッとするような陰情を覚えた男は、益々残虐な本性を呼び起こされたのか、床の上に両手をついて蹲る晴江の後ろ髪を驚掴みにして、

「未だ終わりじゃないだろう！銀子から教わった様にチンコの中に残ったものを吸い出して、舌を使ってチンコの周りを綺麗に後始末するんだよ！」

とダラリと半立ちした自分のモノを押し付けるのであった。

ああっ・・・嫌！と、余りの惨めさに人目も憚らず、とうとうヒステリックに泣き叫び始めた晴江の姿に益々凶暴な劣意を掻き立てられた男は、乱暴に口の中にねじ入れた。

晴江も男の暴虐に秘められた被虐の性を掻き立てられたのか、まるで男の発する麻薬のような性臭に麻痺した様に半ば朦朧とする意識の中で、涙に咽びながら口内に押し入れられた生臭い肉塊に舌を舐め始めた。

「へへ・・・そうだぜ！そうやって大人しく後始末をしてくれたら誰も乱暴なんかしないぜ・・・」

晴江の口で陰茎を清められながら、その気持ち良さにウっとりして男が発した。

「おい！何時まで時間が掛かってやがんでえー！後に何人もつかえているんだぜ！

こんな様じゃ一日あっても終わらないぜ！」

後ろに並んだ男達が苛ついた様に声を上げ、晴江の背を蹴り上げた。

晴江を取り囲む男達の中には目高組から鞍替えした子分達も何人も混じっており、奈和親分が如何にこの女の事を愛していたか知っているだけに、元の親分の恋女房を穢すことに言いようの無い背徳の快美感を掻き立てられるのであった。

思いの丈を元の親分の妻の喉奥深くに放出してすっきりした男が、ネットリとした舌使いで放出を終えてまだ神経が昂ぶったままの陰茎全体を清められる心地よさに熱に浮かされた様な目付きで後ろを振り向くと、

「おい、山下！大姐のディープスロートの技は、並の売春婦じゃ出来ない様な天下一品の技だが、お前の粗チンじゃ喉の奥まで届かないから、この良さが分からないんじゃないか？」

後ろで順番を待つ男をからかった。

自分の持ち物を馬鹿にされた山下が怒りに顔を赤くした。

「あら、大丈夫よ！私が舌使いをしっかりと調教したから、喉の奥まで届かなくても口の中だけでも充分満足出来るわよ！」

突然銀子に横から声を掛けられ、傍に剛沢も立っていたことに驚いた様に、晴江の口技に夢中になっていた男や二人の情事を目を血走らせて注視していた列に並んだ男達が慌てて剛沢に挨拶した。

晴江の口内に肉茎を差し入れたまま、顔を染めてうろたえる男を軽く手で制して、次に暁美の元に進んだ。

やはり大勢の男達が、暁美の回りを取り囲む様に列を作り、男を満足させるため激しい息遣いで、励む暁美の姿が男達の輪の中心に在った。

目の前に直立した若い男の前に跪いた暁美は、その豊かな胸を両手で掴んで男のモノを乳房の間で扱き、乳房の狭間から飛び出した男根の先を口に含んで愛撫していた。

「ワーッ！やっぱり、お嬢のパイズリは最高だ！」

快感に腰をブルブルと震わせた男が思わず叫ぶ様に言った。

「組に居た時は何時もそのでかい胸をこれ見よがしにブラブラさせて歩きやがってよ！何時もお嬢とすれ違った後はトイレに駆け込んで、お嬢のオッパイを妄想して指で慰めていたものさ！そのお嬢の巨乳でこうしてマッサージしてもらえるなんて、本当に夢の中に居る様だぜ！」

暁美の奉仕を受けながら快感に酔う男が大声を上げ続けた。

「青沼の兄貴にも毎日こんなサービスをしていたのかい？」

「ああー！おっしゃらないで！」

自分ばかりか愛する青沼まで傷付けられたようで、思わず啜っていた陰茎を口から外して

首を左右に振って悲痛な声を上げた。

「こら！しっかり啜えているんだ！」

暁美の首根っこを掴むと無理矢理自分のモノに唇を押し当てさせた。

「へへっ！兄貴にはやって上げてなかったのかい！兄貴も経験の無いパイズリをして貰って俺達は本当に幸せだぜ！」

若頭として権勢を振っていた青沼でも恐らくこんな奉仕は受けていなかったのだろうと思うと、優越感の交じった快感に奮い立てられ一層激しく自分の熱を帯びたモノを柔らかな乳房に押し付け、腰の動きを激しくした。

「巨乳のお嬢だからこそ出来る芸当よ！お竜姐さんでも出来なくは無いか、お嬢程気持ち良くは出来ないわ。ましてや大姐では到底無理。」

「豊胸手術でも受けさせようか？」

二つの大きな乳房を使って一心不乱に男を舞上げさせる暁美の姿を見ながら、銀子と剛沢が話し合っていた。

「手術で胸を無理矢理大きくしても、やはり天然の乳房には敵わないわよ。お嬢のオッパイが羨ましいわ・・・」

と、自分の胸を見下ろしながら銀子が呟いた。

その時男が奇妙な歓声を上げて放出させた。

男の叫び声に驚き、思わず亀頭先から口を離してしまったので、暁美の顔に真下から男の厚い粘液が浴びせられた。

顔の回りを粘つく精液で濡らしながらも、悲鳴を上げることなく、銀子から教えられた通り愛おしそうに放出を終えたばかりの亀頭部を口に含み優しく舌先で撫で上げ、尿道に残った残液を啜り上げた。

あの男を男とも思わないような気性の激しい母娘をこんなにも短期間で従順な娼婦に墜とすとは、大したモンだと横に立つ銀子の方を繁々と見つめた。

剛沢の賞賛の目配せも気付かない様に、得意気にもう一つの人垣の方に剛沢の視線を向けさせた。

「見て、見て、会長！この女、こんな芸当も出来るようになったのよ！」

お竜の醸し出す淫靡な色香に当てられた様に興奮して上気した男達の作る人垣の中心で大きく股間を捻げ、熱っぽく息を吐きながらしどけなく腰を下ろすお竜を指さしながら嬉し

そうに言った。

銀子が先頭に立って剛沢を引き連れながら、お竜の芸を見物する男達の輪を掻き分けて前に進み出た。

見るとお竜の足許には、ピンクローター等の性具が転がっており、幾つもの茹で卵で山盛りとなった笹が置かれていた。

それらはお竜の体内から分泌されたとおぼしき粘っこい粘液で塗されヌラヌラと輝いていた。

朝から休むことも許されず、女の尊厳を踏み躪る淫靡で過酷な肉体訓練を銀子や男達から受け続けたお竜は、既にまともな神経を失ってしまっているのか痴呆の様にボンヤリと焦点の定まらない目で天上を見詰めていた。

其処には最早男に逆らう気力も失い、無気力に男の淫欲を受け入れるだけの哀れな女に成り下がったお竜の姿が在った。

「ほら、さっきは出来たでしょ？会長の目の前でやっでご覧なさい！」

これまで周囲を取り囲む男達からどの様な責め苦を与えられていたのか、ビッシヨリと全身に汗を浮かべ、身体全体を赤く染め、放心した様にうっすらと唇を半開きにしたままのお竜は物憂げに腰を持ち上げた。

銀子は傍におかれていた笹の中から茹で卵をひとつ手に取ると、黙ってお竜に手渡した。

お竜は、全てを諦めきった表情で、受け取った茹で卵を掌に載せると、静かに腰を下げて大きく両脚を広げて蹲踞の姿勢となった。

恥毛を剥ぎ取られてから暫く経つため、新しい毛がチョロチョロと姿を出し始めた秘部が大きく広がった。

既に何時間もそのような練習を繰り返していたと見られ、お竜の全身はベツトリと汗に塗れ、疲労のためか腰がふらついていた。

その秘裂の間に茹で卵を載せた掌を持って行き、卵を花園の中心部に押し当てた。

辛そうに眉根を寄せて、短くため息を一つ吐くと、茹で卵を体内に押し入れ始めた。

卵の大部分が柔らかく開いた肉襞を押し分け、体内に没した後、お竜は添えていた手を離した。

眉根を一層深く寄せて腰を振り立てると、柔らかな脂肪を溜めた白い下腹の筋肉が一瞬緊張するのが見えた。

そして、僅かに顔を出していた茹で卵がスルスルと体内に吸い込まれて行く様子が、腰を落として正面から見守る剛沢の目に映った。

「どうでしょ？凄いでしょ？」

銀子が、呆然とする剛沢を肘で突いた。

短時日の間に銀子の調教を受けて、お竜がそのように肉体を行使する技術を身に付けた事を目の当たりにして、剛沢は感動してウーンとうなった。

「ほら！未だよ！まだ卵の端が顔を出しているわよ！」

腰を屈めて下方から覗き込む様にして銀子が声を掛けた。

ピンク色した柔らかな女の褌の間から白いモノがその姿をほんの少し覗かせていた。

哀しげな表情を浮かべ、再びお竜が眉根に皺を寄せて、辛そうに息を吐くと、驚くべき吸引力を発揮して、僅かに肉褌の端から姿を垣間見せていた卵を見る見る内に膣内に吸い込んで行った。

今や茹で卵は柔らかいお竜の秘孔にその姿を没し、ピンク色の肉の褌に覆われて完全にその姿を消していた。

「ホホホ・・見事にお腹の中に納めたわね？」

銀子が卵の収まっているはずの下腹の辺りを、内部の具合を確かめるように上から撫でさすった。

下腹を撫で回す銀子の掌の動きに、体内に収めた卵の感触を誘発されるのか、ウウツと呻き声を上げてナヨナヨと腰を振った。

男勝りの鉄火女として何度も白刃の中を潜り抜けた強い女が、銀子の前で抵抗も出来ず、女々しく腰を振る様子に剛沢は信じられない物を見る様に目を凝らした。

「ほら、入れた物は、今度は出すのよ！」

と、励ます様に大きな声を上げると、お竜の開き切った股間の下に手を差し入れた。

すると、見る間に肉の褌が柔らかく開き、中から先ほど胎内に入れた茹で卵が少しずつその白い姿を見せ始めた。

ピンクの華洞を大きく押し広げて、次第にその大きな全体像を現した。

そして、待ち受ける銀子の掌の上に茹で卵を産み落とした。

卵を自らの秘所の筋肉だけで、吸い上げ、産み落とすことに極度の神経の集中と筋力を必要とするのか、難産を終えた後のように、お竜は額にビッシヨリと汗を浮かべてハアハア

と肩で息を吐いていた。

銀子はお竜が産み終えたばかりの、まだほんのり暖かい、お竜の愛液がベっとり塗された茹で卵を剛沢の目の前に差し出した。

銀子から茹で卵を受け取った剛沢は、そのネバネバしたお竜の粘液で濡れ輝る卵をいきなり口の中に放り込むと、いかにも旨そうに咀嚼しながら、

「これは凄い！この芸をお客に披露したら、客が飛び付くこと請け合いだ！」と、叫んだ。

どうやらこの女達には、名器の素質が有るようだと言剛沢は確信した。

いっそ花電車のプロを呼び寄せて、そういう特技も身に付けさせようか？

大概の性技に飽きたベテランの客でも目の前で花電車の秘技を見せられ、興奮の頂点に達した後で、その名器を堪能できるとあれば、大金をはたいても女を買いに来るだろうと算盤を弾いた。

「ほらほら、さつきから卵を出し入れするだけだから、アソコが悶えて堪らないのでしょうか？オコからスケベ汁がタラタラ垂れているわよ！」

大きな卵を産み落としたばかりでポツカリと開いた充血した内部の様子を晒す狭間から透明な粘液が滴り落ち、小刻みに腰を震わせていることを目敏く見付けた銀子が指摘した。

「良いわ！特別大サービスよ！一息入れさせて上げるわ。一旦休憩してスッキリしたらまた卵産みの練習よ！」

と、お竜の周囲を取り囲む男達に目配せした。

何時間にも渡って茹で卵を膣内に上下させ、お竜の性感は耐えがたい程昂進していたが、男とのセックスによる激しい上下運動の様に直裁的な刺激では無く、絶頂を極めることも出来ずもどかしく腰を振っている所を銀子に見とがめられたのだった。

銀子から許可を受けて、お竜を取り巻いていた男達は喜々とした表情を浮かべてローターを次々と手にした。

男達はお竜を仰向けに押し倒すと、左右から両脚に手を掛け、大きく拵げさせて、パツパツと開いたままの中心部に次々とローターをねじ込んだ。

さつきから何度も繰り返されて来た男達の行為であるが、意地悪い茹で卵からの刺激で気も狂いそうになるほど掻き立てられた性感にやっとトドメを刺して貰えるという期待感と、又しても男達の眼前に惨めな敗北の姿を晒さねばならないという悔しさから、男達から柔肉をこじ開けられ、次々とローターをねじ込まれながら、「嫌、止めて・・・」と、むずかる

様に首を振った。

「何言ってやがる、本当は早くイカせて貰いたくってしょうが無いくせに！」

男達が淫靡な笑みを浮かべてお竜の秘孔に何個ものローターをねじ込んで行った。

お竜の肉洞からは何本もの細いコードが伸びていた。

リモコンスイッチを手にした男達が淫猥な輝きを帯びた目で、互いに目配せし合った。

悲鳴の様にけたたましい声が上がってお竜の身体が激しく痙攣した。

その様子を目にしながら、「一旦休憩させる一てのは、いかせると言うことなのか？」と、剛沢が呆れたように銀子の方を見た。

「そうよ、本当に身体を休めてしまったら、筋肉が硬くなってまた始めるのが大変なのよ・・・車でも激しく動かしてオーバーヒート寸前のエンジンは直ぐに止めずにアイドルングさせるでしょう。女の身体も同じよ・・・」

と、表情を変えず応えた。

女同士の愛

銀子と大亜門戸会の男達による凄惨な一日の調教が終わり、氣息延々として調教室の打ちっ放しの冷たいコンクリートの床の上に蹲り、肩で息をする女達を銀子と男達が周囲を取り囲んで見下ろしていた。

そんな疲労困憊して意識も半ば朦朧とする女達の様子を醒めた目で見詰めながら冷たく言った。

「大体一通り男を満足させる技術は身についた様ね・・・並の娼婦じゃこんな事出来る女は、めったに居ないわよ・・・でも、何度も言っている様に貴女たちが相手をするお客さんは、そこいらの売春婦を抱いて満足している様な並のお客さんじゃないのよ。これでもまだ道半ばにも達していないのよ・・・」

銀子の冷酷な物言いに、これまでの気も狂いそうな苛烈な調教でもまだ半ばにも達していないと聞かされて、この後どの様に酷い調教を加えられるのかと思うと目の前が暗くなる様な衝撃を受けるのであった。

「そのためにも、この後の調教に入る前に、ここいらのタイミングで貴女たちに身に付けて貰いたいことが在るのよ・・・」

本当ならここで今日の調教は切り上げて、ベッドでお休みさせて上げるところだけど、今

日はお休みの前にもう一頑張りして貰うわね・・・」

体を起こす力も失い、床に蹲ったまま不安そうな目で見上げる三人の女に、銀子はフフッと微笑んで、

「でも、何も心配しなくて良いのよ・・・これは貴女たちにとって辛い調教じゃなくて、むしろ楽しい調教になる筈よ・・・」

と、怯えた目で見上げる三人を楽しそうに見詰めながら、

「貴女たちを買うお客さんの中には、行為に及ぶ前に先ず女同士での性行為を見て楽しみたがるお客さんもいるのよ・・・そんな目の肥えたお客さんには、通り一遍の演技でのレズプレイなんかでは満足せずに逆に白けさせてしまうわよ・・・本当に身も心も愛し合った恋人同士での濃厚なレズビアンセックスでないと満足して貰えないわ・・・」

ここまで銀子の説明を聞いた暁美の顔がサッと青ざめた。

そんな暁美の表情の変化に気付いて、

「暁美お嬢さん・・・あなたはお竜姐さん変なわだかまりを持っていたわね・・・」

と、激しく敵意の籠もった目で見詰める暁美を見詰め返して呟く様に言った。

銀子の言う様に、自分の父親の愛人に収まってしまったお竜の事を、母親の晴江は見て見ぬふりをしていたが、年若い暁美にはそんな大人の対応は出来なかった。

暁美の憧れる男性像は父親の様な男臭い男であり、何時しか父親を理想化する余り、今回の不倫は父親には非は無く、お竜が父を一方向的に誘惑して敬愛する父を母から奪った一と、信じ込み、憎むべき女として、事ある毎にお竜に対して邪険な態度で接していたのであった。

お竜もそんな暁美に対して、あえて言い訳することも逆らう事もせず、図らずも親分の愛人となってしまった後ろめたさから一生日陰の女として生きる決意をして、暁美の辛辣な言葉をじっと受け止めていたのだった。

奈和がお竜に妾宅を買い与え、やくざの世界から完全に引退させて、組に出入りしなくても良い様にしたのは、その様な配慮があったからであった。

そんな真底お竜に対して恨みを覚える暁美と恋人同士の艶技を強制しようとする銀子の意図を察してお竜がオロオロとした。

「お竜姐さんは、以前剛沢ボスの調教で晴江姐さんと女同士の愛を結んだことが在ると思うけど、まだ恩義在る親分の女房としての遠慮から抜け出していないわよね・・・この機会に晴江姐さんと完全に身も心も恋人同士の関係になって貰うわよ・・・」

以前、剛沢の魔手により燃え上がる性的衝動を抑え切れず、凶らずもお竜と女同士の愛を結んでしまった事があるが、まだ心の奥底にわだかまりを残している晴江は銀子の言葉にドキッとした。

「晴江姐さんも、暁美お嬢ちゃんとは実の母娘かも知れないけれど、そんな事はもう終わりにして今日からは一人の女同士として恋人同士の間柄になって貰うわよ・・・」

実の母娘の間でレスボスの性愛を結ばせようとする銀子の言葉に晴江も暁美も顔色を失った。

「貴女たちは、此処で三人しか居ない仲なのよ・・・三人で仲良く手を取り合って生きて行かなければならないのよ！そのためには変な仲違いや親子の情愛なんか浸っていたら駄目なのよ！そんな下らない感情は吹っ切って互いに愛^{いづく}しみ遭う真の女同士の愛情を育むのよ！」

銀子に畳み掛けられても受け入れる事の出来ない三人であった。

「先ずは、暁美お嬢ちゃんとお竜姐さんに恋人同士になって貰うわ・・・」

「嫌よ！誰がこんな穢らわしい女なんかと！」

銀子の言葉にハッとした様に、お竜の方を睨み付けながら暁美が吐き捨てる様に叫んだ。

暁美の鋭い言葉にお竜が顔を伏せた。

「駄目よ・・・ここで二人が完全に女同士の恋人になって貰わないと後の調教が進め難いのよ・・・誰が何と言おうとお竜と恋人同士に成って貰うわ・・・」

お竜と強制的にレスボスの関係を結ばされるという嫌悪感に、母親に助けを求める様に縋り付く暁美を、ニヤニヤしながら周囲を取り囲みこれまでの経緯を見ていた男達に命じて、強引に引き剥がした。

「やれやれ・・・こんなに頑なに拒むようじゃ、何か手を考えないといけないわね・・・」

男達の命じて大きなベッドマットの様な物が運び込まれた。

それはダブルベッドのマットレスを改造した物の様で下部には鉄枠が取り付けられており、マットの四隅には鉄枠に溶接された鉄柱が上に向かって延びており、鉄柱にはベッドの上の人間を拘束するための鎖の付いた枷が取り付けられていた。

銀子の意を受けた男達が母親に助けを求めてしがみ付くこうとする暁美を引き剥がして、無理矢理マットの上に押し上げると、お竜との女同士の性行為を嫌悪して暴れて必死に抵抗する両手両脚を絡め取り、マットに設置されていた革製の手枷と足枷に縛り付けた。

マットの四隅に設けられた鉄柱に穿たれた穴に手枷足枷の鎖が通され、男達の力により鎖

が思い切り引き絞られ、ダブルサイズのマットレスの上で暁美の全裸の体は大の字に固定されてしまった。

マットレスの上で仰向けの姿勢で両手両脚を大きく広げ、秘部を大きく左右に広げた暁美の扇情的な姿を男達が淫猥な目で見詰めた。

かつて男達から面白半分剃毛され童女のように剥きだしとなっていた秘所も、今は半ばまで伸びた柔らかな繁茂によりうっすらと覆われ、その春草の間から可憐なピンクの花弁が顔を覗かせており、つい先程までの残忍な肉体改造により酷使された部分が、まだ閉じることを忘れて鮮やかな鮭肉色の内部を半ば覗かせており、調教の間に流した夥しい愛液に濡れて艶々と輝いていた。

男達に抵抗して息の上がった暁美の胸がハーハーと荒い息で上下して、その柔らかく大きな乳房が怪しく蠢いていた。

「やれやれ・・・本当はこんな物使いたくなかったんだけどね・・・」

銀子が手術に使う様な薄いゴムの手袋を嵌め、手袋を嵌めた手にまるで歯磨きのチューブの様な容器から淡黄色のペースト状の物をタツプリと絞り出しながら呟く様に言った。

マットに大の字に固定された暁美が顔を銀子の方に向けながら不安そうに銀子の仕草を見詰めていた。

「これはね・・・男を取りたがらない売春婦を懲らしめるために使っていた秘薬でね・・・これをこの大事な部分に塗り込められると、その強烈な刺激でどんな気丈な女でもその苦しさから逃れる為に、そこに何か突っ込んで欲しいって泣き叫ぶ物さ・・・過去に余りに強烈な刺激に何回も塗り込められた末に本当に発狂してしまった女も居たから、この一回だけにしておくけど、アンタもこの苦しさから逃れる為にはお竜に愛して貰うしか無いーと、良く腑に落としておくんだよ・・・」

チューブから絞り出した軟膏の様なドロリとした物を指先に載せて、マットの上に登ると、扇の様に大きく開いた股間の中心に身を寄せて行った。

嫌！嫌よ！－暁美がその恐ろしい雰囲気体に身を悶えさせ顔を左右に振って悲鳴を上げた。

「ああ・・・銀子さん！お願いします！娘を許して上げて・・・」

母親の晴江が、堪らず、これまで顎で使ってきた壺振り女に哀願の声を上げた。

思わず娘の方に躡り寄ろうとするのを周囲の男達が力尽くで押さえ込んだ。

「後で貴女にも自分の娘を心から愛させて上げるわ！でも今はお竜姐さんが先よ！」

不安げな視線を向ける晴江の方を振り向いてニコリと微笑むと、そのまま暁美の方に向き

直り、大きく開いた股間を指先でまさぐり、柔らかに畳まれた襞を左右に押し広げた。

イヤ！イヤよ！暁美が銀子の手を逃れようと身悶えた。

「良い子ね・・・これを塗り込められたら直ぐにでもお竜姐さんに慰めて貰いたい気分になるわよ・・・」

柔襞を押し広げられ、すっかり開孔した秘孔に秘薬を塗した指先を押し込めながら、囁く様に言った。

「アアッー！イヤ！」

銀子の指が秘肉の奥深く没入した事を感じて、暁美が一層大きな声を上げた。

「フフッ・・・バカね・・・イヤじゃないでしょ？貴女はもう直ぐお竜姐さんととっても素敵な気分になれるのよ」

銀子の指に女の最深部を抉られ、今は観念した様にイヤイヤと啜り泣きながら小さく身悶えする暁美の内部に秘薬を塗り込めながら銀子が諭す様に言った。

何度もチューブから秘薬を絞り出し、その奥に丹念に塗り込む間に、暁美の様子に変かが現れ出した。

「ああっ・・・熱いわ・・・」

銀子に塗り込められた秘薬が効果を発揮し始めたのか、暁美が太股を強く擦り合わせたり、クネクネと下腹をくねらせたりしながら、むずかる様に悶え始めた。

「ほほ・・・そろそろ薬が効果を発揮し始めた様ね・・・これからどんどん強くなって行くわよ・・・」

何度もチューブから秘薬を絞り出し、たつぷりと肉襞の内部に塗り込め終えて、満足した様に銀子が指を引いた。

「アアッー！焼けるわ、熱いわ！」

秘奥から込み上げる強烈な灼熱感に、堪らず暁美が悲鳴の様な声を上げて、大の字に縛り上げられた体を身悶えさせた。

「どう？強烈な刺激でしょ？」

マットの上で悲鳴を發して身悶える暁美の姿を銀子が冷たく見下ろした。

取り囲む男達もマットの上で大の字に股間を押し広げた暁美の鮮烈な悶えぶりに目を釘付けにした。

今やヒイヒイと悲鳴を上げ続ける暁美に取って、銀子の声も、男達の淫靡な視線も気が付かない様子であった。

晴江もお竜も不安げな瞳で強烈な刺激に身悶える暁美の姿をオロオロとして見つめるだけであった。

「ホホッ・・・少量なら快感をもたらす催陰剤も何千倍にも濃縮されて塗り込められたらどうなると思う？・・・快感を通り越えて脳天に直撃する程の強烈な刺激に成るのよ・・・どうする？このままではこの子は、本当に気が狂ってしまうわよ・・・」

銀子の言葉の通り、マットの上で身悶える暁美の姿は、時にはヒステリックな悲鳴を上げ、時には白目を剥き、今にも発狂しそうに見えた。

「この子を助けられるのはお竜姐さん・・・貴女だけよ。」

銀子が正面からお竜の顔を覗き込みながら呟く様に言った。

銀子の言う様に今暁美を救えるのは自分しかないと思ったが、恩義在る、そして自分の事を憎んでいる親分の娘と女の愛を結ぶことが憚られ、思わず下を向いてしまった。

「イヤよ！イヤよ！・・・そんな穢らわしい女に私を触らせないで！お母様！助けて！」

股間から込み上げる激烈な灼熱感に苛まれ、意識も朦朧となりながらもお竜の名前に反応したのか、暁美が泣き叫ぶ様にヒステリックな声を上げた。

その暁美の叫び声がお竜の心を激しく揺さぶった。

「お竜！お願い！暁美を助けて上げて！」

股間から込み上げる激しい痛痒感に悶絶する暁美の姿を見続ける内に、堪らず晴江がお竜に哀願した。

「ああ・・・姐さん・・・」

晴江の言葉に、自分が恩義在る親分の娘を助ける意外に無いと思うお竜であった。

しかしそれは何という淫靡で背徳的な事であるかと同時に心に過ぎるのであった。

「どう？やるのね？」

銀子が真剣な表情を浮かべるお竜の顔を見詰めながら聞いた。

お竜が蒼い顔でコクリと肯いた。

マットの上の暁美はイヤイヤと激しく首を振り続けていたが、その抵抗も弱くなっていることが周囲の人間に見て取れた。

「そう？それじゃこの両首の張形でお互いが繋がって愛を結ぶのよ。」

銀子が双頭の張形を取り出して、お竜に見せ付けた。

それは男性を模した巨大なキノコ状の物とそれより少し小振りの陰具を根元で繋いだ物で

あったが、小振りとは言ってもこれまでの調教を通して、身に受けた性具の中でも大きな方であった。

「こちらの太い方がお竜姐さん。小さい方がお嬢ちゃん様よ！」

銀子はその巨大な双頭の張形をお竜に見せ付けながら嬉しそうに喋った。

「まず、お竜姐さんの両手を後ろに縛らせて貰うわよ！ベッドに大の字に縛られて身動き出来ないお嬢と後手に縛られたお竜姐さんのごこちない動きの方が逆にお客さんの目には扇情的に映るってものよ！」

男達が麻縄を取り出してお竜の両手を後ろ手に縛り上げ、余った縄で豊かな胸の上下をヒシヒシと縛り上げて行った。

お竜の形の良い胸が縄に括り上げられてツンと前に突き出していた。

「さあ、それじゃ元目高組のお嬢と元壺振り女の愛の交歓の始まりよ！」

後手に縛り上げたお竜の肩を押して無理矢理暁美の横たわるマットの上に押し上げた。

「幾らお竜姐さんでもいきなりこんな大きな物は入らないでしょう？先ずお嬢ちゃんにこの滑りを良くして貰わないと駄目ね・・・」

銀子がマットの上に押し上げられたお竜の股間の状況を指先で観察しながら言った。

突然の状況に緊張したお竜の其処は、既に潤いを失い硬く閉じていた。

「さあ！これから貴女が嫌い抜いたお竜姐さんが貴女の苦しみを解決して上げるのよ！だから貴女も心を込めてお竜姐さんの此処をナメナメして上げないと駄目よ・・・」

銀子が天井を向く暁美の顔を跨ぐ様にお竜の姿勢を取らせた。

銀子が無理矢理お竜の腰を引いて、暁美の顔の目の前にお竜のその部分を押し下げた。

カッと見開いた暁美の眼前には、お竜の仄暗い股間が映っていた。

イヤイヤと力無く暁美が泣き声を上げた。

「ほら・・・何をやっているの？貴女の苦しみを解くにはお竜姐さんに両首の張形を取り付けて貰って、それで此処を付いて貰うしか無いのよ！こんな太い張形をお竜姐さんは体に通さないといけないのだから、貴女が一生懸命おしゃぶりして、ここの滑りを良くしなければならぬのよ！」

銀子が意地悪く疼痛を発する秘部を指先で撫で回しながら暁美に迫った。

股間から込み上げる強烈な痛痒感で、ほとんど白目を剥く様な蒼白の表情を浮かべて、お竜の開き切った股間に苦しげに顔を擡げた。

「ああっ！お嬢さん！お竜をお許し下さい！」

一声叫ぶと、マットに仰向けに横たわる暁美の顔の上に、自らの秘所を押し当てた。

秘薬のもたらす強烈な刺激に半ば意識が飛びそうに鳴りながらも、暁美は本能的に舌を固く前に突き出すと、お竜の陰唇を左右に押し開きその深奥に舌先を差し入れた。

舌先でその内部を掻き上げ、柔らかな口唇で陰部を優しく愛撫する暁美の巧みな口技にお竜が思わずウッ！と声を上げて、暁美の顔の上に跨った状態をビクッと痙攣させた。

銀子から仕込まれた巧妙な舌使いはお竜のスイートスポットを巧みに捉え、お竜の性感に火を点けた。

必死になって激しく舌を使い、お竜の内部を掻き回す内に激しい衝動に、お竜も堪らず甘い呻き声を上げて、甘美な蜜を滴らせる様になっていた。

暁美の顔が自分の垂らした愛液に濡れているのにふと気付いたお竜は、思わず快美感に浸ってしまった自分を恥じて、

「もう充分です！早くそれを取り付けて下さい！」

と、ニヤニヤと笑ってこちらを見ている銀子に哀願するのであった。

「良いわよ・・・ただしそれを取り付けるのは私じゃなくて、そこのお嬢さんよ・・・」

意味在り気に微笑むと、お竜の下腹を暁美から少し浮かせた。

「ほら！お嬢様、こちらの端を加えるのよ！それで、もう一方の端をお竜のお腹の中に入れて貰い、思う存分此处を突いて貰うのよ・・・」

甲高い笑い声を上げながら双頭の張形の一方を暁美の口内に突き立てた。

暁美の口からは男の物を模した巨大な突起が突き出していた。

後ろで縛られ、柔らかいマットの上で姿勢を崩しながら、お竜は仰向けに横たわる暁美の上で股間を大きく開いてへっぴり腰の不自由な姿勢でそれを胎内に納めようと下腹をくねらせた。

下になった暁美も早くそれをお竜の体の中に埋めようと必死になって顔を蠢かせ、お竜の中心部を狙った。

暫く張形を通して格闘する間に漸く野太い張形の先端がお竜の秘奥を捉えた。

お竜がそれをより深く胎内に納めようと下腹を押し下げていった。

下から見上げる暁美の目には、不気味な生き物が淫靡な口を思い切り押し広げて、涎を垂らしながらどす黒い張形を呑み込んで行く様に見えた。

太長い張形がお竜の膣孔の奥に当たり、膣壁に力を込めたお竜がそれをグッと喰い絞めた。

お竜の最奥を捉えた衝撃が反力となって暁美の口内に帰還して、グッと喉の奥に加えていた張形を押し込み、思わず身悶えた。

「ふふ・・・まるでお竜に無理矢理フェラチオを強制されているみたいじゃないか・・・」

何時の間にか姿を現した剛沢が銀子の隣に並んで呟く様に言った。

剛沢の言う通り、お竜の股間から伸びた淫靡な形をした筒具が暁美の口唇を割って深く突き立てられていた。

暁美の口内から受け取ったばかりの張形を抜き取ると、暁美の苦痛を除こうとお竜が立ち上がった。

仰向けに横たわる暁美を跨ぐ形で、大きく股間を開き、逞しい男根の様な張形を天に向かって突き出す姿勢に、周囲の男達から

「へへ！流石は男勝りのお竜姐さんじゃないか、股の間の物が妙に似合うじゃないか！」

と笑い声が上がった。

不自由な体を操って漸く暁美の扇の様に開いた股間の前に陣取ったお竜は、

「お嬢さん！堪忍しておくんない！お嬢さんの苦痛を除くにはこれしか無いんです！」

暁美が夢遊病者の様に力無くイヤイヤと首を振った。

「ああー！お嬢さん！お竜をお許し下さい！」

一声叫ぶと、秘孔の上に押し当てた張形に腰の力を込めた。

「アアーッ！イヤ！」

秘肉を押し開き、銀子が無理やり塗り込めた秘薬により灼熱感を持って苦痛を発していた肉洞にそれは押し入って来た。

自分の愛する父親を奪った憎い愛人から犯される瞬間であった。

「ほう・・・入ったじゃないか？」

「そんな、一つに繋がったままじっとしてたらお嬢の苦痛は取れないわよ。もっと激しく腰を動かさないと。この薬は媚薬を何千倍にも煮詰めた様な物だから、じっとしていると焼ける様な苦痛があるけど、感じ始めると普通の何千倍もの快感を感じるのよ！」

銀子に急かされて、マットの上に大の字に縛り付けられた暁美の体の上で、後ろ手に縛られた不安定な姿勢のままお竜が腰を動かし始めた。

銀子の言う通り、その秘薬が効力を発揮するのか、腰を前後させるお竜の動きに快感を呼び覚まされ、単純なピストン運動がもどかしく感じるのか、下になった暁美も激しく下腹を蠢かせ始めた。

お竜に抱かれながら、暁美を苦しめていた華洞の肉襖の一つ一つに鋭く食い込む様に激痛を発していた楔が、お竜が腰を一撞きする毎の一つずつ外れ去る様な開放感を感じていた。そして、その苦痛に代わってこれまで経験した事の無い様な快美感が鋭く込み上げて来るのを感じていた。

お竜が腰を動かす度に津波の様な快感が次々と押し寄せ、その強烈な刺激に靄の様な目眩が掛かり、心臓はドクドクと高鳴った。

今や膣腔内に塗り込められた秘薬が凄まじい効き目を発揮し始め、暁美は獣の様な快感の叫び声を上げ、激しく身を振り、上になったお竜を慌てさせるのであった。

後から後から胎内から込み上げる強烈な快美感に衝き上げられ身悶える暁美の姿は上から責め立てるお竜をも煽り立てた。

二人の女は今や火の様に燃えさかる二つの女肉となって汗を噴き出しながら、激しく絡み合っていた。

「ほほ・・・薬の効果で快感は凄いのよ、なかなかイケないのよ。完全に昇天するまでに普通のセックスの2～3倍は掛かるわよ！暁美の事を助けようと必死になっているお竜も大変ね。」

二人が絡み合ってから既に1時間近くが経過していた。

この間火の様に燃え上がった二人の女は途中で身体を休めることなく激しくその身体を求め合った。

二人の全身は赤く染まり全身に汗を滴らせ、激しい運動で呼吸困難となっているのか眉間に皺を寄せ時には白目を剥きながら、口をパクパクとさせて激しい息を吐いていた。

「ほら見て！もう直ぐフィニッシュよ！薬の効果でイク時も凄いわよ・・・」

隣で佇む剛沢を横目で見ながら声を掛けた。

断末摩の獣の悲鳴の様なけたたましい叫び声を発して、お竜に組み敷かれた暁美が体を硬直させた。

「おおっ！汐を吹いてイキやがったぜ！」

隣で見ていた剛沢が驚いて声を上げた。

お竜の突き立てた儘の秘奥からは灼熱の愛液がシャワーの様に飛び出してマットの上に降りかかり直線状の染みとなってマットを濡らした。

娘と妾の凄まじい交歓図に母親の晴江が信じられないと言う様に身動きもせず、目を見開いて見詰めていた。

「どう？とっても良い気分になったでしょう？」

手足の拘束を解かれマットの上にボンヤリと蹲る暁美の肩に手を置いて銀子が話掛けた。まだ凄まじかった絶頂感が残っているのか暁美がボンヤリとした瞳で返事もせずに聞いていた。

「今度は貴女の苦しみを解決してくれたお竜にお礼をしなければならぬわね・・・攻守を交代して今度は貴女がお竜を責める番よ。」

と、無表情な暁美に語りかけた。

暁美にお竜を責めさせると言う銀子の言葉に、まだ早い息を吐くお竜の表情が変わった。そんなお竜の狼狽した姿を無視して、男達に命じて今度はマットの上にはいやがるお竜の手足を押さえ付け力尽くで大の字に固定させた。

「今度はお竜姐さんの此処に秘薬をタップリと塗って上げるわね。辛くなってきたら暁美お嬢様をお願いして突いて貰うのよ・・・」

と、女体に対して恐ろしい効力を発揮する秘薬をお竜の目に見せ付けた。

「アアッ！イヤ！止めて！」

それを塗り込められたらどのような結果になるか恐ろしい程思い知らされたお竜は、固定された手脚を藻掻かせながら抵抗した。

「何も心配しなくても良いのよ・・・貴女は唯素敵な気分浸ってれば良いのよ・・・」

銀子の指先によりその怪しげなペースト状の薬が何度も秘孔の奥に塗り込められていった。ズキン！と秘裂の奥から衝き上げる物を感じた。

それに続いて焼ける様な焦燥感が込み上げて来た。

激烈な苦痛を伴った性感にも似た怪しげな感触が次々と膣壁から込み上げ、そのまま中枢神経を通りガンガンと脳髄を刺激した。

ああー、お嬢はこんな苦しみを味わっていたんだ・・・と、激痛に身悶えながらお竜は思った。

「ほらお竜姐さんが苦しんでいるのが判るでしょう？お竜姐さんの苦痛を取り除く事が出来るのは貴女だけよ・・・」

銀子が虚ろな目を浮かべる暁美に声を掛けた。

銀子の声と悲痛なお竜の呻き声で現実に帰った様であった。目の前には僅か前まで自分が固定されていた様にお竜がマットの上に大の字に固定され全身から脂汗を浮かべて身悶え

ていた。

「さあ、これを付けてお竜を助けて上げるのよ・・・」

青ざめて目見詰める暁美の前に双頭の張形を見せ付けた。

「いけません！お嬢様！お竜はこれしきの苦しみ耐えて見せます！」

いくら激痛に見舞われようと父親を奪い取って、自分に恨みを持つ親分の娘に窮状を救って貰う申し訳なさに耐えられず、苦悶の表情を浮かべ額に脂汗を浮かべながら必死に叫んだ。

「良いのよ、お竜・・・私が貴女の苦痛を解いてあげるわ・・・」

麻縄で後手に縛られた暁美がマットの上で仰向けに大の字に横たわるお竜の体の上に自らの体を預けて行った。

激痛に身悶える股間に自分の股間を重ね、形の良いお竜の乳房に自分の柔らかな乳房を押し当て、愛しい人に頬ずりする様に狼狽するお竜の頬に自分を頬をさすり付けた。

「アアッ！いけません！お嬢様！お竜は大丈夫です！」

若い女の柔肌を自分の体の上感じて、お竜がオロオロと身悶えた。

「良いのよ、お竜、私に任せておいて・・・」

と、狼狽するお竜の目を見詰めたまま艶然と微笑むと、そのままお竜の唇の上に自分の唇を重ねて行った。

「アアーッ！嘗めて！もっと激しく暁美のオコを嘗めて！」

自分がお竜からされた様に仰向けになったお竜の顔の上にM字に開脚した股間を押し付け熱に浮かされた様にヒステリックな声を上げた。

まだ銀子から塗り込められた秘薬の効果が残っているのか、周囲の男達の間目も気にならない様にプライド高い若い娘が決して口にする事の無い様な下品な言葉を口にしたので周囲を取り囲む男達から思わずゲラゲラと笑い声が上がった。

しかし、暁美にはそんな周囲の男達の嘲笑も最早耳に入らないのか、秘裂をお竜の口に押し当て、その内部をお竜に愛撫させ続けていた。

まだ醒めやらない媚薬の効果でお竜の舌先がまさぐる秘孔の奥からはドロドロとした愛液が滴り落ちていた。

それから暫くして二人は双頭の張形を通して一つに繋がっていた。

暁美が腰を一衝きする毎に秘薬を塗り込められその部分の神経が鋭敏になったお竜が大きく腰を震わせ反応した。

「どう？お竜、良い気持ち？」

自分の腰の動きに身体を震わせて反応するお竜を嬉しそうに見詰めながら言葉を掛けた。

「ああーっ！良い気持ちです！お竜はお嬢様からこんなに愛して頂いて幸せです！」

お竜も全身に汗を浮かべ目から随喜の涙を滴らせながら声を張り上げた。

「嬉しいわ！お竜がこんなに喜んでくれてとても幸せよ！お竜！愛しているわ！」

と、譫言の様に叫ぶと、お竜の唇に自分の唇を重ねた。

其処には、最早父を奪った憎い愛人への恨みも消え去り、愛し合った女同士の熱を帯びた交接が続き、互いの愛に没頭する二人には周囲の男達の嘲笑もまったく聞こえないかのようであった。

暁美とお竜の交接に続き、今は晴江とお竜が一つに繋がっていた。

「お竜、天にも昇る様な気持ちじゃない？晴江はもう夢の中にいる様な気分よ・・・」

仰向けのお竜の上に覆い被さった晴江が後ろでの不自由な姿勢で腰を振りながら互いの秘所を打ち付け会い、乳房を重ね屹立した乳首を擦り付けながら尋ねた。

「姐さん・・・姐さんは親分を奪った私の事を随分と恨んでいたのでしょうか？」

「一時は恨んだ事もあったわ・・・でも、そんなことどうでも良いの・・・あの男達の言うように今は愛し合いましょう・・・ああ・・・良い気持ちだわ・・・」

周囲を取り囲む男達も熟した女同士の濃厚なセックスに声も上げることも出来ず目を見開いて見続けていた。

「ああ・・・姐さん、お竜も夢の中を彷徨っているような良い気持ちです・・・」

「嫌！姐さんと呼ばないで！晴江と呼んで！」

お竜の頬に自分の頬を押し付けて、愛しげに頬擦りしながら耳元で囁いた。

その鉄火姐御の晴江の女らしく甘えた声に周囲の男達から驚きの声上がり、哄笑が沸き起こった。

女らしい鼻に掛かった甘えた声を発して、お竜の身体の上で身をくねらせる晴江の赤らんだ全身から女の色気がどっと吹き出した様に感じられた。

「ああ・・・お竜は、晴江と一つになれて幸せです・・・」

「お竜・・・私も幸せよ・・・」

何度も晴江から上気した顔に頬擦りされて、お竜も鼻に掛かった声を上げた。

「ああ・・・お竜はもうイキそうです・・・」

「駄目よ！イク時は一緒よ！」

お竜が限界に近い事を悟った晴江が腰の動きを速めた。

「ああ・・・お竜・・・」

「アッアッ・・・晴江、・・・お竜は、お竜はもう！」

双頭の張形で一つに繋がったまま晴江とお竜が身体をくねらせた。

「お見事！お見事！二人して同時にイッたじゃないか！」

剛沢が手を叩いて歓声を上げた。

「銀子、お前の企んだ目高組の女同士をレスボスの愛情で結ばせるという計画は旨く行きそうじゃないか。」

「こんなモノちよろいモノよ！・・・セックスの興奮によるドキドキした心臓の鼓動と恋愛のときめきのドキドキ感が同じだから、女は身体を重ねれば相手に恋愛感情を持つモノよ・・・後何回か身体を重ね合わせれば、薬に頼らなくても女同士の愛情を完成させられるわよ・・・」

こうして、銀子の企み通り、愛人と娘、愛人と本妻、母と娘による禁断の女同士の交歓が次々と結ばれて行った。

長時間に及ぶレスボスの性行為が終わって牢に連れ戻された時、三人の女達は完全に没我の状態にあった。

そんな女達の状態に目もくれず、銀子が袋から就寝中の肉体改造に使うための新たな責め具を取り出した。

「今までの道具は卒業して、今晚からこれを付けて貰うわよ・・・」

銀子が、手にした物は分厚い黒い革ベルトを金属鉸で縫い合わせて作ったT字帯であり、裏面の股間に当たる部分には二つの巨大な突起物を取り付けられていた。

「これは、大姐用・・・これは、お嬢用・・・これはお竜さん用。」

銀子は女の股を潜って通ることになる縦ベルトの全面に大きな銀文字で印字された名前を確認しながら取り出した。

「三人の腰回りや膣の位置や膣と肛門の間隔なんかを精密に計って特別に誂えた物だからピッタリ入る筈よ！」

禍々しい形状の陰具が固定された貞操帯を楽しそうに仕分けて男達に手渡した。
周囲で見守る男達もその二つの陰具の凶暴な形状と大きさに声を上げる事も出来ず目を瞠
った。
未だに放心状態にある女達は、虚ろな表情を変えることも無く、銀子の手にする残忍な張
形が取り付けられた貞操帯をボンヤリと見続けていた。

朝のお務め

明るい春の陽光に照らされながら何処までも続く菜の花畑の中を暁美は青沼と手を繋いで
歩いていた。
周囲には二人の他に誰も居ず、綺麗に咲き誇った無数の黄色い花の中に包まれていた。
春の日差しの様に暖かい青沼の愛に包まれ、この上ない幸福感に満たされている暁美であ
った。
ふと青沼が歩みを止めると、優しい笑みを浮かべて暁美の方を振り返った。
そして暁美の身体を抱き寄せると、優しく唇にキスをしてきた。
青沼の唇に自分の唇を重ね、互いの舌を絡め合うと、得も言われぬ至福感に全身が包み込
まれて行くのであった。
その時、明るかった空が突然暗い雲に閉ざされ、父埃を巻き上げて冷たい突風が吹き荒れ
始めた。
土埃が顔面に幾つも当たって目も開けられず、地面に突っ伏した。
そして、漸く突風が治まったとおもったら、次に、地面が激しく揺れ始めて、音を立てて
彼方此方の地面が盛り上がりあるいは沈み込み、暁美を取り残すように、恐怖で蹲る地面
の周辺が大きくひび割れた。
そして、幾つにも割れた地面の下からゾンビのような不気味な地獄の鬼達が這い出して来
て暁美を取り囲んだのだった！
皮膚は爛れ筋肉は腐乱した醜悪な姿をした無数の鬼達は一斉に暁美に襲い掛かり、無理や
りその衣類を奪おうとした。
悲鳴を上げて、青沼に助けを求めたが何故か青沼の姿が其処には無かった。
今や暁美は鬼達によって次々と衣類を奪り取られ、両手両足を掴まれ身動きを封じられた

まま、鬼達の前に一切の着衣を奪われ、露わとなった股間を大きくはだけていた。

ゾンビの様に全身が腐敗して崩れた一人の大きな地獄の幽鬼が股間から醜怪なモノをブラブラさせながら、閉じることを封じられた暁美の股間に向かって歩いて来た。

その奇怪な怪物の股間のモノは、股の付け根の所で木の又のように二本に分かれ上下に並んで生え出していた。

恐怖の目で見守る暁美の前で、そのモノは見る見る大きさを増し、醜い全貌を露わにした。

それは、今まで見たことも無い程大きく、ゴツゴツとした肉塊には、節くれ立った老木の様にあちこちに醜い大小のイボが付いていた。

「アアーッ！嫌！これは健二さんだけのものなのよ！誰も奪わないで！」と、身動き出来ない体を必死に振り立て、泣きながら哀願する暁美であったが、鬼はそんな事を気にする様子も無く、猛り立った二本の異物を暁美の股間の中心と尻肉の間に押し付けると、ズブズブと体を埋めて行った。

そのかつて経験した事の無い、巨大なモノが肉体を割る激痛に暁美が大声で悲鳴を上げた。ビッショリと冷や汗に包まれて、暁美がベッドから飛び跳ねた。

夢を見ていたのだと分かった。しかし自分の股間から込み上げる熱を帯びた疼痛を伴った異物感は現実の物であった。

就寝する前に銀子達から埋め込まれた巨大で醜怪な張形から発する圧力が股間からズキズキ疼くように責め上がっていたのだった。

暁美の悲鳴で、向かいの独房に閉じ込められていた晴江や、お竜も目を覚ました様子で、ベッドから身を起こし、心配そうにこちらを気遣ってきた。

陽光の差し込まない地下室では、時間が分からない。

銀子の呵責無い肉体改造の為の調教を受け、意識が朦朧としたままこのベッドの置かれた檻の中に連れ戻されたのは、恐らく昨日の深夜の事だったろうと、薄い微睡眠の中で女達は感じていた。

休む事も許されない激烈な肉体訓練で綿の様に疲れ果てた体に、これまで経験したのとは格段に大きさの違う性具を秘奥の前後にねじ込まれ、あまりの激痛に意識を失ってしまった事を思い出した。

そして、意識が朦朧とする中で銀子達から押し込められた凶悪な異物が、絶え間ない調教で逆に神経だけが異常に昂進した二つの肉洞を内部から責め苛み、体はへとへとに疲労していると言うのに一晩中嫌らしい刺激を送り続けていたのだった。

その時、遠くから男達の笑いさざめく声や、銀子の独特の甲高い声が聞こえて来た。
今日も冷酷で容赦の無い肉体改造が、始められる事が分かって、女達は暗い気持ちに沈むのであった。

鍵を開けて檻の中に銀子を先頭に男達がドヤドヤと入って来た。

女達を閉じ込めた独房の扉を開けて、男達がめいめいの女の房に侵入して来た。

「さあ、オシメを外してやるぜ」

男達は女達の股間を責め上げる性具を固定するための貞操帯をオシメと呼んでいた。
敏感な秘部を内側からを責め上げられる性感に一晩中苛まれて、毎朝肉体訓練を開始するため外される頃には貞操帯は、夜通し垂れ流した愛液でビショビショに濡れており、その様子が小水に濡れた赤ん坊のオシメの様だと誰かが言い始めてから、オシメと呼ぶ様になっていたのであった。

何人かの男達でベッドの周囲を取り囲み、寝ている女の布団を乱暴にはね除けると、ウムを言わせず、女の両足首を掴んで、まるで赤ん坊がオシメを取り替えるような姿勢を取らせた。

「何だコリヤ？今日も股の間がビショビショじゃないか？」

貞操帯を弛めた瞬間、貞操帯を挟んだ股間からはムッと蒸れた様な女の香りが湯気のように立ち昇り、陰孔を精一杯押し広げて野太い性具を咥え込んだ牝芯の周りが夥しく濡れているのに気付いた男が驚いたような声を上げた。

「布団までグッショリ濡らしやがってよ！これじゃまるでおネショしたみたいじゃないか！良い歳しやがってよ！」

「お前達が、お漏らした布団を干す俺達の身にもなって見ろよ！」

淫靡な貞操帯だけを着けて裸で寝ていた女たちの股間の下に当たる部分の布団が湿気を帯びシミが出来ていることを発見して笑い声を上げた。

「全くこんなモンに感じやがってよ！ついこの前まで、男なんか興味有りませんーなんて乙に澄ました顔してやがったくせに、お前達もちよっとの間にスケベな女に成り下がったもんだな！」

かつて顎で使っていた、三下に愚弄される屈辱と悔しさに女達が唇を噛んだ。

しかし、男達の指摘を受けたように、度重なる調教で感度だけが非常に敏感に改造された二つの秘所が、挿入された性具に感じてしまっているのは、間違いない事実であり、それ

を指摘されたことに、堪えようの無い恥辱を感じるのであった。

「へへ・・・硬く食い絞めやがって、なかなか抜けないぜ！」

貞操帯を固定するベルトを弛めても、女体内部に深く押し込められた張形は、容易に抜け出すことは無く、しっかりと秘肉の奥に食い込んだままとなっていた。

「口では何だかんだ言っても体は、正直だぜ！『イヤン！抜かないで！』て、必死に抵抗してやがるぜ！」と、女の股間の様子を指摘して顔を見合わせながら大声で笑い合った。

「ただ、これを入れたままじゃ後の調教が出来ないからな・・・夜になったら、又もっと太いのを入れてやるから、可哀想だが今の所は、一旦お預けだぜ！」

女達の股間に埋められた巨大な張形の一端は貞操帯に固定されていた。

男達はバリバリと筍の皮を剥がすように、力尽くで張形を固定した貞操帯を股間から剥ぎ取って行った。

「ああー！・・・今日のは、大き過ぎて痛いよ・・・もっとゆっくり抜いて・・・」

女達が苦痛に首を振りながら、男達にか弱く哀願した。

「フン！何が大き過ぎて痛いよ？甘ったれんじゃ無いわよ！」

女達の涙声を耳にした銀子が暁美の檻の中に入って来て、半分引き出された張形の根元を驚掴みにするとグリグリと揺さぶったり思い切り中に押し込んだりした。

突然の銀子の乱暴な行為に身を振り、悲鳴を上げる暁美の姿にも憐憫を抱くことなく、こんな物で痛がってちゃ話にならないわよ！と、張形の根元を握り締めたまま、こんな物！こんな物！と、乱暴に出し入れするのであった。

暁美の激しい悲鳴を耳にして、男達にとってそんな女達の悲鳴や哀願は、逆に心地良く響くだけであり、女達の苦痛に歪む表情も気にせず力尽くで、バリバリと抜き取りに掛かった。

しかし、そんな男達も女達の胎内から引き出されて来た、異様な形状の巨大なモノに目を瞠った。

女達の秘部の肉襞を表に引きずり出しながら引き出されて来たそれは、まるで古木の松の幹の様に節くれ立ち、あちこちに大小の瘤を持つ直径6センチ以上ありそうな巨大なモノであった。

「ウヒョウー！お前達こんな途轍もないモノを一晩中腹ん中に入れていたのか？」

女達の胎内から引きずり出された、太い醜怪な張形を確かめるように握り締めて、男達が叫んだ。

男達の驚く様子を見ながら銀子が意地悪く微笑んだ。

男達の握り締めるそれは、まだ女達の熱く興奮した胎内の体温を残しており、粘っこい濃厚な愛液にべっとり塗されていた。

巨大な張形を失った後には、その形を留めるようにポッカリ大きな空ろが開き、充血した内部を覗かせていた。

そして、巨大な栓を取り外されたその内部から、張形により肉の洞窟内に封印されていた濃厚な愛液がドロリと外に溢れ出て来た。

「へへ・・・生臭い牝の臭いが立ち昇って来るじゃないか。お前達は何時も股座にこんなゲテモノを突っ込んで無いと満足出来ないのだろう？」

男達の卑猥な揶揄に女達が目に涙を滲ませながら力無く首を左右に振った。

女達は、か細く否定の仕草を続けるが、度重なる銀子から受ける調教により、着実に女達は常に股間に何かを入れていないと満足出来ないような、セックス依存症の体に改造されつつあることは確かのように思われた。

前に突き立てられていた、巨大な張形は完全に抜き取られていたが、同じ貞操帯に一端を固定された、後門を突き立てる張形は、まだ半分以上、体内に残されたままであった。

男達は両足首を更に上に向かって引き上げ、まるで赤ん坊のウンチを掃除する時のような姿勢を取らせた。

いやらしい男達に一層の恥辱の姿勢を取らされて、女達は全身を赤く染めて、逆らう気力も起こらないのかシクシクと啜り泣いていた。

男達は精一杯両脚を持ち上げ、女の尻をベッドから浮かして、その隙に後の穴を深く抉っていた張形を抜き取った。

野太い節くれ立った張形が抜き出される際に、腸の内部を引きずり出されるような苦痛に女達が泣き叫んだ。

前と後の張形を抜き去られた跡には、二つの大きな孔がポッカリと口を開いたままになっていた。

「おいおい！前も後も開きっぱなしじゃないか！」

男達が呆れたような声を上げて、外部に向かって開き切った孔を指差して笑い合った。

「前の穴からは女臭い臭いをプンプンさせて、後の穴からはウンコの臭いをプンプンさせているじゃないか！臭いから早く閉じてしまえ！」

両足首を掴まえ扇のように股間を押し広げ、高々と持ち上げながら、大きく開いた女の股

間に鼻を近付け、二つの孔から立ち上る臭いを嗅ぐ仕草をしながらからかった。

男達の指摘するように、前の穴からは甘酸っぱい牝の臭いが立ち昇り、後の穴からは腸内異物の臭いが立ち昇っていた。

「お嬢のオ●●●は流石に若いだけあって爽やかな良い香りがするが、大姐のここは歳を喰って煮詰まった様に強い臭いがするぜ！」

晴江の二つの孔に鼻を近付けてクンクンと鼻を鳴らしながら大声で笑いながらからかった。

「良く煮詰めた煮凝りみたいな物か？」

その様子を見詰める男達から笑い声が上がった。

男達に間近から恥ずかしい臭いを嗅がれる羞恥に、涙を浮かべてイヤイヤと顔を振り立てた。

「おい！山下！こんなに大きな孔になってしまっっては、お前の爪楊枝じゃガバガバで相手にならないな？」

男達が山下と言う男の股の間をジロジロ見詰めて大声で笑いながらからかった。

女達の調教への参加を通して、男達は互いの持ち物の大きさを認識するようになっており、山下が他者より小さい男性自身であることを皆知っているのだから、からかったのだ。

自分の持ち物を馬鹿にされて、顔を赤くして怒りを見せたが、事実だけに抗議することも出来ず、唇を噛む山下であった。

「あら！大丈夫よ！私がこの女達の筋肉を充分柔軟に鍛えているから、山下さんの爪楊枝でも充分満足出来るわよ。」

「何だ！銀子！お前まで！」

銀子にまで馬鹿にされたことに、山下が悔しそうに声を上げたので、その様子に周囲からまた笑い声が上がった。

「さあ、準備が整ったら調教室に出発よ！」

銀子が女達を調教室に連れ込むように促した。

巨大な張形を長時間股間に埋め込まれていた影響で腰に力が入らず、まともに立って歩く事も出来ない女達は、両側から男達に支えられるようにして、調教室まで歩まされた。

昨夜の厳しい調教で途中で意識を失う程激しく責められたあげく、ベッドに就いた後も、巨大な張形で一晩中責め上げられ、調教の疲労は抜けること無く、腰は鉛を背負ったように重く、股間はまだ痺れたように疼いていた。

さつきまで股間を責め上げていた巨大な張形が抜き取られた後も、股間の二つの孔はズキズキと疼き、歩行もままならない様子であった。

まるで体に力が入らないかの様に、フラフラと体をよるめかせながら調教室に向かって歩む女達を両側から支えながら、

「今日も、これからお前達は夜遅くまで、みっちり肉のトレーニングを受けなきゃならないってのに、こんなフラフラで保つのか？」

と、冷ややかな笑みを浮かべて問いかけるのであった。

目覚めたばかりだと言うのに既に肉体の限界を超える疲労感を見せる女達に更に長時間の過酷な肉体トレーニングを施した時、この女達はどのような反応を示すのかと想像すると、陰情に昂ぶる男達には、同情する気持ちは湧いて来ず、逆に妖しげな嗜虐の快感が沸き上がって来て、股間が硬くなっていくのであった。

「さて、本日の調教に入る前に出すモノを出しておいて貰いましょうか？」

銀子が調教室の真ん中に一糸も纏わず気を付けの姿勢で一列に直立させられている女達を見詰めながら言った。

何時もの肉体訓練に入る前に、排尿をさせようと言い出した銀子に、女達は驚いた様な表情を浮かべた。

「どうしたの？ 貴方たち、昨夜の調教で失神したまま部屋に戻されたから、寝る前にオシッコを済ましていないでしょう？あれからかなり時間が経っているから、オシッコが随分とたまっているんじゃない？」と、両手を身体の横にピッタリと付け恥ずかしい部分を丸出しにしたままの姿勢で立つ女達の表情を覗いながら尋ねた。

銀子の指摘する通り、昨日は調教の途中で一度だけ排尿を強制されて後は、短い休みを挟んで長時間に及ぶ夜間の調教に入ってから排尿をしておらず、銀子の言うように、調教の終わり頃には完全に意識朦朧状態となっており、意識不明の状態のまま檻に連れ戻されていたので、就寝前の排泄もしておらず、女達の膀胱はパンパンに張っていた。

しかし、それを口にすれば、また新たに銀子に辱めの材料にされそうで、口に出来ず尿意をグッと堪えていたのであった。

「調教の途中でシャーとやられたら困るから、先に済ましてしまいなさい！」と、言うとも達の方を向いてビールの大ジョッキ3つ持って来るように命じた。

銀子に女達の下世話をも命じられた男達が、下劣な目で、尿意の限界を超えて腰をモジつ

かせる受け持ちの女の下腹をジロジロと眺めながら喜々として、大きなガラス製のジョッキを手に、女達に迫って来た。

男達の手にした大きなビールのグラスをチラッと見て、銀子の冷酷な意図を察した女達が、顔を赤く染めて首を振った。

女達の肉体改造を逐一記録するために、調教室に備え付けられたカメラが回り出し、撮影用照明が直立する女達を照らし上げた。

今日も自分達が銀子繰り出す肉体の試練の前に敗北し、惨めな姿を晒すところを記録されて行くのかと思うと暗い気持ちになった。

「今日は、貴方たちに立ったままオシッコをやらせて上げるわ・・・貴方たち立ちションするなんて初めてでしょう？」

まあ！立ったままでビールのグラスにオシッコするんですって！と、見物に来た剛沢の愛人達が互いに囁き合い蔑んだような笑い声を上げた。

「銀子さん・・・」

嬉しそうに笑いながら、女達に立ったまま放尿させようとする銀子に向かって、涙を目に溜めながら晴江が何か言おうとしたが、言葉にならなかった。

銀子に命じられた男達が大きなビールのグラスを、女達の綴じ合わせた太股に押し当て、股間を押し開けようとするかのようにグイグイと押し付けた。

その男達に力に体をよろめかせ、小さく悲鳴を上げた。

そして、男の力に屈したように両脚を肩幅に開き、ジョッキの縁を太股に挟み込むような姿勢を取った。

「貴方たち、そんな風にオシッコを閉ざしては、綺麗な放物線を描いてオシッコが飛ばないでしょう？自分の指でオシッコを開くのよ！」と、手にした短い乗馬用鞭で女の尻をポンポンと叩きながら、自分の指を使って自ら性器を開くように強制するのだった。

女達は唇を噛みしめながら、両手を秘丘の上に宛がうと両手の親指と人差し指で剃毛されてから、ようやく生え揃い始めた秘毛を上を搔き上げ、その艶やかな繁みによって覆われていた一筋の奥深い割れ目を、いやらしい目で注視する男達に向かってクッキリと露わにした。

そして、中指と薬指を柔らかな陰唇の両側に指を添えると、怖ず怖ずと左右に開き始めた。

「へへ・・・天の岩戸のご開帳だぜ！」

目の前でジョッキを手にする男達が嬉しそうに声を上げた。

「女の体ってのは、全く不思議だぜ。さっきまであんな二つの大穴を開けていたのに今は、お淑やかに閉ざしてやがるぜ・・・」

徐々に目の前で開き始めた桜色をした秘所を下から見上げて、卑猥な言葉を発するのであった。

「へへ・・・女のここはこんな風になっていたのか？ここから小便を垂れるのかい？」

女達が気も狂いそうになるほどの羞恥の中で、焼ける様な熱い視線を投げ付ける男達に向かって死ぬ思いで押し広げた陰門の上部に僅かに姿を見せる笑窪のような窪みを指の腹で捏ね回しながら聞いた。

その敏感な部分を無骨な指で撫で回される羞恥に女達が悲鳴を上げて身を揉んだ。

「どうでい？恥ずかしいか？それとも悔しいか？以前は俺たちに偉そうに威張りまくってたのに、今は、大事な所をもろに見られてよー！」

ジョッキを手にした晴江の股間に陣取る男が、開き切った花卉に鼻を押し付けんばかりに、秘所を覗き込みながら口を訊いた。

「ああー、悔しいわ！あんなに目を掛けてやったお前達に裏切られて、こんな醜態を見られるなんて・・・恨むわ、呪ってやるわ！」

かつては暴力社会の組織の力を背景にして男達を力と恐怖で支配していた女達が、逆に男達の圧倒的な暴力の前に屈して、自らの手で、羞恥の部分を男達の前に開陳しなければならない立場に追い落とされ、女親分としてのかつての颯爽とした面影を失い、羞恥に身悶え、涙を浮かべながら呪いの言葉を吐く様を、引かれ者の小唄を聴くように気持ち良く耳にする男達であった。

「コキやがれ！股の間をこんなに濡らしやがって！お前達、本当は前からこんな事が好きだったんじゃないか？もっと早く・・・組に居た時からやってやれば良かったぜ！」

女達の股間の柔らかな肉壁が赤く充血を始め、その奥に垣間見える秘園が、男の熱い視線に炙られたようにヒクヒクと痙攣し、やがて水を含ませた綿の様に潤い始める様子を目敏く発見して、嬉しそうに反撃するのであった。

「おい！児島！お前女の身体について余り良く知らないだろう？」

「何を何時まで目高組の大姐御で御座いと、姐御風吹かせてやがるんでー！お前達は大亜門戸会の売春婦に落魄れて、毎日大勢の男達の前で醜態を晒す身じゃ無いか。元手下の男の前で小便するなんてどうってこと無いだろう？ 自分の手で恥ずかしい所をおっぴろげておいて笑わせるんじゃないぜ！」と、悪態を吐いてグイグイと乱暴にお竜の下腹を押すのであった。

既に尿意の限界に達している下腹を強く押されて悲鳴を上げて腰をくねらせるお竜であった。

「へへ・・・お嬢のここをこんな近くで見せて貰ったのは初めてだが、綺麗なピンク色をしているじゃないか・・・」

ビール用のグラスを股の間に押し付けながら、目の前に開いた暁美の秘所に顔を触れんばかりに近づけて興奮した声を上げた。

「へえー、ここの穴に青沼の兄貴は毎晩のように突っ込んでいたのかい？それにしても、全然使い込まれた様子が無く、処女のように綺麗じゃないか？・・・しかし、いくら青沼の兄貴でもお嬢が小便をする所なんて見たことは無いだろうから、目の前でお嬢の小便を見られるなんて、ほんとに大亜門戸会に鞍替えして良かったぜ！」

と、言葉で乗り続けるのであった。

男の興奮して熱気を帯びた息づかいが、自らの指により開け放たれた繊細な粘膜に触れるように感じて、不思議な感覚に襲われ堪えようとしても股間が熱く充血して来るのであった。

「へへ・・・お嬢の可愛い木の芽が顔をもたげ始めたぜ・・・」

男達の言葉通りに、女核がジワジワと反応始めたことを目敏く見付けた男が、首先で膨らみ始めたそれをピンと弾いた。

その羞恥を伴った衝撃に思わず腰を落としそうになる暁美であった。

晴江の一切の布切れも身に着けず隠す物の無い股間を眼前にした男が憑かれた様に股間に顔を押し付けた。

あっ、と狼狽して身をくねらす晴江の腰をグッと両手で抱き抱え強く顔を股間に押し当て濃厚な熟女の性器の発する香りを鼻腔に流し込んだ。その淫靡な香りに蒸されたように唇で繊細な襞を撫で、舌先を伸ばして女の突起を愛撫した。

舌先を尖らせて木の芽の先端やその根元を柔らかく覆う包皮を嘗め回したり、口に含んで口内で転がした。

夢中になって晴江に肉塊を味わいながら、「まるで男のモノをフェラしているみたいだな」と独り言を口にした。

「へへ・・・すっかりと膨らんだ姐さんのオサネは相変わらず大ぶりだぜ！」

晴江の前に陣取った男が晴江のすっかり充血した唾液に塗れた陰核を親指と人差し指の間に摘んでゴリゴリと扱き上げた。

「アアッ！お止めになって！」

自らの両手で陰裂を大きく左右に押し開いたまま、男達の淫猥な悪さに抗する事も出来ず、陰核を弄ばれ堪えられない様に腰をナヨナヨと振るのであった。

お竜の目の前に対峙した男も、お竜の股間をくつろげ媚肉を押し広げ柔らかな璧を捲り上げ思う存分陰門を騷り上げ、お竜に悔しい女肉の変貌を強制させるのであった。

男達に恥ずかしい体の変化を見付けられて、自分の意志を裏切るかのように反応を示す自らの肉体の挙動に驚く女達であったが、銀子の調教を受ける内に、惨めな気持ちになれば成る程、ある種不可思議な陶酔感のようなものが沸き上がって来て、下腹を熱く刺激するような体の変化が最近になって発生し始めていることを改めて自覚させられ狼狽する女達であった。

「さあ、時間も無い事だし、何時までも遊んで無いで始めるのよ！」

銀子が手にした鞭で女達の尻を叩いて、排尿を促した。

目の前に見せ付けられた女陰に憑かれた様に悪さをしていた男達もバツの悪そうな表情を浮かべて離れた。

晴江の前に陣取った男が、わざとらしくジョッキを晴江の股間から手前に30センチ以上離して手に持った。

「ああ・・・意地悪・・・」

周囲に陣取った男達から下腹を撫でられたり押されたりして刺激され、既に尿意の限界にきている晴江が、グラスを手にする男に拗ねるように呟いた。

「へへ・・・大姐の貫禄ならシャーツと真っ直ぐ前に飛ばして、これぐらいの距離入るかと思ったぜ！」

「ああ・・・無理です！」

込み上げる尿意に切羽詰まった様子の晴江は、顔を真っ赤にさせて下腹をモジモジさせた。

「それじゃ、これ位で良いかい？」

「ああー！もっと近くに！」

「それじゃ、これで良いかい？」

男が晴江の太股にジョッキを触れさせるのをじれったそうに、身悶えしながら

「ああ・・・もっと奥に強く押し当てて下さい・・・」と、自ら股を拵たげながらグラスの位置を指示するのであった。

男達が間近に見詰める前で、湿り気を帯びた秘部が微かに震え、膣口ちゅうくちの僅か上に在る笑窪えくぼのような窪みが、当に綻びようとする蕾のように外に向かって膨らむ様子が、グラスを押し付ける男達の目に留まった。

「ワァ！とうとう始めやがったぜ！」

眼窩が触れる程、女達の柔肉の割れ目に顔を近付けていた男達が、突如始まった決壊の様子に慌てて顔を背けた。

一度は剃毛され露わにされた秘裂であったが、今は少しずつ萌え始めた春草の飾る女の最深部から吐出される一条の水流が男の持ち添えるガラス容器に向かって放物線を描き始めた。

女達の体内から吹き出したレモン色の液体はその強さを増し、ジョッキの底を激しく叩く音が響いた。

周囲を取り囲んで見物する、男女から歓声と笑い声が上がった。

野卑な男女の嘲笑を浴びながら排尿する屈辱感に顔を真っ赤にして首を振り立てながら男の持ち添えるグラスに小水を流し込む女達であった。

「昨日からオシッコしてないから随分溜まっていたじゃないか！」

ジョッキの中には、湯気が立つような暖かな黄色い液体が、渦を巻いて流れ込み、大量の泡を立てた。

女達は悲鳴の様な呻き声を上げて、男達の持ち添えるグラスの中に後から後から大量の汚水を注ぎ続けた。

次々と注ぎ込まれる多量の暖かな液体に見守る男達は目を瞠もった。

膀胱内に残された最後の一滴まで、グラスの中に流し込んだ後、自意識が込み上げて来て、

苦しく苛み始めたのか、弱く嗚咽を始めた。

そんな元の子分の前で惨めな姿を晒す屈辱感に悔し涙を流し続ける女達を見詰めながら、「そんな泣くこともないだろう？腹に溜まっていた小便を吐き出してむしろすっきりしたんじゃないか？」と、笑い声を上げるのであった。

そんな女達の哀れな姿も気に掛けないように、女達の小水を満杯に満たしたジョッキを手にした男達は、

「見てみろよ！色も泡立ちも本物のビールそっくりだぜ！」と、嬉しそうに声を上げた。そして、女達の眼前にグラスを差し出し、自分が排泄したばかりの液体を見せ付けるのであった。

「ただし、臭いと温度は大分違うけどね・・・」
か弱く顔を背ける女達の柔らかな頬に、まだ暖かな体温を残す液体の満たされたグラスをグイグイと押し付けるのであった。

「全くお前達はいいい気なもんだぜ！立ったままノビノビとオシッコをさせて貰って、その後始末まで、男達にやらせるんだからな。どこかの国のお姫様でもこんな待遇は受けられないぜ。」

銀子に手渡されたティッシュペーパーで、濡れた秘部を丁寧に拭き取りながら、男達が楽しげに声を上げた。

薄いティッシュペーパーを通して、秘所を撫で上げる男達の嫌らしい指使いに体をブルッと震わせて小さく悲鳴を上げた。

ほら、終わったぜ！と、女達の股間を拭き上げたティッシュを丸めて、鼻の傍まで持って来ると、その臭いを嗅ぐような仕草をしたので、自分の恥ずかしい股間の臭いを嗅がれるというショックに女達がか弱く悲鳴を上げて羞恥に身悶えた。

「それじゃ、早速朝の調教に入るわよ！」と、大きな声を発した銀子に向かって哀願するように、暁美が恥ずかしそうに何かを呟いた。

「何々？声が小さくて聞こえないわよ！」

銀子が口元に淫微な微笑みを浮かべて、暁美の口先に耳を近寄せた。

銀子の耳元で暁美が恥ずかしそうに何かを囁く様子が、見物の男女の目に留まった。

暁美の言葉を聞いた銀子がぷっと吹き出し、続けて大きな声で笑い出した。

「何！貴方大きい方もしたいの？」と、笑いながら大声を上げた。

暁美が小水だけでなく大便の排便欲求に苛まれていることが分かって、取り囲む男達も大笑いを始めた。

「ああー、お願いです・・・お腹が苦しいんです・・・」

男達の大笑の中で、頬を羞恥に染めて、消え入りそうな小さな声を上げた・

男達に笑い声を浴びせられながらも、羞恥に顔を赤く染めて、体内から込み上げ始めた強い排便欲求にナヨナヨと腰を震わせていた。

「良いわ！やらせて上げるわ！ 山下さん！洗面器を持って来て！」

可笑しさを堪え切れないというような仕草で銀子が傍に居た山下に声を掛けた。

銀子に指名された山下が一瞬照れたような笑みを浮かべて周囲を見回した。

「貴方は昔からお嬢に気があったんでしょう？なら、お嬢が目の前でウンチしても気にならないわよね？」

銀子に言われて、これから暁美の恥ずかしい姿を目の前で堪能出来るーと、突き刺すような快感が体を貫き、満面に喜色を浮かべて洗面器を手に暁美の傍に歩み寄った。

組に居た時は暁美の美貌に魅入られながらも、所詮は叶わぬ願望とすれ違う時も目を逸らしていたのであったが、今や崇拜していた女神の全裸像が目の前に在った。

今度は前と逆に、暁美の背後に洗面器を手にした男を配置させたので、銀子の意図を察した暁美が、切なそうに、

「ああ・・・このまま立ったまましなければいけないのですか？」と、弱々しく尋ねた。

「そうよ！小便もウンチも立ったままするのよ！立ちション立ちグソもお客様にお見せする立派な芸よ！」と、甲高い声で笑いながら言うのであった。

山下の手にする洗面器が、暁美の柔らかい大腿の肉にめり込むように押し当てられた。

「ほら、もっとお尻を拡げないとウンチが出来ないでしょう！」

再び自分の手で臀肉を押し広げて、秘所を丸出しにするように命じた。

銀子の命令には抗し難く、諦めたように怖ず怖ずと腰を洗面器を持ち添える山下の方に向かって少し突き出し、尻たぶを両の手で押し広げる暁美であった。

「これは良いや！お嬢の桃の花と菊の花が目の前に満開だぜ！」

押し広げられた尻たぶの間に、鼻先を押し付けんばかりに顔を寄せて、山下が嬉しそうに大声を上げた。

山下の目の前で暁美の僅かに莖色の色素を帯びた菊の蕾のような部分が深く刻んだ皺を切なげに痙攣させていた。

「へへ・・・お嬢には、まだ女子校生位の時から懂れていたけど、まさかお嬢のウンコの世話まですることになるとは思わなかったぜ！」

「山下さんには、臭い物を始末して貰うんだから、後でうんとサービスして上げないと駄目よ。」

と、山下に尻を向けて、苦しげに眉根を寄せる暁美の顔を覗き込みながら言った。

「ああ・・・山下様には、この後で心を込めてご奉仕させていただきます・・・」

下腹から込み上げる圧力に苦しそうに、息を吐きながら暁美が応えた。

「ほら！時間が無いんだから、早く済ましてしまいなさい！」

ああ・・・分かりましたーと、小さく一声言うと、最後の息みを下腹の筋肉に与えた。

「へへ、ケツの穴がピクピクしてるじゃないか！おお！それがだんだん表に向かって開いて来やがったぜ！」

洗面器を手に山下が感極まったような声を上げた。

先ほどから、内部の圧力によりピクピクと膨張と収縮を繰り返していた菊花が内部の圧力に負けて見る見ると表に向かって盛り上がり、その中心部を割って、茶褐色の先端が顔を出した。

「ほらほら！穴の奥から茶色いのが顔を出し始めたぜ！」

「アアーッ！恥ずかしい！」

山下にそこの様子を指摘されて、羞恥に顔を真っ赤にして顔を背けた。

「おお！始めやがったぜ！」

周囲を取り囲む男達から歓声が上がった。

「それにしても、何て太さだ！」

数日間暁美の腸内に溜まっていた夥しい量の便が、一機に出口に向かって移動を始め、肛口を大きく押し開き始めていた。

「ほらほら、茶色いのが随分と表に飛び出して来たぜ・・・」

洗面器を手に山下が楽しそうに声を掛けた。

肛門をこれ以上無い程押し開いて、ジワジワと姿を現す、太い硬化した便を指差して男達が笑い声を上げた。

内側から後口をこじ開ける苦痛に暁美が腰を震わせて呻き声を上げた。

「ほらほら、しっかりしろよ！日頃から玩具を突っ込んで肛門拡張しているんだろう。これ位平気だろう？」

脱糞の苦しさに、眉根を寄せて苦悶する暁美の様子を楽しそうに見詰めながら嘸し立てた。表に向かってニュウツと伸びた太い便塊が途中でプツリと切れて、山下の手により股間に押し付けられている洗面器の中にポトリと落ちた。

それに伴って異臭が周囲にプンと拡がった。

「見ろよ！若いだけあって、綺麗な色艶をしているじゃないか！」

「それにしても、この臭いはどうだ！健康的な色をしているだけあって、臭いも強烈だぜ！」

暁美の間近まで近寄って見物しながら、排泄物の臭いの事を非難する男達の声に促されるように、

「アア・・・！山下さん、ご免なさい！」

と、股間に鼻先を寄せるように顔を近寄せて、洗面器を持ち添える山下に涙声で許しを請うのであった。

「良いつて事よ！以前から恋い焦がれていていたお嬢のお腹から放り出された貴重なウンコ様だ！臭いなんかちっとも気にならないさ！」

と、暁美のブルブルと羞恥に震える秘所を間近に見る機会を得て興奮している山下は、血走った目で、吐き出すように次々と便塊を押し出して来る暁美の排泄口を凝視し続けるのであった。

「それよりお尻の肉をもっと広げておかないと、尻が汚れてしまうぜ！」

と、羞恥に身を揉みながら排泄を続ける暁美に、自分自身の手で双臀を更に大きく広げて、肝心の部分をもっとはっきりさらけ出すように指示するのであった。

大きく広げられた双臀の狭間からは、女としては絶対人目に晒すことが出来ない二つの秘部が赤ら様に見えた。

そして、その恥ずかしい菊の蕾を内部から押し広げるように新たな茶褐色の塊がニュウツと飛び出して来た。

おお！又出て来たぜ！と、周囲を取り巻く男達から歓声が上がった。

そして、それに続いて次の便塊が暁美の肛門から送り出され股間にぶら下がった。

後の穴も、男にとっての重要な快楽源であると信じている銀子は、中腰になって顔を寄せ、その太さや肛門の開き具合や排泄のスムーズさを注意しながら、暁美の排便姿を見続けて

いた。

「おやおや、三個目が出て来たぜ・・・それにしても強烈な臭いだな！」

洗面器を支え持ちながら顔を蹙めるように声を上げた。

「花も恥じらう綺麗な顔をしているのに、良くこんな恥知らずなことが出来るもんだぜ！」

男のからかいに、暁美が涙を浮かべた。

「もう良いのかい？」

痙攣を続ける暁美の下腹の様子から未だ排便が続く事が判っていながら、三度目の便塊の放出を見て、意地悪く股間に押し当てていた便器を外そうとした。

「嫌！待って、まだ外さないで・・・」

直腸から込み上げる残便感に責められ、涙を啜りながら哀願した。

「おいおい！こんなに盛り上げておいてまだ出そうってのかよ？お嬢のウンチの重さで手が痺れて来たぜ！そっちはノビノビと大グソ^ひ放り出して良い気持ちかも知れないが、直ぐ傍で臭い物を嗅がされるこっちの身にもなってくれよ！」

と、大げさな声を出して周囲を笑わせた。

山下の指摘するように便器の上には褐色の便塊が湯気を立てて山のように蜷局を巻いていた。

ウッ、と下腹を緊張させると、腹の中に溜まっていた最後の軟状の便がドロドロと押し出され、ボタボタと汚物の山の上に落下した。

「今度こそ良いんだな？」

山下の問い掛けに、咽び泣きながら恥ずかしそうに首を振る暁美であった。

衆人環視の中で排泄を終えた暁美が、嗚咽しながら山下から蒸したタオルで股間を清掃されていた。

「そう言えば、私も次々に新しい性のテクニックを仕込むのに夢中になって、忙しさにかまけて、このところ貴女^{あなた}たちにウンチをさせるのをすっかり忘れてたわ。ご免なさいね。貴女たちもお腹の中にたっぷりウンチが溜まっているんでしょう？」

銀子が嫌らしい目で男達に囲まれて調教の場に連れて行かれようとする晴江とお竜を呼び止めた。

銀子から指摘されたように、この数日新しい性技の習得に追われて、排便する機会が与えられず、夜もまるで肛門に栓をされたように太い張形で塞がれていたため、下腹には便が

重く溜まっていることを意識していた晴江とお竜であった。

ただそれを自分から口にする、銀子や男達の前でまた新たな醜態を晒さなければならなくなると体内から込み上げる排泄感をぐっと押さえていたのであった。

「馬鹿ね！ 暁美お嬢様の様にウンチがしたいならしたいって自分で言わなきゃ！ 便秘が肌の色艶には一番悪いのよ！」

と、女達の下腹を撫でながら言うのだった。

「ああーっ、したくありません！ さっさと調教でも何でも付けて下さい！」

新たな羞恥図の開陳を迫る銀子に、これ以上の醜態を男達の目に晒したくないと晴江もお竜も顔を赤く染めて頭を振った。

「嘘おっしやい！ 沢山溜まっているはずよ！」

銀子は女体調教道具を入れた何時も持ち歩いている手提げ袋から銀灰色に輝る肛門鏡を取り出した。

そして晴江とお竜に脚を肩幅に広げさせ、上体を屈ませ、お尻を突き出す姿勢を取らずと、無表情のまま、ステンレス製の肛門拡張器を晴江の剥き出しのアヌスに突き立てた。

その瞬間、晴江の口から呻き声が上がった。

しかし、昼夜を分かたぬ肛門への調教により、アヒルの嘴のような形をした細いステンレス製の医療器具の先端は、抵抗無く晴江の肛孔内に呑み込まれていった。

「ほほほ・・潤滑ゼリーを塗らなくてもあっさり呑み込むなんて日頃の調教の成果ね・・」

銀子が口にする通り、さほど太くない嘴はスルスルと晴江の尻の狭間の中に消えて行った。

そして、根元まで肛門にねじ込むと、次にそれを広げに掛かった。ぴったりと閉ざされていた排泄孔を内部から押し広げる圧力にアッアッアッと呻き声上がり尻を震わせた。

三方向に広がった嘴の先は晴江の秘孔を大きく開口させていた。

大きくくつろげられたほの暗い肉の洞穴を背後に立った銀子が腰を屈めて観察した。

ペンライトで内部の様子を見詰めながら、「ほーら！ 言った通りウンチが其処まで降りて来ているじゃない！」と、大声を發した。

そして、肛門鏡の間から柄の長い綿棒を突き入ると硬化した便塊の状態を確かめる様こね回した。

「アアー！ イヤ！」

内蔵まで覗き込まれる羞恥と、石化した便を搔き回される痛切な刺激を感じて悲鳴が上がった。

銀子は綿棒の先で掘り出した便の硬さや色や匂いを冷めた目で観察していた。

自分の身体から採取された汚物を同性の目に見られる惨めさと激しい羞恥に涙を浮かべて身を震わせた。

ひとしきり観察の終わった銀子は、淫欲に狂った目で周囲を取り囲む男達にニコリと微笑むと、「貴方達も大姐の腹腸はらわたの中を見てみたい？」と、悪戯っぽく尋ねた。

男達は歓声を上げて我先にと、開け広げられた尻穴を覗き込んだ。

ペンライトで内部を明るく照らしながら、「ワー！本当だ！糞が下まで降りて来ている！」と、口々に笑い声を上げた。

愚劣な男達から腸内まで覗き込まれる羞恥と悔しさに目を固く閉じ歯がみした。

「大姐はウンチが溜まっていたけどお竜姐さんはどうかな？」

晴江から取り外した肛門鏡を手にお竜の方に迫った。

下劣な男女に肛門内を覗き込まれる羞恥と恐怖に、「アアッ！お許し下さい！」と身体を震わせ悲鳴を上げた。

「何言っているのよ、大姐はウンチが一杯溜まってたけど、お竜姐さんも確かめないと・・・」お竜の狼狽も無視して肛門鏡を突き立てた。

「ワァ！お竜姐さんもウンチが一杯！」と、一杯に拡張された肛口を覗き込みながら嬉しそうに大声を上げた。

「この所忙しくてウンチをさせていなかったため、水分を失ってすっかり硬くなってしまったみたいで、お尻に入れた張形にもウンチが付着していなかったし、昨晚入れたのは太くて長すぎて、ウンチをお腹の奥の方まで押し込んでしまったのね。こんなに溜まっているのに気が付かなかったわ、ご免なさいね・・・ほらほら・・・こんな硬いのがいっぱい下まで降りて来ているじゃない！」

肛門鏡を抜き去った菊花の中心に中指を付け根まで埋め、中指を締め付ける括約筋の強さを楽しむように内部を掻き回して指先で熱い直腸内の様子を確認しながら、大腸から送り込まれて、肛門の間際まで降りて来た排泄物の塊を指先に感じながら、嬉しそうに声を上げた。

銀子の指先で直腸内部に溜まった便塊を掻き回される屈辱に顔を真っ赤にして眉根に皺を寄せ唇をじっと噛みしめるしかない晴江であった。

そして、銀子の良く動き回る指先によるマッサージにより、内側から怪しく腸壁が刺激され、このところ眠っていた排泄欲求が呼び覚まされる様子が感じられ始めた。

晴江の下腹が微かにグルッと音を発したのに満足すると、野卑な男達から開け放たれた恥ずかしい穴を代わる代わる覗き込まれ、卑猥な野次を掛けられ笑いものになっているお竜の方を見た。

「ほら、お竜姐さんの方はどうなの？」

蟻の様に白い尻に群がる男達を退かせて、肛門鏡を抜き取ると、晴江の腸内をまさぐった中指をそのままお竜の腸内に突き入れた。

「ああーっ！いや！」

お竜が切なげに眉を蹙めた。

「ほらほら・・・お竜姐さんも硬くなったウンチがたつぷりと溜まっているわよ！」

指先で熱く熱を帯びたお竜の直腸内をまさぐりながら笑って言った。

「こんなに溜まっているようじゃ、今日から仕込む新しい芸の習得にも気が散って身が入らないじゃない？馬鹿ね、さっさと済ましてしまって、気分さっぱりしてしまいなさい・・・」と、指先で排便欲求を目覚めさせるマッサージを続けながら、男達に命じて排泄物を受ける洗面器を用意させた。

俺は大姐の排便を受け持つぜーとか、それじゃ俺はお竜姐さんだーとか、男達は洗面器を手嬉しそうに女達の方に歩み寄った。

「さっき暁美お嬢がやった様に、立ちション立ちグソも男を興奮させる芸の一部よ！そんなに股を閉じていたら、立ちグソは出来ないでしょう？・・・もっと足を開いて、自分の指で尻の肉を大きく広げるのよ！」

立位の女達の股間に男達に洗面器を押し当てさせたまま、銀子が指示を与えた。

「ほら、昔の組員達が親切に貴女たちのウンチの世話までしてくれると言っているんだから、さっさと済ましてしまいなさい！」

と、鞭の先で女達の尻をペンペシと叩きながら命じた。

確かに銀子の指摘するように、ここ数日排便をしておらず、下腹からは大量に溜まった便塊の発する重苦しい状態が続いていた。

それが、先程の銀子の指先による腸内マッサージにより、停止していた腸の活動が再開し始めたのか、奥深く溜まった便塊が出口を求めて下降始めている事を意識していた。

こうなつては、逆らつても無駄だと感じた晴江達は、銀子に言われた通り、尻の肉に自らの指を掛けて大きくその狭間を押し広げて衆人の目の前にその内部を開陳すると、膝を折り、腰を後ろに突き出す様なへっぴり腰の姿勢となつて自ら男達の捧げ持つ洗面器に押し開いた谷間の奥の平地を押し当てた。

アルミ製の洗面器のひんやりとした温度が興奮して熱く火照つた狭間に伝わつたが、気にする余裕も無く断崖から身を投げる思いで下腹に力を込めた。

その時、息んだ拍子に腸内に溜まっていたガスが放出され、晴江の菊の蕾の様な微妙な皺を寄せた部分にまるで鼻を着けるように近寄せていた男の顔に吹き掛けてしまった。

プウッというある種間が抜けた恥ずかしい音と共に強い臭気を帯びた生暖かい気流が直接男の顔面に吹き掛かり、男が悲鳴を上げて後に仰け反り尻餅を着いた。

その滑稽な様子に周囲を取り囲んだ男達から割れる様な笑い声が上がった。

「この野郎！男子の面体に尻を放るとは何てアマだ！」

顔面に放屁され笑い者になつた男が顔を真っ赤にして怒り、立ち上がると晴江の顔を平手打ちにした。

こんな臭い屁を俺の顔にもろに吹き掛けやがって！とか、何という臭いだ！とか怒鳴り続けて、怒りに任せて何度も往復ビンタを浴びせるのであつた。

男から理不尽な暴力を受けても、逆らう気力も無く、ああご免なさい・・・と、無抵抗に詫び続ける晴江であつた。

その様子を見ながら、お竜の尻たぶに洗面器を押し付ける男が、

お竜姐さんは大姐のように屁を放くんじゃないぜーと、良く張つた尻をイヤらしい手で撫でて笑いながら声を掛けた。

重い排泄感に苛まれていた女達は、一旦下腹に力を込めると最早止めることも出来ず自律的な蠕動運動が誘起され、腸内に溜まっていた汚物を外部に押し出そうとしていた。

「へへ・・・ケツの穴が見る見る開いて来たぜ！」

「ほら！中から先っぽの黒いのが見えて来たぜ！」

「ケツの穴が開いて臭い匂いが漂つて来たぜ！」

男達の淫靡な視線を一点に浴びせられ、卑猥な言葉を浴びせられながらも、一旦始まりだした腸の運動は最早止める事は出来ず、顔を真っ赤に染めながら腰を振り立てるのであつた。

「へへ、随分と硬くてゴツゴツしてるじゃないか？」

「ご免なさいね。忙しくて暫くウンチをさせてなかったから、水分を失って石みたいに硬くなってしまったわね」

銀子も混じって尻を少し後ろに突き出し立ったまま排便する惨めな姿を見詰めながら言った。

「へへ、随分硬くて苦しそうじゃないか？」

「普通の女なら排便困難になる所だけど、調教でお尻の穴を充分に広げて肛門の回りの筋肉もゴムの様に柔軟にしてあるから大丈夫よ！」

「ほら！出て来た！出て来た！」

「それにしてもなんて言う太さだ！まるで芋みたいじゃないか！」

硬化した巨大な便塊が女達の肛門を大きく押し広げその全貌を現し、男達の目を奪った。

「全く、お前達も銀子に感謝しなければならないぜ！こんなにケツの穴をオッピロげられる位に尻の穴を鍛えさせて貰ってよ！柔な女なら裂痔きれじになる所だぜ！」と、硬化した巨大な便塊が肛門をいっぱい押し広げて表に迫り出す様子を眺めながら笑い声を上げるのであった。

男達の卑猥な言葉を全身に受けて、女達が涙に咽びながら、苦しい排泄行為に汗を浮かべ、強く下腹を息ませ排泄行為を続けた。

石のように硬くなった便塊が待ち受ける洗面器の中に落下して、コトリと音を立てた。

その音に男達から大きな笑い声が上がった。

出口を塞いでいた硬く大きく育った便が放出され、排便が楽になったのかニユルニユルと次の便塊が迫り出して来た。

「こら！もっと尻を広げないと糞が尻にへばり付いて旨く出ないだろう！」

自らの手で強制的に尻を広げさせている女達に一層の羞恥を与えるように、更に尻たぶを広げて肛門の周囲を露わにするように命じるのであった。

好奇の目で二人の女の排泄図を凝視する周囲を取り囲む男達が、また出た！また出て来た！と、はしゃぐ様に歓声を上げていた。

元の子分達の目の前で笑い者になりながら排泄姿を晒す母親とお竜の酸鼻な姿に暁美が堪え切れず両手で顔を覆って泣きじゃくっていた。

そんな惨めな暁美の姿に気を取られることもなく、晴江とお竜を取り囲んだ男達は、美熟女の晒す羞恥姿に卑猥な笑い声と歓声を上げ続けていた。

最初の水分を失い硬化した便が排泄し終わると、その後から柔らかい便がドロドロと流れ出て来た。

「ヘッ！何だかんだ言ってもこの量はどうでえ？次から次から放り出してくるじゃないか！ズッシリと重くてもう持っていられないぜ！」

「それにしてもこの臭いはどうだ？」

洗面器を抱える男が顔を蹙めさせながら叫んだ。

「糞の臭さも親分級だぜ！」

「このアマ！うんと臭い物を嗅がして裏切り者の元の子分に復讐するつもりなんじゃないか？」

「ヨッ！どうなんだよ？」

と、羞恥に身を染めて身悶えながら排出を続ける元の親分の妻を取り囲んで毒突くのであった。

晴江のモノを受けた洗面器にも、お竜のモノを受けた洗面器にも黄褐色をした大量の便が蜷局を巻いていた。

「お前達、いい加減にしろよな！こんな汚くて臭くて重いモノを直ぐ近くで受けなきゃならない俺たちの身にもなって見ろよ！」

と、次々と後口から絞り出される汚物に顔を蹙めながら毒づいた。

そんな男達の下劣な言葉廻りに、アアーッ！ご免なさいーと、涙ぐみながら謝るのであった。

衆人環視の中で、恥ずかしい排泄シーンを野卑な男達の好奇な目に晒さなければならないと云う激烈な羞恥心に全身は火の様に熱くなり、意識がボーッと、クラクラと目眩を感じていた。

その朦朧とする中で男達の下卑た言葉で詰られる間に、何時の間にか、男達の刺すような視線や息遣いに誘起され、まるで妖しげな媚薬を嗅がされたようにジーンと脳髓が痺れ、得も言われぬ不思議な恍惚感の様なものが淫蕩な血潮の渦巻きと共に込み上げて来るのであった。

自分でも理解出来無い不可思議な陶酔感に襲われ、次第に股間が熱くなってきた。

それは、晴江自身も意識していないことであつたが、銀子による肉体改造が成果を発揮し

始めている証であった。

晴江の体調の変化を目敏く見付けた男が、

「おい！このアマ、糞を放り出しながら感じているんじゃないか？」

と、驚いた声を上げた。

「ホントだ！赤貝が汐を噴いたみたいに割れ目が濡れているじゃないか？」

「嘘だろう？さつきの小便じゃないか？」

大便を排泄しながら感じてしまうという事が信じられないと、ばかり声を上げた。

「小便なんかじゃないぜ！本気のオネバだぜ！」

晴江の前に回った男が股間から滲み出た透明の液体を指に掬って糸を引く様子を見せ付けた。

唾棄すべき男達の前で惨めな排泄姿を晒しながら感じてしまった事を知られてしまい。顔を真っ赤に染めて、ああー！いやー！とナヨナヨと首を振りながら泣き声を上げるのであった。

その様子を見詰めて、連日の激烈な肉体調教と羞恥責めの末に、とうとうヤクザの組の頂点にいた男勝りの女侠客も被虐の喜びに目覚め始め、男達から理不尽な虐待を受ける事に喜びを感じるマゾ牝の道を歩み始めたと確信する銀子であった。

数日間に渡って女達の大腸内に蓄積され、内側からジワジワと苦しめていた大量の汚物をすっかり放出し終えた事を確認した男達は、^{うずたか}堆く便が盛り上げられた洗面器を女達目の前に見せ付けた。

二人は湯気が立ち昇る様に悪臭を放出し続けるドロドロとした醜怪な物から思わず目を背けたが、男達は嵩に懸かって、お前達の身体から出たモノじゃないか、良く観てみるーと、洗面器を二人の鼻先に押し付け、固く閉じた臉を無理矢理こじ開けて、敗北感に咽び泣く女達に見せ付けるのであった。

そんな恥辱に咽ぶ女達に対して、大姐の放り出した方が量が多いとか、いやいやお竜姐さんの方が多とか、大姐の方が臭いが強烈だとか、二人の女の羞恥心を掻き毟る様に洗面器に盛り上げられた物を目にして揶揄し続けるのであった。

花電車の修行

暁美に続いて晴江とお竜が排泄した汚物の始末が終わって一段落した所で、銀子が気を付けた姿勢で直立する三人の女の前に立って宣言する様に言った。

「^ボ剛沢^ス親分の命令で今日から、みんなには花電車のテクニックを覚える練習に入って貰うわよ！花電車と云うのは、みんな知っていると思うけど、女の最大の武器である其処を使ってする芸よ！」

と、スリムなピッチリとしたジーンズを穿いた自分の股間を指先で上下になぞりながら言った。

銀子の口から「花電車」という言葉を聞いて、晴江とお竜は、思わずハッとした表情を浮かべ、見る見る顔色を失って行った。

晴江も目高組の大姐として奈和組長を支えていた時には、組にとって重要な人物を接待するために夜の女を使って待てなし、時には宴席にその手の商売女を呼んで、女性器を駆使した下劣な芸を披露させて賓客の歓心を買った事が在った。

そんな席には度々お竜も呼ばれて、目高組の用意した濃厚な接待に好相を崩す客に併せて、花電車の女が繰り出す卑猥な芸に歓声を上げた経験が在った。

晴江もお竜も大切な来賓の機嫌の損ねないように、すっかり酒が回って花電車の女が繰り出す珍芸に下卑た高笑いをする男に併せて、手を叩いて笑いさざめいたものではあったが、心の中では、例えそれが仕事とは云え、男の目の前で喜々として女性器を使った浅ましい芸を披露する女に同性として強い嫌悪感と幻滅感を抱いて、表では歓声を上げながらも、心の奥では蔑んだ目で見ていたものであった。

所が、あのような汚辱に満ちた芸を今度は自分達が男の前で演じなければならないのかと想像すると耐え難い汚辱感と恐怖感が込み上げて来てガタガタと身体を震わせるのであった。

その様な裏の世界を知らない暁美であったが、母親とお竜の様子から何かとてつもない厄災が降りかかる事を意識した。

青ざめる女達の様子を無視して、銀子が喋り続けた。

「並の女ではとても出来ない様な高度の技術を覚えなければならないから、そのために花電車のプロの先生を呼んであるのよ。私の場合は親切にもタダで教えて上げてたけど、その人はあちこちからお座敷に呼ばれている現役のプロなのよ！忙しい中でわざわざ予定を空けて来て貰うんだから、花電車の技術の講習料として1時間当たり10万円払わなけれ

ばいけないのよ。半額は大亜門戸会で持つけど残り半額はみんなから授業料として取るから、早く技術を身に着けないと借金の上乗せになるわよ！」

銀子の調教により三人に名器の素質があり、花電車と呼ばれる女性器を駆使した卑猥な芸を習得できる素質がある事に気付いた剛沢が命じたのだと理解出来た。

これまでも銀子から過酷な性の技術を仕込まれてきた女達であったが、更にどのようなおぞましい芸を教え込まれるのかと思うと不安そうな顔になった。

女達の不安そうな表情を無視して、銀子は、「それじゃ先生を紹介するわ。」と、言った。

若い三下に案内されて、髪を赤く染めた、けばけばしい格好の女が調教室に入って来た。

40半ばを過ぎていると見える、意地の悪そうな陰の在る狐顔をした、中背の細身の女であった。

脚の線が見えるピッチリしたブルージーンズには、刺繍やキラキラと光を放つ細かなガラス飾りが沢山縫い付けられており、上半身はラメの入った派手なピンク色のスウェットを着ていた。

今日は男の前で披露する商売では無いためか、ほとんど化粧化の無いスッピンであったが、その外観から発する感じは、普段は厚く化粧を盛り上げ、毒々しく飾り立て男に体を売っているたぐいの女で在ることが直ぐに理解出来た。

「紹介するわ、綺囉囉(キララ)姐さんよ。」

銀子の紹介を受けて、綺囉囉と呼ばれた女は、晴江達を取り囲む男の輪の中に入って来て銀子の前で立ち止まって挨拶した。

「銀子ちゃん、お久しぶりだわね！暫く会わない内に、また一段と綺麗になったわね！」

「綺囉囉姐さんこそ、何時までも若くて綺麗だわ！」

綺囉囉のお世辞に、銀子も歯の浮くようなお世辞で返したが、

「あら、お上手ね！それで今日から私が教えるのは、そこの女達なの？」

と、笑顔を消すと事務的な冷たい表情となって、目の前に一列に直立する三人の女を一瞥した。

「そう、そこの三人の女に綺囉囉姐さんの花電車の技を伝授して上げて欲しいの・・・」

「そうね・・・私も歳を取って、ここの筋肉も柔軟性が落ちて来ているから、使い物にならなくなる前に誰かに私の技術を受け継がせたいという気持ちは在ったのよ。でも、私の技を覚えられる人間なんて、この世界で銀子ちゃんくらいしか居ないと思っていただけ、そこの女達に覚えられるのかしらねー？」

目の前に直立不動の姿勢で立つ女達の体をじっくりと嘗め回すように見ながら、訝しげな声を上げた。

「大丈夫よ！私が鍛えて素質が在ると見抜いた女達だから・・・ちょっと、この女達の能力をお見せするわ！」

と、近くに居た若い男に命じてバナナを取りに行かせた。

晴江も目高組というヤクザ組織の大姐として多くの売春婦を抱え、女体の酷使を強制して金を稼がせる裏稼業にどっぷりと浸っていた訳であるから、綺囉囉という名の女性器を使った下劣な芸を男達に披露する女の事は、以前から知っており、これまでも実際に複数回目高組の主催する宴席に呼んだこともあった。

その時はショーに出演するために、顔に白粉を盛り上げ、派手な化粧をしていた女がいた事を憶えているが、今の化粧気の無い素顔を見ると、とても同一人物とは思えなかった。お座敷に呼ばれた時は、奈和親分や賓客に精一杯の愛想笑いを浮かべ、卑屈なまでペコペコと頭を下げて愛想を振りまいていたが、素顔の綺囉囉は細い冷酷そうな目を持った陰険な表情が覗えた。

同じ女として堪えられない様な羞恥の芸を職業とする、これまで軽蔑の目で見ていた女が今目の前に現れた事に、まるで地獄の使者を迎えた様にゾッと震え上がるのであった。

「それにしてもこの部屋少し臭うわね？」

綺囉囉が鼻をクンクンさせながら呟いた。

女達の身体から排出されたモノは既に綺麗に片付けられていたが、未だ地下室の中にはわずかに異臭が残っていたのだった。

そんな綺囉囉の鼻を使う仕草に女達が羞恥に瞬間顔を赤く染めピクッと身体を振るわせた。女達の僅かな変化に目敏く気づいた綺囉囉は、全てを理解したように突然甲高い声で大きな声で笑い始めて、「この満座の男達の前でウンコが出来るくらい度胸が在るなら、花電車みたいな恥かき芸も覚えられるかも知れないね！・・・この芸を覚えるためには、恥ずかしいとか何だとかの人間性は全て投げ捨てないと覚えられないのよ！」と、甲高い声で叫んだ。

その間にも大ぶりの大量のバナナが用意されて来た。

「ほら！あなた達のそこの具合を綺囉囉姐さんにお見せするのよ！」

銀子の命令を受けた三人の男が、果物籠に山盛りになったバナナの中から特に固くて太そうな物を物色して手に持つと、気を付けの姿勢で立つ女達の前に腰を降ろした。

男達は口の端に卑猥な笑みを浮かべながら無言で、まだ青みの残るバナナの皮を半分ほど剥き上げた。

男性器を思わせる、剥き上げた太いバナナを手にして、女達に見せ付けるように、

「お前達、今日はまだ朝ご飯を食べてないんだろ？これから俺たちが美味しいバナナをご馳走してやるぜ！・・ほら！アーンと口を開けな！」

もっと股を開かないと食べられないだろうーと、女達に十分に股を開かせ、自分達の方に向かってへっぴり腰の姿勢を取らせた。

女体の中心部に押し当てられたバナナを、まるで軟体動物の口腔のように、自らの柔肉を開いて迎え入れ、男が無理に押し込まなくても、吸引するようにバナナの実を体内に収めて行く姿に、女達の股間にバナナを押し当てていた男達も、驚きを隠せないように、声も上げられず、生唾を飲み下しながら目を瞠って眺めていた。

綺囉囉と呼ばれた女は、女達がバナナを自らの力で体内奥深くまで吸い込む様子を、冷たい目で観察していた。

「ほら、次は下の口でバナナを噛んでみる。」

バナナの白く剥き上げた実の大半を体内に収めたのを確認した男達が、興奮の余りかすれたような声で命令した。

女達が眉根の皺を寄せて、ウツと下腹を緊張させると、先端数センチがまるで囓り取られたように姿を消したバナナが男達の手に残った。

どう？大したモンでしょ！と、言いたげに銀子が横目で綺囉囉の方を覗いた。

綺囉囉は、表情も変えず、その様子をじっと見ていたが、ふとバナナを切り終えた女達に向かって歩み始め、女の前に陣取っていた男の肩を押して退かせると、腰を屈めて女達の股間の様子や、男が手にしていたバナナの食べ残しを手にして、その切り口を確かめるようにじっくりと観察していた。

綺囉囉は、無言でお竜の股間の下に右の掌を上にして差し入れ、左手でお竜の下腹をポンポンと軽く叩いた。

綺囉囉の意図を察したお竜が肉洞の筋肉の緊張を解いて、肉洞の襞を蠢かせて、体内の物を押し出すように働かせ、綺囉囉の掌の上に食いちぎったバナナの破片をポトリと産み落

とした。

相変わらず無言のまま真剣な表情でバナナの破片を見詰め続けていた綺囉囉は、次に晴江から、そして暁美から食いちぎったバナナを排泄させ、じっと観察した。

「ふーん、この姐さんは中々スジが良さそうだね・・・」

お竜の方を見つめながら、綺囉囉が始めて口を開いた。

「こっちの大姐は年も年だし、今後筋肉も衰えて行くだろうし、ここの筋肉を一から鍛え直す所から始めなきゃならないから、大事になりそうだね・・・きつい修行になりそうだよ・・・この若い方は、今後の訓練次第というところかね・・・」

不安そうな表情で綺囉囉の方を見つめる晴江と暁美に向かって言った。

「バナナ切りなんて花電車の技の中では、初歩の初歩だからね！ 貴方たちは、ついこの間までは、大きなヤクザの組の大姐とお嬢と賭場を任された幹部級の女胴師だったと、銀子から聞いたけど、そんな事は一切関係ないよ！ わたしや剛沢親分から貴方たちを立派な花電車のスターにするよう言いつかって来たのだからね！ 元はどんなお偉い女だったかは知らないけど、手加減はしないよ！ これから私の持てる技の全てを貴方たちに伝授するから、修行が苦しいからって音を上げてても容赦しないよ！」

と、鬼の様に厳しい表情になって女達に宣言するのであった。

男達に命じて、打ちっ放しのコンクリートの上に一枚の畳を敷かせた。

その畳の上に綺囉囉は等間隔に5枚の百円玉を並べ始めた。

何を始めるのかと、訝るような見物の男達の視線も気にならないかのように、準備が終わると、やおら履いていたジーンズを脱ぎ降ろした。

その下は、艶々と輝く鮮やかな赤いシルクのTバック姿であった。

上半身はスウェットを着たままで、白く柔らかな双臀の間に食い込む、絹で出来た艶々と輝る赤禪の様な細い布地を白い股間に纏っただけの綺囉囉の姿に男達の目が思わず釘付けとなった。

男達が綺囉囉の突然の行動に驚きの声を上げるのも気にならない様に、そのまま僅かに股間を隠してただけの布切れも惜しげもなく脱ぎ去った。

歳の割に弛みの無い、若々しく柔らかい豊かな肉を置いた尻周りや、綺麗に剃毛された白い剥き出しの深い股間の谷間が男達の目に映り、思わず男達が生唾を呑み込んだ。

下半身を剥き出しにしたまま、男達の視線の中で、誇示するようにふくよかな尻を左右に振りながら畳の方に向かうと、見物人の方に無毛の股間を大きく拡げてその陰裂を晒して、そのまま畳の上に置かれた硬貨の上に腰を落とした。

綺囉囉の柔らかな女性器と畳が密着する様子が男達の目に映った。

そして、綺囉囉が再び腰を上げた時、畳の上に在った硬貨は姿を消していた。

啞然とする男達を無視して、何事も無かったように次の硬貨の上にしゃがみ込むと、次々と硬貨を体内に呑み込んで行く綺囉囉であった。

その綺囉囉の妙技の前に、喝采を上げる事も忘れて、ただ驚愕して声も無く見詰める見物人達であった。

全ての硬貨を体内に吸い込んだ綺囉囉は、畳の上に尻餅をついて座り、男達の方に向けて股間を全開にした。

パツクリと開いたその股の中心には、飾り毛を剃り上げられ、はっきりとその姿を晒す秘所が、硬貨を膣内に収めている素振りも示さずに佇んでいた。

「それじゃ、行くわよ！」

啞然とする男達に向かって綺囉囉が艶然と微笑むと、突然秘所から一枚の硬貨が発射され、取り巻く男達の足元のコンクリートの床の上に落ちてチャリンと音を上げた。

それに続いて、剥き出しの秘裂を一心に見詰める男達の方に色々角度を変えて、一枚ずつまるで大砲のように硬貨を発射した。

その綺囉囉の妙技に男達は思い出したように歓声を上げて手を叩いて応えた。

演技を終えて何事も無かったような表情の綺囉囉は、青白い顔で呆然として自分の方を見詰める女達に向かって、

「何をボンヤリしているの？これから貴方たちが、この技を覚えるのよ！」

と、厳しい口調で言うのであった。

綺囉囉の花電車の技を目の当たりにして、男と性交渉するためだけに在ると思っていた自らの性器を自在に操って演じる卑猥な芸に嫌悪感を憶えつつ、これから自分達の身に降りかかって来るであろう災いに恐怖感を感じて、堪えようにも身体がブルブルと震えてくるのであった。

「アアッ・・・そんなことはできません・・・」

晴江が青ざめた顔で小さく悲鳴を上げるように声を上げた。

その怯えた表情の晴江達をキッと睨み付けた綺囉囉は、無言で銀子の手になっていた鞭を取り上げると、

「お前達は馬鹿じゃ無いかい！？ わたしゃ出来るかどうかなんて、お前達の意見を聞いているんじゃ無いだよ！まだ何もしない内から出来ませんとはどういう了見だい？わたし絶対にお前達にやらせるからね！」

と、大声を上げながら晴江に鞭の雨を降らせるのであった。

綺囉囉の剣幕に怯えたように晴江は何も手出しが出来ず、ただ悲鳴を上げ、泣き叫び、綺囉囉の振り下ろす鞭の激痛に身悶えるのであった。

「どうせ、あんた達は覚えていないだろうけど、昔、目高組の座敷にも何度か呼ばれた事があるんだよ！その時、あんた達が人のことをまるで不潔なモノを見るような蔑んだ目で見っていたのを今でも覚えているよ！なにさ！今まで上の方に居て偉そうに人のことを見下していた気位が、こんな下等な芸を憶えることを邪魔させるのだろうけど、そんなプライドなんか消し去ってやるよ！」

と、これまで溜まっていた劣等感が怒りに変わり、ヒステリックに叫びながら、かつては暴力団社会のトップに君臨していた女に、反抗心が完全に失せるまで鞭を振るい続けた。見物の男達は、その様子を眺めながら、かつては荒くれ男達を顎で使って来た女親分もこの花電車の女の前では形無しだなと思うのだった。

その日の綺囉囉による過酷な花電車のトレーニングがようやく終了し、グッタリと放心状態のまま両側から男達に担がれるようにして自分達の檻に連れ戻される女達であった。

朝から夜遅くなるまで責め立てられ、厳しいトレーニングの間に何度も意識を失ったことがあったが、鬼の様な調教師は、手を休めることなく朦朧となった女達にバケツに入れた水を浴びせたり電気ショックを与えるなどして覚醒させ、ぼろぼろになった女体に容赦無く異物を突き立て責め立て、花電車の技術を習得するよう調教し続けたのだった。

意識は朦朧となり、体は綿のように疲れ切り、腰はジーンと痺れたように麻痺して、立つて歩くことも出来ず男達に支えられるようにして牢に戻される女達であった。

「どうした？どうした？音に聞こえたお竜姐さんや目高組の大姐ともあろう者が、あれしきの調教で腰を抜かしたのか？」

両側から肩を支える男達が面白そうに脱力してまともに立つことも出来ない女達をからか

った。

「しかし、お前達も本当に好きな奴らだぜ！調教の間中、本気汁をダラダラ垂らして、潮を吹きながら何回も気をやりやがってよ！」

と、血の気も失せて放心したような状態の女達を、なおもからかい続けるのであった。女達の無抵抗を良いことに、空いた手で女達の乳房を揉み上げたり、尻を撫で回したり、秘所を押し開いて指を入れたりしたが、最早女達は男達の悪戯にも気が回らない程全身が疲弊していた。

「しかし、花電車の修行とはああゆう風にやるのか・・・」

と、女達を取り囲み、檻に向かう男の一人が、いまだに興奮醒めやらぬと言うような顔で、その調教の様子を思い返すのだった。

「さあ、これから手を使わず、アソコの手だけでこれを吸い上げるのよ！」

コンクリートを打ちっぱなしにただけの床の上に3枚の畳がそれぞれ間隔をおいて敷かれていた。

女達の目の前に敷かれた畳の上に、直径4センチ程の木製の球とプラスチック製の球とガラス製の球を一行に並べて、綺羅囉が命令した。

女達は逆らっても無駄なことを理解して、大人しく自分の目の前に敷かれた畳に歩み寄ると、一行に並べられた球の上で股間を開き、そのまま腰を沈めて、球の上に柔らかな秘裂を押し付けて行った。

綺羅囉は畳に顔を押し付けるようにして、女達の割れ目が開き、軟体動物の口腔が餌を食るように木製の球体を吸引していく様を観察していた。

周囲で見物する男女も綺羅囉を真似て、体を屈めて女達が捕食する様を生唾を呑み込みながら見続けた。

ようやく木製の球を体内に収めた女達が立ち上がって次の球体に向かった。

「ほらほら！襞々の間から玉が顔を見せているよ！もっとちゃんと腹の中に入れていか！」

晴江の股間から僅かに球面の一部を見せているのを目敏く見付けた綺羅囉が乗馬鞭で晴江の下腹を叩いた。

柔らかい下腹を鞭打たれた激痛に一瞬息を呑んで堪えた晴江は、必死に下半身を揺すって内部に吸引しようと努めた。

「ほらほら！他の二人は次の玉を呑み込んでいるよ！早くしないか！」

動作の遅れた晴江に再び鞭を振り上げた。

「しかし、もっとサクサクと呑み込めないものかね？そんな小さな玉を腹に入れるのに何をもたもた時間を掛けているんだい？」

と、鞭を振り上げると女達の尻を打つのであった。

ようやく三個の球を体内に収め、酷使した筋肉の疲労と膣内から込み上げる異物感にハアハアと息を吐きながら、腰をモジモジとさせる女達を眺めながら、綺囉囉が大声を上げた。

「どうだい？木の玉とプラスチックの玉とガラスの玉を下腹に入れてみれば、流石に鈍感なお前達のアソコでも、表面の感触と重さから違いが分かるだろう？・・・まずお腹の中で三つの玉を良く掻き回して、これから私が言う通りの玉を吐き出すんだよ！」

肉洞の感触で違いを見分けて、その部分の肉を使って別々に産み分けさせようとする綺囉囉の意図を察して女達の顔がさっと青くなった。

「ほら何をモジモジしているんだい？こんなこと女なら誰でも出来るお遊びみたいなもんさ！先ず三個の産み分けが出来るようになったら次はゴムの玉を混ぜて4個の産み分け、それが出来たら鉄の玉を加えて5個の産み分けだよ！次にはそれぞれの材質で大きさの異なる玉を産み分ける練習だよ！・・・先ず最初に木の玉を吐き出してご覧！さあ、時間が無いからもたもたしている暇は無いんだよ！」

と、女達に向かって厳しい顔で声を上げた。

三人の女は綺囉囉の勢いに押されて、命じられるままに下腹に神経を集中して胎内の玉を選り分け産み落とそうと努めた。

その様は、へっぴり腰の姿勢となり、見物の男達に向かって股間を晒すような姿勢となり、腰を前後左右に隠微に振りたてる姿となり見物の人々から好奇な笑いを誘ったが、綺囉囉の鞭で煽り立てられている女達には最早羞恥を感じる余裕すら無かった。

「ほらほら！何をモタモタしているんだい？まだ産めないのかい？」と、産むのが遅いと、鞭で尻を叩くのであった。

綺囉囉の鞭に追い立てられ、野卑な男達の視線に滑稽な姿を晒す羞恥も忘れて、全身に玉のような汗を浮かべて胎内の魔物と格闘する女達であった。

突然プツと晴江の秘門が開き、木とガラスの玉が畳の上に転がり落ちた。

「何をやっているんだい！わたしゃ木の玉だけを出せと言ったんだよ！二個同時に出せとは言って無いよ！」と、癩癩を熾したように晴江の尻を容赦無く叩いた。

曉美は木の玉を選び分けた積もりでプラスチックの玉を排出してしまった。

「お前は馬鹿じゃないのかい？わたしゃ木の玉と言ったんだよ！木とプラスチックの違いも分からない程、お前のマン●は鈍いのかい？」

と、容赦無く罵声を上げて鞭を振るうのであった。

ほんの少し前までは、ヤクザの組の頂点に立ち、人々から恐れられていた女達が、自身の性器を使った卑猥な芸を演じることを生業とする下賤な女に、殴られ罵声を浴びせられながらも逆らう事も出来ず、涙に咽びながら、猥褻な芸を仕込まれる姿は居並ぶ見物人に痛切な快感を呼び起こした。

綺麗囃に怒鳴られ鞭を浴びせられながら、人間性をかなぐり捨てたように必死になって産み分けしようと身悶える女達を見物の男女が楽しそうに眺め続けるのであった。

少し女達が上達し、産み分けの技を会得したとしてもそれに満足することなく、休む間も与えず胎内に含ませる玉の種類を増やし、なおも産み分けの訓練を強制するのであった。女達の肉洞を占拠する数々の球体は、嫌が上にも女達の性感を掻き揚げ、女達が腰を蠢かせる度に内部から妖しい刺激を与え続けた。

全身汗塗れになって球と格闘する、顔を真っ赤に染めた女達の口から不意にハァという甘美な溜息が漏れた。

女達が下腹の筋肉を駆使して球体の選別に没頭している内に、敏感な女体の秘肉が感じ始めている様子は、股間から流れ出した大量のネトリとした粘液で見物人には良く別った。まるで膣内から込み上げる快感に陶酔したように、膣口から粘っこい淫液の糸を引きながら淫靡に腰を身悶えさせる女達をゴクリと生唾を呑み込みながら見守った。

とうとう我慢の限界に達したお竜が夥しい愛液をどっと放出して、意識を失ったように畳の上に崩れ落ちた。

それにつられたように他の二人も、突然秘孔から何個もの玉を吹き飛ばし、止めの潮を吹き上げるとそのまま倒れた。

「お前達は本当に馬鹿じゃ無いのかい？誰がお腹の中の玉で遊んで、良い気持ちになれと言った?!」

と、畳の上で絶頂を極めた後の痺れたような感覚にピクピクと体を痙攣させる女達を見下ろして罵声を上げた。

女達が完全に意識を飛ばしてしまって、何時までも起き上がろうとしない様子に業を煮やした綺囉囉は、「水を持っておいで！頭から水をぶっかけて眼を覚まさせるんだよ！」と、男達に命じるのであった。

そして、全身に冷たい水を浴びせられ、強制的に覚醒させられた女達の股間に無理矢理調教用の玉をねじ込もうとした。

綺囉囉の無慈悲な行為に女達は体を曲げてヒステリックな悲鳴を上げ、泣き叫んだが、鬼の様な女は鞭を振り上げ泣き止むまで打ちのめした。

その後も休む暇も与えられず、意識を失う度に水を浴びせられて、度々襲い来る絶頂の陶醉感に浸る贅沢も与えられず調教を続けられた三人であった。

とうとう最後には獣の叫び声の様な意味不明の絶叫を発して白目を剥いて口から泡を噴いて床の上に崩れ落ちてしまった。

完全に意識を失い床の上で体液という体液を垂れ流して全身を痙攣させて横たわる女達を起こそうと、殴ったり蹴ったりする綺囉囉であったが、完全に昏倒状態に陥り起き上がらない女達に溜息を吐いて見下ろすのであった。

周囲で見守る男達もこの鬼気迫る景色を目の当たりにして、恐怖心の様なものが込み上げ、このまま発狂してしまうか死んでしまった方がこの女達にとって幸せなのでは無いかと思うのであった。

綺囉囉は、まるで元目高組の三人の女を人間として見ておらず、まるで犬や猿を調教するように暴力と恐怖で支配し、技を仕込み続けた。

来る日も来る日も調教は苛烈さと難易度を増し、女達は最早人間としての正常な意識も無くしてしまったように、一日中一言も言葉を発する事も無く、下腹から込み上げる苦痛と怪しげな感覚に責め立てられて、まるで発狂したかの様に意味不明の叫び声を上げたり、堪えようの無い苦痛に泣き叫び悲鳴を上げながらも、綺囉囉の暴力に煽り立てられるまま、汗と涙と粘液に塗れながら、自分の性器一つを頼りに荒れ狂う嵐の海の中で藻掻き苦しむ様に花電車の芸の習得に打ち込むのであった。

少しでも不服従の態度を示すと皮膚が裂け血が噴き出すまで鞭打たれ、動作が遅いと殴打され、激烈な調教に意識を失っても、少しも休む暇も与えられず水を浴びせられて 覚醒させられ、ほんの一瞬たりとも人間としての正常な意識を持つ間も与えられず、狂った様に自身の性器を駆使した苛烈な艶技を仕込まれるのであった。

その日の過酷なトレーニングが終わり、自分達の檻に連れ戻され、柔らかなベッドの上に死んだように体を横たえることが出来た時、やっと休息が出来ると安堵する女達であった。しかし、一日の肉体の訓練が終了したとは言え、一日中酷使した三人の女の股間は、異常に燃え上がった興奮状態から未だ醒めやらずにいた。

三人の女は、何時の間にか、股間から突き上げる違和感や苦痛を快感に変えて股間を濡らす能力を身に付け、常に股間に何かを受け入れて体内から性的刺激を受け続けていないと、物足りないような、銀子の望む娼婦性を持った女へと肉体的にも精神的にも改造されつつあったのだった。

一日の調教が終わった後も、寝ている間もソコを鍛えるためと、卑猥な陰具を銀子達に挿入されて眠りに就く毎日であったが、何時の間にか無意識の内に、その陰具を熱を帯びたままの熟んだ秘肉に押し込められることを心待ちにしている女達が居た。

「今晚からこれを着けて貰うわ。」

何時ものように三人を牢に押し込む前に、銀子が手に提げていた紙袋をガサゴソと掻き回し、何やら取り出そうとしていた。

女達は、また新たな攻め道具を銀子が取り出すのだろうという、半ば諦めの気持ちで溜息を吐きながらも、長時間の調教で、未だに熱を帯びたまま興奮状態を継続させている股間の柔肉が、自分の心を裏切って、何かを期待するようにジュンと痺れたのを感じて驚くのであった。

銀子は紙の手提げ袋から端にビニールコードのついた太くて大きな張形を取り出した。ビニールコードは黒くて四角いプラスチックの箱に伸びていた。

「リモコンバイブよ、無線コントロールでこの地下室に居る限り、何時でも何処からでも責められるのよ。」と、嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

男達に手伝わせて、無理矢理リモコンバイブを胎内に収めると、次に直腸内を責める、2個の玉が紐で連結された性具を手にした。

玉の直径は4センチ程になっていた。

「この玉も一つずつが振動するのよ」と、女達に見せ付けながら説明した。

「薄い粘膜一つを通して、前と後ろから同時に振動を受けたらどんな気分になるかしらね？」と、不安に怯える女達の目を覗き込みながら銀子が意地悪く言った。

玉の大きさに狭い入り口を通過する際に女達は悲鳴を上げた。

疲弊し切った女体を更に酷く責め立てようとする銀子の非情さに全身で身悶え、大声で泣き叫んだが、そんな女達の儂い抵抗を無視するように、無理矢理全部の玉を没入させると性具から伸びていたビニールコードの先に取り付けられたジャックを先ほどのプラスチックの箱に接続した。

そして、性具が飛び出さないように、いつものように革製のT字ベルトで股間を塞ぐと、股の間から垂れたケーブルに接続したプラスチックの箱を箱に取り付けられているベルトにより内股に固定した。

そして、何時ものように両手を手枷により固定して、ベルトを触れないようにした。

「これで全て良し」と、銀子が喜色を浮かべて手を叩いた。

「ちょっとテストしてみようか？」

リモコンのコントローラを持つ若い男に声を掛けた。

と、男がスイッチを入れると途端に激しい振動が、女達の股間を襲い、女達は悲鳴を上げて体を振った。

「振動を強くも弱くも出来るのよ」

と、言いながら、男に最強の振動まで上げさせた。

前を襲うパイプと後ろの2個の玉がそれぞれ勝手に荒れ狂い、薄い膜を通して二つの性具がぶつかり合う激痛が襲った。

振動を最弱にするとかすかな振動が二つの快感の源泉に優しく刺激を伝えた。

「ちょっと雑音に弱いようで、前の道路をダンプが走ったりすると、突然動き出すことがあるみたいだけど勘弁してね・・・」

と、言い残すと、男達をズロズロと引き連れて立ち去っていった。

女達を閉じ込めた牢舎から誰も居なくなり、灯りを消されて、静寂の闇に辺りは包まれた。

股の間から込み上げる違和感に襲われながらも、昼の激しい調教の疲れで肉体は綿の様に疲弊していた。

布団にくるまれ漸く深い眠りに就いた時、突然胎内を激しい振動が襲い、女達は眠りを破られ悲鳴を上げた。

振動は前触れも無く突然始まり、強くなったり弱くなったり繰り返す、昼間の調教で疲労困憊している女達を有無を言わず、快感の淵に投げ込むかの様に煽り立て、絶頂の寸前まで追い立てながら、唐突に終了した。

体を動かすのもままならない程疲労し切った体を無理やり茨の道を引きずり回すように責め回し、ようやく酷使した肉体へのご褒美として、甘美な絶頂の高みに達しそうになった寸前で、打ち止めにされ、その徒労感は肉体的にも精神的にも、真っ直ぐに絶頂を迎えた場合の数倍に達した。

満たされなかった性欲が彼女たちの心と肉体を責め苛んだが、激しい疲労感を伴う睡魔に再び襲われた。

そして暫くの静寂の後に、再び何の前触れも無く振動が始まり、僅かの間、女達を責め苛いなみ、女達が絶頂に到達しようとする寸前に唐突に終了した。

どうやら、牢内に監視用の暗視カメラが備え付けられ、モニターを見ながら、女達が油断した隙を突いて、リモコンバイブを操作しているようだった。

満たされぬ肉欲の疼きに堪えかねた様に、何時の間にか女達は、姿の見えない敵に向かって呪うような叫び声を上げていた。

何度目かの責めを受ける間に、彼女たちは混濁した意識の中で、抑制の効かなくなった性欲が暴走し始め、飢えた獣が、目の前に投げ込まれた肉片に必死に貪り付く様に、突然バイブが振動を開始すると、必死にそれを喰い絞め、激しく愛液をそれに逆(ほとぼし)らせるようになっていた。

こうして、女達はいつ始まるかも知れないバイブの振動に半ば怯え、半ば渴望して、突然のバイブの振動に理性を喪失して煽り立てられ、覚醒している時も睡魔に朦朧としている時でさえ、常に男性器を受け入れそれを喰い絞めて感じる事が出来るような銀子の云う所の何時も濡れ濡れの肉体に改造されて行った・・・